

プルフォウ・ストー
リー0092 失われたエメ
ラルド

ガチャM

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀0092年。アクシズ親衛隊の生き残りプルフォウは地球にいた。アフリカ戦線でエースパイロットになっていた彼女は、あるとき特殊任務を命じられた。それは地球で身を隠している要人を宇宙に脱出させるというものだった―。

■デザイン協力

アマニア | t w i t t e r @ a m a n i a | o r z

おにまる | t w i t t e r @ o n i m a l 7 8 0 2

かにばさみ | t w i t t e r @ k a n i b a s a m i | t a

ねむのと | t w i t t e r @ n o t o 9 9 9

田舎太郎 t w i t t e r @j e g o t a r o

■設定資料

ティプレ・アン（デザイン：おにまる）

ジエシカ・ローズ（デザイン：ねむのと）

オスカー・ウィルフオード大尉（デザイン：田舎太郎）

※P i x i vにも投稿しています。

目次

第1話「プロローグ」 | 1

第2話「怪物を駆る少女」 | 10

第3話「巨人が住む星」 | 21

第4話「ドッグファイト」 | 32

第5話「クラスメイト」 | 54

第6話「地球に降りた者たち」 | 64

第7話「潜入任務」 | 76

第8話「グリーンハウス」 | 85

第9話「生徒を演じる兵士」 | 99

第10話「兵器を語る二人」 | 112

第11話「モックバトル」 | 123

第12話「家族」 | 138

第13話「偽り者」 | 159

第14話「ウエイブライダーズ」

173

第15話「姫とのコンタクト」 | 183

第16話「脱出計画」 | 202

第17話「渦中の転校生」 | 220

第1話「プロローグ」

プロローグ

「わたしがモビルスーツのパイロット……？」

「そのとおり。マリーベル・リップル、あなたがネオ・ジオン軍の士官だということはわかってるのよ！」

ミーミスブルン学園九年B組。そのクラス全員の目が、転校生のマリーベル・リップルに集中し、彼女はいくつもの好奇と疑いの視線に戸惑ってしまった。

「わたしはご覧の通り学生よ。アニメみたいにロボットに乗るなんて」

モビルスーツとは二十メートルもの大きさを誇る巨大人型兵器のこと。そしてネオ・ジオン軍はその兵器を使って地球連邦政府に刃向う過激な組織。

マリーベルは、鮮やかなオレンジ色の髪が印象的で、その整った顔とスタイルは学園の制服を着こなすのに十分すぎるほどだった。だが、そんな彼女がネオ・ジオンの一員だと疑われているとなれば穏やかな話ではない。

「あなたは、学園近くで戦闘があった次の日にサイド3から転校してきたわね？　タ
イミングが良すぎるのではなくて？　それともサイド3では戦いは珍しくないのかし
ら？」

マリーベルを問い詰めているのは、学園の副生徒会長ティプレ・アンだった。

彼女は人目を引く美しい容姿、そして豊かな薄紫の髪をかき上げる大袈裟なジェス
チャーでクラスメイトの耳目を集めつつ、マリーベルがネオ・ジオンのスパイなのだ
と吹聴していた。転校生に言及しつつも、あくまで主役は自分。それがティプレ・アンの
スタイルだ。

「サイド3は、とても平和なコロニーよ」

「嘘。サイド3では、モビルスーツを使ったテロがあるのでしょ？　ああ、怖い！」
アンはおおげさに震えてみせた。

スペースコロニー『サイド3』は、いまから十二年前に地球連邦と大戦争を繰り広げ
た旧ジオン公国の本拠地である。ジオン公国は戦争に敗北し、いまは地球連邦政府に属
するジオン共和国へと体制が移行していた。だがジオン公国復興を目論む地下活動は、
いまだ活発だと噂されている。ジオンの思想を受け継ぐネオ・ジオンが、転校生を隠れ
蓑に地球に送り込んだスパイ。それがマリーベルなのだと、アンは言っているのだ。

「サイド3でモビルスーツなんてほとんど見なかったわ。作業用のモビルワーカーな

らよく見たけど……」

「あなたはサイド3でモビルスーツに乗っていたのでしょ？」

「さつきもいったわ、乗っていないって！ わたしはエレカだつて運転したことがないんだから」

「十四歳なら当然よね。でも、エレカが運転できなくてもモビルスーツは操縦できるの。案外簡単だそうじゃない」

「子供が軍のパイロットだなんておかしいわ」

「そうかしら？ ネオ・ジオンでは子供のパイロットも多かったと聞くわ。それに地球連邦軍の最初のモビルスーツのパイロット……そう、アムロ・レイは当時十五歳だった。今どきめずらしくはないでしょうに」

「……」

転校してきたばかりで、クラスでの立ち位置が不安定な転校生と、気の強い才女との対比が教室に無言の緊張感をもたらしていた。クラスメイトたちは、この言い争いの成り行きを息を潜めて見守っている。

「あのさ、話に割り込んで悪いけど……」

無言になってしまったマリーベルを見かねたのか、彼女の後ろの席に座っていたジェシカ・ローズが、マリーベルの肩を抱きながら言った。

「なにかしら？　まだわたしの話は終わっていないのだから、邪魔しないでくださる？」

話の腰を折られたアンはジェシカを睨んだ。でも、それに臆さずにジェシカは反論する。

「マリーベルさんがネオジオンのパイロットだなんてありえないよ。だつてさ、こんなに綺麗な顔してるんだよ。軍人つて、もつと凄い表情してると思う……それよりモデルや女優つて感じだよ」

「あ……。そんなことは」

マリーベルは赤面すると、恥ずかしそうに俯いた。

「わたしはプルっちの味方だからね」

ジェシカはマリーベルに微笑んだ。

クラス中の生徒がマリーベルを疑うなかで、ジェシカだけが彼女を擁護していた。マリーベルは宇宙のサイド3から転校してきたから、地球での生活に慣れていないようにジェシカには思えたのだ。

「は？　綺麗な顔ですつて？」

アンは明らかに不機嫌な様子でジェシカを睨んだ。

「もちろんティプレさんも綺麗だけどねっ」

「ふん、わたしは別にマリーベルさんを非難しているわけではないの……。スパイでもパイロットでも、なんでもするといいわ」

アンは肩にかかった髪をさらつとはらいながら言った。

「ただ真実を明らかにしたいだけ。状況証拠から導きだした論理的仮説が、彼女が嘘をついていることを証明してる。だいたい、こんな中途半端な時期に転校してくるなんておかしいと思わないの？」

「そうかなあ。この学園に転校生なんていくらでもいると思うけど」

「いいこと？ わたしはこの二週間のね、宇宙港の全記録を取り寄せて調べたのよ」

アンはマリーベルに向き直ると、バッグからコンピューター・パッドを取り出して、膨大なリストを表示させた。

「そうしたら地球とサイド3からのシャトル定期便はないというじゃない！」

アンは、まるで陰謀の秘密を暴いたかのように得意げに話した。

「マリーベルさん正直に答えなさい。あなたどうやって地球にきたの？ 今の時代、よほどの理由がないと一般市民は地球に降りられないのはご存知でしょう？」

「……えっ？」

ジェシカはアンの説明に心底驚いたようだった。

「ティプレさん、それって本当なの？」

彼女の丸い目がいつもよりいっそう丸くなる。

「ええ本当よ。わたしたちが地球からスペースコロニーに移住するのは簡単。でも、その逆は難しいの……地球はアースノイドで溢れてるんだから」

「じゃあさ、宇宙にいちど上がったら地球には戻ってこれないの？」

「仕事とか、よほどの理由があれば出来るでしょう。でも観光をしたいとか、やっぱり地球に戻りたいとか、そんな安易な理由ではダメよね」

「そんなこと、ぜんぜん知らなかったよー」

「世間知らずを反省なさい。もちろん例外はある。政治家とか有力者とか特権があるVIPなら、ほぼ自由に地球と宇宙とを自由に行き来できるわ」

いつの時代も、権力者は自分たちの都合の良いように法律を作りかえる。つまるところ、それが地球とスペースコロニーとの軋轢を招いたのだが、大戦争を経ても相変わらず地球連邦政府の意識は変わっていないのだ。

アンはそうも説明した。

「あ、そういうこと？ ……ティプレさんは、だからプルっちを疑ってるの？ なら見

当違いだよ。凄い親がいる生徒なんて珍しくないって。だってプルっちのお父様は

……」

「そう、その通り」

アンはジェシカに同意すると、マリールベルの顔をみた。

「マリールベルさん。VIPの子息子女が通うこの学園なら、地球に降りるのは買ひものするくらい簡単なことだと説明する気なんでしょうね？　だけど、それなら副生徒会長であるわたしの耳にも入っているはずなの」

アンは、そこで聴衆の期待を煽るように一息いれる。

「ということとは、あなたは密かに地球に潜入したと考えるのが論理的ではなくてっ！」

アンはマリールベルをピツと指さしながら言った。

マリールベルはその溢れる自信にたじろいだ。

「せ、潜入だなんて……。ちゃんと父がチャーターしたプライベート便で地球にきました。父は商社を経営しているから」

「プライベート便！　ますます怪しいわね……」

アンは演技めいた動作で大袈裟に驚いてみせる。

「だとすれば荷物や目的などはノーチェックじゃない！」

「確かにそうよ。でも、父は地球連邦政府に信用があるわ」

「地球連邦政府なんて汚職の塊じゃないの。信用とは最も縁遠い組織です」

「あなたは何がしたいの？」

「フフン、わたしがひとつ可能性を提示しましょう……。あなたはジオンのシャア・ア

ズナブル大佐から密命を受け、サイド3から工作員としてこの地球にモビルスーツで降りてきたのだわ！」

「なにそれ！ 凄い話になってきたね」

あまりに突飛な説に、ジェシカもさすがに呆れてしまう。

「そう？ でもシヤア大佐はララア・スンっていう少女を部下にしてたそうよ。だったら、あなたのような娘をスパイに仕立て上げてても不思議ではない」

「いい加減にして！ そんな勝手な話、すごく迷惑なの！」

ティプレ・アンの、あまりに空想めいたいいがかりに耐え切れず、マリーベルはついに立ちあがって反論した。

アンは自分の仮説を飛躍させ、あまつさえシヤア・アズナブルという有名な軍人の性癖まで持ち出し、それがあたかも決定的な証拠であるかのように放言しているのだ。彼女は政治家、いや煽動者に向いているに違いなかった。

「で、でもさ、シヤア大佐からの密命だったらちよつと憧れちゃうけどね！ わたしもスパイしてみたいよ、大佐の愛人になってさ〜」

加熱する議論で険悪になったクラスの雰囲気、冗談でなんとか和ませようとするジェシカの努力に、クラスの生徒たちからちよつと無理した笑い声があがった。

だが向き合うマリーベルとティプレの表情は真剣だった。

「ならば皆の前でアリバイを証明してみなさいよ、マリーベル・リップル！」

「そ、そんな。証明だなんて……」

ティプレ・アンの挑発に、マリーベルは本当に困ってしまった。そう、アンの言っていることは、ほとんど正しかったからだ。

でも姫様をこの学園から連れ出すまでは、けっして正体がばれるわけにはいかないのだ。

第2話 「怪物を駆る少女」

1

二週間前 ヨーロッパ大陸

眼下に広がるグリーンの絨毯マット。そうとしか表現できない雄大な森の上を、二機のマシーンが地を滑るような地形追随飛行で猛然と駆け抜けていく。

「大尉、ベルグソンの調子はどうですか？ ひさしぶりの長距離任務です」

「悪くはない。この速度域でも安定してる……良好さ」

その『ベルグソン』と呼ばれる機体は、ネオ・ジオンの本拠地であつた小惑星基地『アクシズ』が開発・製造した試作マシーンであり、見るからに異様な姿をしていた。

まるで海から飛び出した特大のサメやシャチが高速で空を飛んでいるようで、見ようによつてはユーモラスなのだが、その正体は人型の機動兵器『モビルスーツ』が変形した、いわゆる『モビルアーマー』と称される恐るべき戦闘兵器なのだ。

「自分は、その怪物みたいな形は好きではありません」

「そんなことを言っているのか？ モビルアーマーを評して『ジオンの精神が形になったようだ』って、どこかの士官が言ったらしいぞ」

「ジオンの精神？」

この時代、強力なモビルスーツやモビルアーマーは軍の象徴ともなっていた。その意味では、地球に反旗を翻したコロニー国家が、人外の力を借りようと考えたとしてもおかしくはない。

「強固な意志とか気合とか、そんな意味だろう。まあ、マーキングや音などで敵を驚かせる戦術が旧世紀からあるらしいね。あるいは、それに習ったのかもしれない」

「なるほど……」

ジオン北アフリカ方面軍所属のプルフォウ大尉。彼女はいま、とある極秘任務を実行するべく、部下であるエルマン・クレメンズ中尉とともにヨーロッパ大陸を横断中だった。

「中尉、高度に気をつけろよ。このあたりの木は固いんだ。接触したら叩き落とされてしまうぞ」

「了解です」

機体が高速で木々を掠めると、凄まじい風圧で木の葉が舞い上がり、木々にとまっていた鳥たちが鳴き声をあげて飛び去っていった。

『まさか、殺してしまうことはないか』

プルフォウは、森に棲む生物の平穏を乱したことに少し心を痛めながら、球形操縦桿アイムレイカーに軽く左手を添えつつ、パック入りのアイスシェイクを飲んだ。そのバナラ味の飲み物は彼女の好物なのだ。

常識的に考えれば、アイスシェイクを飲んで気軽に飛行できる状況ではない。二機は地球連邦軍のレーダー網を避けるために、超低空飛行をしているからだ。巨大なモビルスーツは、秘密任務という目的には少々目立ちすぎるのである。地面から僅か数メートル上を飛行しているので、少しでも制御を誤れば地面に激突し、たちどころにバラバラになってしまっだろう。

その危険な飛行を可能にしているのは、光学センサーと地形追従レーダー、そして『サイコ・コミュニケーションター』略してサイコミュと呼ばれる、操縦系統とリンクした脳波・機械語変換装置だった。そのテクノロジーの恩恵により、彼女は僅かな微調整をするだけでよいのだ。

「サイコミュの感度は良好。脳波と問題なくリンクしている」

コクピットに搭載されたサイコミュは、パイロットの思考を読み取って増幅し、凄まじい速さで操作に反映させる。究極的には考えるだけで機体が操作できるのだが、残念ながら誰にでも扱えるというわけではない。人間側にも特殊な能力が必要で、感応波を

脳から継続的に出力できる、超能力的な技能が求められるのである。

それは容易なことではない。しかし、プルフォウ大尉にとっては通常のルーティンワークだった。

「燃料消費量にも注意するんだ。燃料が切れたら、野宿をしながら基地に歩いて帰ることになるぞ?」

「万が一のときには、大尉のアイスシエイクを分けてもらいますよ」

プルフォウの部下、エルマン中尉がモニターの向こうから冗談で応えた。

「中尉も欲しいのか? でも分けてはやらないよ。これは貴重品なんだから。空のパックをやるから、水でも詰めて飲んでくれ」

「……本気にしますよ」

「えっ? どういうことだ?」

「いえ、なんでもありません」

「わからない奴だな」

プルフォウは、若干一四歳ながらジオン残党軍のエースパイロットとして名を馳せていた。

《プルフォウ》という少々変わった名前はコードネームで、彼女は生まれた時からそう呼ばれている。

彼女は軍事機密そのものだった。最高機密を意味するA A Aに属する彼女の正体は、トリプルエー遺伝子操作で人工的に人間を超える能力を付加された《強化人間》と呼ばれる超兵士。スーパーソルジャーまるで陳腐なサイエンス・フィクションみただが、強化人間は、空間と時間の認識能力つまり予測能力が非常に高く、パイロットとしての戦闘能力が飛躍的に向上した超人なのである。

プルフォウは、そうした類いの人間を人為的に作り出すプロジェクトの成果だった。着想のきっかけは、この宇宙世紀において自然発生した《ニュータイプ》と呼ばれる異能者の能力を人工的に模倣できないかというもので、遺伝子操作や肉体強化、精神的な操作といったサイバネティック技術を駆使して、そのような類人兵器が産み出されたのである。

だが強化された人間とはオブラートに包んだ言い方で、その実体は倫理的には到底許されない、言葉にするのも憚れる研究。決して公にはならないブラック・プロジェクトなのだ。

誰もが唾棄し、目を背ける後ろ暗い研究は実を結び、ちょうど今から四年前、地球を統べる地球連邦政府軍と宇宙の資源衛星を本拠地とするネオ・ジオン軍との戦闘の際に『プルシリーズ』と称された少女兵士が大勢戦場に投入された。

だが彼女たちの末路は、部隊の全滅という悲惨なものだった――。

『生き残ったわたしは、本当に運が良かったんだ』

都合良く勝手に産み出されて、使い捨てられるだけの人生など、それは人の生き方とは言えない。しかも、その人生に疑問すら持たないように記憶まで調整されたのだ。もちろん父親と母親の記憶などあるはずもなかった。

しかしプルフォウ自身も意外に思うのだが、巨大な人型マシンの腹の中に収まっているとき、彼女はまるで母親の胎内にいるかのような安心を覚えることがあった。遺伝子操作で試験管ベビーとして生まれた人間にとつては、それはどこにも存在しないはずの情報だ。

はたしてどこからくるイメージなのか？

そこで彼女は想像をめぐらせた。

この自分が乗る巨大な機械生物は、自分の腹の中にいる子供を守っているのだ。高度な自律制御で機体を司っている人工知能は、丸い腹におさまるパイロットをサイコミュで認識し、自らの一部である尊い生命を守るために襲いかかる敵と戦っている。動物だつて子供を守るために命をかける。つまり人工的に産み出されたわたしは、モビルスーツが守るべき子供なのだ。

『われながら馬鹿けた妄想だ』

強化人間の鋭敏な感性は、兵士としての能力を最高レベルまで引き上げるが、パイ

ロットの意識を取り込むサイコミュは、人の意識をトレースするがゆえに、人とマシンの境界線を曖昧なものにしていた。あたかもマシンと一体化したような錯覚を生じさせるのである。それがサイコミュを搭載したサイコ・マシンの利点でもあり欠点でもあった。

そんなプルフォウの思考は、部下であるエルマン中尉の緊張を含んだ声によつて断ち切られた。

「再び敵を感知！ ああの機体、まだつけてきます」

「そうか。これは発見されたな」

実は三十分前からセンサーでモビルスーツを探知していたのだが、この動きで懸念が間違いないことが分かった。

地球連邦軍のパトロール部隊に見つかったのだ。

プルフォウはコンソールのいくつかのスイッチを押して、センサーが収集したデータをモニター上に表示させた。自機を中心として半径一・五キロの半円が表示されると、後方千二百メートル上空地点に二つのブリップが明滅していた。

「どうしますか？」

「対応するしかない。発見されてしまつてはな」

プルフォウは飲み干したアイスシエイクのパックをダストボックスに放り込むと、暑

苦しいので外してシート脇に引っかけていたヘルメットを、これから始まるであろう戦闘のためにかぶり直した。

ヘルメットをノーマルスーツ―慣例的にパイロットスーツをこう呼ぶ―のリングに固定し、酸素供給用のホースを背中のバックパックに接続すると、ひさしに付いた小さなレバーを操作して、遮光用に金が蒸着されたバイザーをひき降ろした。この一連の手順は何百回、何千回も繰り返してきたので目を閉じていてもできる。

「戦闘もやむを得ないさ」

そのプルフォウ大尉の熟練した動作を、エルマン中尉はコクピットの全周囲モニターの側面いっぱい拡大して眺めていた。

彼女の素顔が見えなくなるのはとても残念だ。美しいオレンジの髪と青い瞳、シャープで整った顔―。

プルフォウ大尉はジオン残党軍の中でもずば抜けた技量を持っている。地球連邦軍にだって、彼女ほどのパイロットはめったにいないだろう。物量に勝る地球連邦軍に対して、戦力に乏しいジオン残党軍が効果的な反攻作戦を展開できているのは、多分に彼女の力が大きいのだ。

むろん女性兵士が増加した近年にあつては、女性のエースパイロットというのも珍しくはない。だが、彼女の年齢が十四歳だと聞くと決まって誰もが驚いてしまう。可憐な

少女であるプルフォウ大尉が、地球連邦軍のモビルスーツを五十機以上撃墜してきた恐るべきエースパイロットだとは、にわかには信じることはできない。

だが、そんなプルフォウ大尉にとつて今回の任務は少々特殊だ。モビルスーツ戦闘はあくまで前座で、本命はある施設への潜入任務なのである。パイロットと潜入任務、それは決して相容れるものではない。

それがエルマンには心配だった。

「大尉、連邦軍を振り切ったとして、その《ベルグソン》を隠せる場所があるんでしょうか？ 穴を掘って地面に埋めて隠すというのも骨が折れます。発見されれば作戦そのものが失敗します」

「そうだな。モビルスーツで穴掘りをするのも大変だ。《アツグ》でも使えば別なんだが」

「まあ、あのポンコツは穴を掘るしか能がありませんからね。ドリルが両腕に付いてるモビルスーツなんて、戦闘では見世物にもなりませんよ」

「ドリルも意外と接近戦では有用なんじゃないか？ 武器として考えてみてもいいかもしれない」

「戦術研究班に言っておきますよ。でも、実際どうするのです？」

「メガ粒子砲で掘り返すのも手だろうな」

「目立ちませんか？」

「まあ、なんとかするさ……それより敵の様子は？ 動きに変化はないか？」

「通信量が多くなっているようです。おそらく交戦して良いのか上官に問い合わせるんでしょう。積極的に攻撃出来ないのが今の連邦軍です」

「その臆病さが、わたしたちには有利に働くな」

「待つてください！ 敵に動きあり。ベースジャバーが降下してきます」

「フン、我慢しきれずに動いたか！」

プルフォウは後方警戒モニターで敵機の拡大画像を確認した。

ベースジャバーの背に乗るモビルスーツは肩が盛り上がっている。その盛り上がった肩は、よくみるとミサイルポッドだということが分かる。

「ジムⅢだな。ミサイルポッドを装備してる。もう一機は……ビームキャノンを装備しているということは、中距離支援用の砲撃戦仕様か」

RGM-86R《ジムⅢ》は、一年戦争で大量に量産されたRGM-79《ジム》、あるいはマイナーチェンジ型のRGM-79R《ジムⅡ》をアップデートしたモデルで、本フレームは同じだが、ジェネレーターやバックパック、センサーなどが更新されている。性能は標準的。とはいえオプション装備の大型高性能ミサイルの性能は侮れない。肩と腰のラッチには様々なオプション装備が取り付け可能で、数種類のバリエーション

モデルがある。

「上から狙われるとやつかいだな……。対空監視を怠るなよ。エルマン中尉、頼りにしてるぞ」

「了解です大尉！」

その言葉にエルマンは大いに勇気づけられて、操縦桿―彼の機体は旧式なので球形のアームレイカーではなく棒状のスティック―を強く握りしめた。

第3話 「巨人が住む星」

2

巨人が地上を歩き回り、空を飛翔する。それは古代に生きた巨人ティターンズが、ただ地上に暮らしていた以来の光景だった。

戦闘を目的として生み出された機械仕掛けの操り人形『モビルスーツ』が、瞬く間に戦闘機や戦車を駆逐してから十数年が過ぎ、その光景はすでに人間社会にとって見慣れたものとなっていた。

地上、海、宇宙、スペースコロニー、アステロイドベルトなど、人間が活動するあらゆる領域で巨人が動き回っているの、仮にどこか別の惑星から訪問者がやってきたなら、その宇宙人はモビルスーツを地球の支配者と思うに違いない。

ヨーロッパ中心部、旧ドイツと旧フランス国境に位置するアルザス地方。

そのアルザスの外れにある農村では、牧歌的な時間が流れていた。人類にとつての大災厄『一年戦争』と呼ばれた十数年前の世界大戦は、人間社会の工業化、都市化を後退させ、少なからず人々を農業や漁業に回帰させていた。この農村で住民が行う作業とい

えば、農作物を育てたり、羊を追いまわしたりする程度で、あとは一日のほとんどもを食事しながらぼんやりと過ごすという感じだった。

だから、突如鳴り響いた熱核ジェットエンジンの轟音は、住民にとつては晴天の霹靂だった。高速回転するファンブレードと核融合炉とが生みだす、周辺数キロメートルのあらゆる物を振動させる暴力的な音は、まるで天変地異が起こったかのように、恐怖して家に閉じこもる者もいれば外に飛び出して大声をあげる者もいた。

「モビルスーツだ！」

「もう一機は……なんだありや？ 凄くでけえぞ……」

興奮した若者が、危険なシヨーを見るかのように騒いだ。彼らが普段見慣れている『モビルスーツ』は、細いシルエットの地球連邦軍製の《ジム》だったから、異様なマシンは化け物そのものに見えたのだ。

ブドウ畑で農作業を行っていた老夫婦も、巨大な二つのシルエットが低空飛行するのを唾然として見つめていた。その日常生活から逸脱したスケールのメカニックには手足がついていて、顔は人間とは似ても似つかないが、それだけに神話の巨人のように思えて、老いた二人を驚愕させるのに十分な衝撃があったのだ。

人外の巨人たちは、彼らの大きさに合わせて作られた空駆ける乗り物にまたがり、進行方向を幾度となく変えて、高速で木々すれすれを駆け抜けていく。

巨人を構成するテクノロジ―は理解できずとも、彼らの意図は老夫婦にも理解できた。そう、何かから逃げている。人型であるだけに、それを操縦しているであろう人間の意思が透けて見えるのだ。畑を荒らす小動物の敏捷さにも似ていたが、ほどなくその動物を捕獲しようとする新しの巨人が後方から出現した。

高速で飛び去る機体を目で追いながら、老夫婦はその争いが自分たちの土地に災厄をもたらさないことを祈るしかなかった。

※

地球連邦軍ヨーロッパ方面軍第五十四モビルスーツ大隊所属のリカルド・マーティン中尉は、降って湧いた予想外の状況に興奮していた。

目の前に狩るべき大きな獲物が現れたとなれば、殊勲をあげる機会を逃すわけにはいかない。ただ規定飛行時間を延ばすだけの、毎日繰り返される定時の偵察飛行と訓練飛行。変わり映えのしないその任務にあつては、厳しい選抜試験を勝ち残り、あれだけ切望したモビルスーツの操縦すらも退屈な作業に成り果てていた。

だが、いま自分は偽りない戦闘状況下にいる。狩りの対象は仮想敵機ではない本物の敵モビルスーツだ。正確には所属不明機で、敵だと決まったわけではないが、この平穩な地域にあつて秩序を乱すものは敵に間違いなかった。

リカルド中尉は、自分の判断でそう断定した。

「ブラボー2からヴィラクブレー司令部へ。所属不明機は低空で飛行中。呼びかけに
 応答せず 敵味方応答 I F F トランスポンダーにも反応しない。こちらに従属する意思なし。早
 急に判断を求む……」

リカルドは、ヘルメットを通した音声を聞いて、自分が興奮していることを認識した。
 軍人は戦果をあげなければ昇進できないが、この平時にあつては戦果をあげることな
 ど、ほぼ不可能なのだ。オペレーションの改善による業務の効率化や装備のやりくりに
 よるコストカット、そのような地味な成果がパイロットにも求められていた。リカルド
 はそうした面倒な仕事が大の苦手だった。

『リカルド中尉、そのエリアに飛行申請を出している連邦軍機や民間機は存在しない。
 だが念のため、もういちど不明機の機種を確認してくれ。確かにモビルスーツなんだろ
 うな?』

この緊急事態に、間違いを防ぐための確認手順と間延びした返事がもどかしい。いつ
 たいこの状況で何を見間違うというのか? コクピットに装備された三六〇度全周囲 オーレルビュ
 モニターには、はつきりと二機の所属不明機が映し出されていて、全ての分析結果がそ
 の二機をただちに撃墜しろと訴えている。熱暴走でたまに頭が悪くなる機械人形にも オートマトン
 分かる簡単な問題なのだ。

「二機はモビルスーツに間違いはない。所属不明機は、ベースジャバーに搭乗したモビ

ルスーツ一機とモビルアーマーらしき中型航空機が一機。データベースの照合では、モビルスーツはネオ・ジオンのAMX-011《ザクⅢ》に該当している。だが、モビルアーマーは該当機種はない」

空電ノイズが乗る通信電波は途切れ途切れで、基地に聞こえていないのか良く分からなかった。この時代『ミノフスキー粒子』と呼ばれる電波障害を引き起こす物質が、自然環境に深刻な影響を及ぼしているからだ。

トレノフ・Y・ミノフスキー博士が宇宙世紀〇〇六九年に発見し、彼自身の名前を冠したミノフスキー粒子は、簡単に言えば質量がゼロに近いふわふわした磁石のようなもので、空間に交互に整列しながら浮遊して、目に見えない格子上のフィールドを形成する性質を持つ。そして、そのフィールドが電磁波や赤外線、放射線を反射、吸収してしまふのである。

このやっかいな粒子が、一年戦争時にレーダージャミングの目的でやたらとばら撒かれた結果、未だ大気中に残存した粒子が長距離通信や電子機器を常に妨害していた。軍用機、民間機とも電子機器に入念な電磁シールドを施さなければ満足に稼働せず、そこまですら長距離通信には困難を伴うのである。

リカルドは基地からの返事を待った。いらいらする十秒間が過ぎ、ようやく『了解、待機せよ。付近を飛行していたガルダ級に支援を頼んでいるところだ』との返事が返って

きた。

「ふざけるなよ！ そんな余裕があるか！ CGと現実の区別もつかない連中が！」

大方、司令部のスクリーンに投影された、味方と敵の方位と速度を現わしたアイコンだけで状況を判断しようとしているのだろう。自分が目の前でみている生の映像よりも、四角や三角の記号の方が信用できるらしい。

リカルドは我慢の限界に達していた。

命令を無視して攻撃をしかけるか……。一年戦争の英雄アムロ・レイ大尉だって、民間人の立場ながら、勝手に開発中のモビルスーツRX-78《ガンダム》を盗んで手柄をあげたのだ。

リカルドがそう思った矢先、突然に空中に閃光が走って、彼はリニアシートから飛び上がらなければ驚いた。

強力なビームがコクピットのすぐそばを掠めたのである。追手を追い払おうと考えたのか、前方に位置していた敵機が攻撃をしかけてきたのだ。灼熱化した重金属粒子が機体表面をカンカンと打つ音が、まるで警告音のように聞こえた。

機体に当たれば無事ではすまないほどの強力なメガ粒子砲だ。

リカルドは間近に見るビーム兵器に肝を冷やした。

「司令部、聞こえるか！ 攻撃されたっ！」

『こちらヴィラクブレー・アクチュアル。いまガルダから増援が発進した。は十五分後だ。中尉、速やかに撤退しろ』

「ネガティブ。これより戦闘状態に移行する。リカルドアウト」

『リカルド中尉！ 勝手なことはするなっ！』

だから言ったのだと、リカルドは自分の正しさを証明するかのように乱暴に通信を切った。

すぐさまマスターアームスイッチをオンして、愛機《ジムⅢ》が握るビームライフルを起動させた。これで敵機への攻撃が可能となる。攻撃されて初めて反撃できるのが今の連邦軍なのだ。

「クラフト、まず俺があのだザク野郎を攻撃する。やつらの動きが止まったらお前は反対側から回り込んでどめをさすんだ。いいなっ！ あのでかいモビルアーマーにはかまうなよ。初動は鈍いはずだ！」

「了解！」

リカルドは同僚を鼓舞して気炎をあげた。だがネオ・ジオン系のモビルスーツが異様な姿をしていることが、僅かに彼を疎ませる。敵のモビルスーツ《ザクⅢ》は、彼の愛機《ジムⅢ》より一回り大きく、もう一機のモビルアーマーにいたっては、巨大な怪物のような異様なシルエットなのだ。大きければ性能が高いわけではないが、機体の性能

差は歴然としてるように感じられた。

だが、この瞬間のために連邦軍パイロットは厳しい訓練を積んでいるのであり、軍の給料が支払われている理由でもあるのだ。地球連邦軍は職業安定所と揶揄されることもあったが、決してそんなことはないことを証明したいと、リカルドは常日頃から夢想していた。

それに、この《ジムⅢ》は大量生産モデルではあるが、あの伝説的な高性能モビルスーツ《ガンダム》の基本設計を受け継いだマシンなのだ。性能は決して悪くないし信頼性も高い。ゲリラ野郎の、おそらくは碌に整備もされていない機体に負けるわけがない。

リカルドは気を奮い立たせ、セオリー通りに自機を敵機の後ろ上方に位置させると、ビーム・ライフルを使うことを僚機に宣言して、目標のやや前方に向けてビームを斉射した。

正確に狙撃するためには、相手より高い位置にいた方が狙いやすい。ビームは直進するので、敵機の移動距離を予測して未来位置に撃ち込めばかなりの確率で当たるのだ。

ビーム・ライフルの発射プロセスは、おおよそ次のようなものだった。

操縦桿の発射ボタンが押されると、それに呼応してモビルスーツのマニピレーターがビーム・ライフルのトリガーを引く。するとトリガー入力信号を合図にして、核融合

炉から取り出された莫大な熱エネルギーが、縮退して発射寸前の状態で保持されていたメガ粒子を刺激し、それを高熱のプラズマ奔流として前方に投射させるのだ。

そのようにして敵を屠る必殺のビームが発射されたが、その一撃は目標をかすりもしなかった。

ネオ・ジオンのモビルスーツは、まるで後ろに眼がついているかのようにスツと平行移動してビームを容易く避けてしまったのだ。そしてすぐさま反転すると、猛然と反撃してきたのである。それは《ジムⅢ》の戦術コンピュータの予測を超えた機動だった。

「なんだと!? 速い!」

左後方に位置していたクラフト少尉の機体は、搭乗していた支援航空機ベースジャバーをたちどころに破壊されて、そのまま地面に落下していった。

たいていのモビルスーツは空を飛べないのだ。

バランスを崩してクルクルと回転しながら落ちて行った《ジムⅢ》は、すさまじい音を立てながら地面に激突し手足をもがれた。幸運なことに爆発はしなかったが、もはや戦力として期待できないことは明らかだった。

「クラフトーッ!」

部下の名前を叫びながら、リカルドは突然不利な状況に陥ってパニックになった。

このまま追撃するか撤退するか!?

頭の中に一対二という単純な数字が浮かんだ。まず撤退するのが望ましいが、脳内で大量のアドレナリンが生成されているので、その数字は英雄的行為を正当化するものになっていた。

「テロリスト野郎が大きな顔をしやがって！」

部下を撃破されたリカルドは怒りに燃えて、後方から高速ターンしてきた敵機に向けてビームライフルを連射した。コンピュータによる自動照準は、モビルアーマーの飛行予測を算出し、最も効果的な攻撃を目標に与えるのだ。

そのうちの一射が、青い化け物モビルアーマーに当たったように見えた。モビルアーマーは爆発と共に煙を噴いた。

やったのかっ!?

だが勢いにとつたりカルドがさらに攻撃を加えようとしたとき、いきなり眼前に《ザクⅢ》が迫った。モニターいっぱいモノアイと呼ばれる単眼の光が恐ろしげに光り、中尉は恐怖で言葉にならぬ叫び声をあげた。

しかしながら、直後に《ザクⅢ》の後方で大爆発が起こり、閃光がモニターを焼きつけた。次の瞬間、彼の愛機は敵機に殴られて、ベースジャバーから叩き落とされてしまった。

(ちくちくしょう!)

制御系がいかれたのか、全てのコントロールが効かなかった。

勇ましく英雄ぶってはみたが、英雄は早死にするというのは本当らしい。僚機が撃破された時点ですぐに撤退するべきだったのだ。もはや全てが遅い。戦闘能力を失った《ジムⅢ》のcockピットの中、マーティンは目を閉じcockピットが焼かれるのを待った。

「……………」

だがいつまでたってもビームサーベルの光はcockピットを貫いてこなかった。目の前の閃光が消えさると、《ザクⅢ》と正体不明のモビルアーマーは姿を消していたのだ。引き際の良さはゲリラらしい戦術だった。

だが今はそんなことはどうでも良い。モニターには全面に地面が広がっていたのだ。リカルドは両手で頭を抱えてうずくまり、耐ショック姿勢をとった。

ベースジャバーから叩き落とされて、《ジムⅢ》はゴロゴロと地面を跳ねるように転がった。すさまじい衝撃と強烈な振動が全身を痛めつけたが、その痛みこそ命が助かった証拠だった。

その夜、アルザスの農家の老夫婦は、モビルスーツの残骸から命からがら降りてきた地球連邦軍のパイロット二人を保護していた。

夫婦はこれで戦いが終わって欲しいと心の底から思ったが、その願いは叶うことはなかった。

第4話 「ドツグファイト」

3

「中尉、このあたりでいい。あとは一人で大丈夫。おまえは帰投するんだ」

「いえ、もう少しお供させてください」

「ベースジャバーの燃料だって余裕がないだろう？　また戻るときに迎えに来てくれ

ればいいさ」

戦闘を終えた《ベルグソン》と《ザクⅢ》の二機は、再び低空を飛行していた。

プルフォウとエルマンは、連邦軍の追跡者を追い払い、さらに爆薬と煙幕を用いてあたたかも機体が被弾したように欺瞞してみせたのだ。これで機体を隠す時間が稼げるはずだった。

「……わかりました。もうこのあたりに連邦軍はいないと思いますが、十分に気をつけてください」

「ずいぶん心配してくれるんだな？　まったく不愉快な任務さ」

「でもジオンにとってこの任務は……」

「どうだろうな？ 本物かどうかだつて分からないんだ。だから、それを確認するために自分を隠して近づこうつていうんだろ」

「ああ、それで」

プルフォウは基地で任務の準備をしているときに、エルマン中尉に仮装コスプレした姿を見られたことを思い出し、お尻をずらしてシートに座り直した。なんとも気まずい体験で、彼の目は大きく見開かれていた。文字通り道化みたいに見えたことだろう。

「馬鹿げた演技をするんだからな。わたしはパイロットだけをやっていたいんだ！」
「でも似合つてましたよ」

「気休めはよしてくれないか？」

「ご褒美に美味しいアイスクリームを用意しておきますよ」

「なんだよ、それは？」

プルフォウは、エルマンの妹を慰めるような言い方が嫌いだった。年上だからと、たまに子供扱いしてくるのだ。

だからはつきりと叱つてやるかと考えて、上官に対して無礼だぞと言いかけた次の瞬間、彼女の脳裏に危機を知らせるイメージが突然に突き刺さった。

「なにっ!？」

それは漠然とした、プレッシャーが形となったような塊だった。

戦闘で散布されたミノフスキー粒子によって警戒レーダーは著しく能力が低下して、光学センサーも遠距離の敵にはあまり役には立たない。プルフォウはそういう状況で敵機を感知したのだ。

モビルスーツのサイコミュが教えてくれたと表現してもよく、まさにそれこそが強化人間の能力なのだが、それでも高々度から高速接近してくる敵機への対応時間は、わずか二十秒程度しか残されていなかった。

「六時方向に敵機だ！ 上昇しろっ！」

言うや否や、プルフォウはフットペダルを思い切り踏み込み、同時にアームレイカーを手前に引いて《ベルグソン》を急上昇させた。

「大尉！ センサーには何も!？」

「死にたくなければわたしの勘を信じろっ！」

《ベルグソン》と《ザクⅢ》は、爆発的な加速力で瞬く間に上空へと飛翔する。

プルフォウが即座に急上昇したのは、空中戦を行うための位置エネルギーを稼ぐためだった。

攻撃のたけに向きを変えたり、防御のために旋回すると、機体は少しずつ速度や高度を失っていく。そしてついには全てを失って機動出来なくなってしまうのだが、それゆえ格闘戦を行う前には、なるべく速度と高度を確保しておくことが重要なのだ。

これは『エネルギー機動性理論』という、旧世紀の戦闘機同士が行った近接戦闘ドッグファイトの経験則から生まれたものだが、犬同士がじゃれ合う姿の例えから生まれたその理論は、戦闘機よりは人型のモビルスーツにふさわしかった。

「間に合うか……!」

まったく迂闊だった。この距離まで敵機が接近していたことに気付かないとは！
ニュータイプ能力が鈍っているのか？

プルフォウは自分の能力に疑いを持ったが、そんな自省が役に立つほど戦場は甘くはない。

フットペダルを踏み込み続けると、『ベルグソン』の両肩に備え付けられた熱核ターボファン・エンジンの回転数が爆発的に上昇し、推進力が一気に増大した。

熱核ターボファン・エンジンは、混合した燃料と空気を多段式タービンで急激に圧縮し、それを核融合炉の熱で膨張させて推進力を得る。酸化剤がいらないので燃費の良いシステムではあるのだが、レスポンスが少々悪いのが欠点だ。ただし燃料を湯水のように使い、消費量のことなど考えなくてよいというなら、ノズルに燃料を直接吹き付けて爆発的な加速を得る『アフターバーナー』を用いることも可能だった。

敵はそのアフターバーナーを盛大に焚いて加速しているはずだ。おそらく基地か母艦に近いのだろう。つまり燃料消費量を気にしなくて良いということだ。

「ちっ、やつかいな奴に絡まれた！」

急上昇を続ける《ベルグソン》は高度二千メートルに達した。

だが、如何せん遅すぎるのだ。

優位なポジションをとろうとするプルフォウの意図を察した敵機は、そうはさせまいと猛然と加速して突進してくる。ドッグファイトに移る前に、一撃離脱攻撃で仕留めつつもりなのだ。その速度はまさしく目を見張るもので、追いつかれるのは時間の問題だった。

「なんて速さだー！」

プルフォウは敵機の性能に驚愕する。

彼女が駆る重モビルスーツAMX-021X《ベルグソン》も、ネオ・ジオンが技術力の粋を集めて開発したマシンである。なまじの機体ではない。

両肩に大型の多目的アクティブ・バインダーを装備し、胴体には強力なビーム兵器『メガ粒子砲』を三門、両腕にビーム・キャノン二門を固定装備として備える。さらには、万能兵器として考えつくあらゆる機能を盛り込むべく、サポートマシンであるベースジャバーと合体することで、高速飛行形態であるモビルアーマーに変形することも可能なのだ。

しかしモビルアーマーに変形して、恐ろしげで強そうな格好にはなるが、機動性が劇

的に変化するわけではないのが問題だった。

敵地深くに単独で侵攻するべく、空気抵抗を減じて巡航性能を高めることがトランスフォームする目的なのであり、ようするにドッグファイトにはあまり役に立たない。僚機の《ザクⅢ》は加速に手間取りはるか低空において、敵機は急速に接近している。状況は決定的に不利だと、戦術コンピュータに教えてくれなくても明らかだった。

「馬鹿みたいに突っ込んでくる！ 何を考えてるんだ」

プルフォウは後方警戒モニターを確認しながら、文字通りロケットのように突っ込んでくる敵機に驚きを隠せなかった。機体性能を最大限生かすための機動なのか、あるいはパイロットの性格なのか、欺瞞行動もせずに最短距離をとってくる。

敵機はラフなCGで表現されてはいたものの、グレーの機体色に逆三角形の形状、機体上面に二つのエンジンポッドがレイアウトされている構造が見て取れた。おそらく地球連邦軍の可変MSだ。

「フン、小細工せずに戦おうってのかい？ 面白い、相手になってやる！」
突進してくる敵機を回避するために、プルフォウは即座に三六〇度ループを開始した。

そして、その素早い判断が彼女の命を救った。直後に強力なビーム斉射が、直進していれば機体が位置していただろう一帯を薙ぎ払ったのだ。あと一秒遅ければ直撃を喰

らうところだった。

震える手をアドレナリンによる高揚感で抑え、加速を殺さずに機体に滑らかなループを描かせるべく、精密にアームレイカーを操作する。

地平線がググツと下に消えて、機体が高速ループに入った。

「ちっ、手が滑ったっ！」

アームレイカー球形操縦桿は操作性は良いのだが、激しく動かしたときに握った手が外れやすいのが欠点なのだ。

戦闘時に手からすっぽ抜けたらたまらない。操縦桿としては致命的な欠陥のように思えるが、新型リニアシートには操縦桿カバーが付いているので、スペース的にステイック型には交換できないのだ。仕方がないので、プルフォウはノーマルスーツのグローブに滑り止めを塗布して対処していた。

「こんな操縦桿、帰還したら今度こそ交換してやる！」

強烈なGで体が押し付けられる不快感に、思わず悪態をつく。

Gに耐えながら繊細な操作を行うのは、強化人間であるプルフォウにとっても至難の業なのだ。リニアシートは超電導で僅かミリオーダーの間隔で浮いていて、加速度を検知してそれを相殺してくれはするが、急激な機動にはその機能が追いつかないのである。

「ぐっ……い！」

身体に重力加速度がかかって四肢が拘束されるように重くなり、プルフォウの口から呻き声が漏れた。

強化された筋肉を持つてはいても、重力加速度は等しく肉体にダメージを与える。ジェットコースターのような激しい機動に全身が押しつぶされそうになる。歯を食いしばって耐え、ずっしりとしたヘルメットの重さを感じながらも、プルフォウは左右に忙しく首を振って敵機の位置を確認しようと試みた。鋭敏な感覚でぼんやりと敵機の位置は判別できるが、本능が目視での確認を欲求するのだ。

敵機は盛大に白煙を吹きあげながら追撃してきている。

「そうさ、ついてきな！ 機動性に自信があるのが命取りなんだよっ！」
プルフォウはGに苦しみながらも強がりと言って自らを鼓舞した。

「エルマン、聞こえるかっ!？」

「は、はいっ!！」

「わたしが奴をひきつけて迎え撃つ。おまえは後ろから挟み込め!！」

「了解!！」

「やるぞ!！」

遠大なループの中間点に達したとき、プルフォウは反撃に移るべく変形レバーを引い

た。

ガクンツとロックが外れる金属音と同時に、ベースジャバーが《ベルグソン》本体から分離して、緩やかな弧を描いて離れていった。そしてベースジャバーと分離するや否や、《ベルグソン》は瞬時にモビルアーマー形態からモビルスーツ形態へと変形した。

《モビルフルレム》可動内骨格と大出力モーター、高性能アクチュエーターの組み合わせにより、《ベルグソン》は一秒以内にその形態を変化させるのだ。

頭部カバーとバインダーで本体を覆い、まるで水棲生物に擬態したかのような姿をしていたマシオンは一瞬でそれらを広げると、縮こまっていた四肢を伸ばして、単眼センサーをギラツと光らせた。

太陽をバックにして、空中に羽を生やした巨人が現出した。

凄まじい速度で変形したために、空気抵抗と慣性の法則によつて機体が軋んだ。高速移動中の変形は確実に機体寿命を縮めてしまうのだ。

さらにプルフオウの三半規管も、急激な反転による強大なGで異常を訴え、空間意識失調に陥りそうになった。だが彼女はそれに構わずに、機体各部の姿勢制御バーニアを正確に作動させると、空中で機体を制御した。

一方、可変MSは速度にまかせて上昇し、高空で減速したあと旋回して追尾してきた。いわゆるハイスピード・ヨーヨーと呼ばれる機動をとることで、上方から狙い撃ちする

つもりなのだ。

「セオリー通りの動きをする！ 自信過剰な奴！」

プルフォウは、『ベルグソン』の右腕に持たせた『MMP-78ザク・マシンガン』の狙いを敵機に定めた。

ザク・マシンガンは、秒速二千メートルもの初速をもつて弾丸を発射するが、弾丸は管制コンピュータによる予測射撃によって最適な有効打撃範囲に収束する。加えて近接信管によって、直撃せずとも目標に近づいただけで炸裂して、破片によるダメージを与えられるのだ。

つまり、ある程度コンピュータまかせにしても目標に命中するのだが、とはいっても、そんな売り文句を技術者の額面通りに受け取るわけにはいかない。相手が新米パイロットならともかく、熟練パイロットはコンピュータの予測射撃を回避するテクニクを持っているからだ。

だからプルフォウは、照準システムをオーバーライドしてマニュアル操作に切り替えた。

「そこだ！」

彼女がトリガーを引くと、マシンガンの薬室に弾丸が装填され、電気雷管による点火、発射。ガス圧によるボルトの後退、弾の再装填という射撃サイクルを繰り返しながら、

銃口から毎分九百発もの猛烈な速度で弾丸が前方に発射された。

耳を劈くような派手な音と振動が発生し、火薬カートリッジに押し出された炸裂弾が空中を駆ける。

120mm口径のマシガンは一年戦争の時代から使われている武装で、ビーム兵器が主流となつたいま、二戦級の武器に成り下がったというのが大方の評価だ。そのような武器を装備しているのは、高価なビーム兵器を贅沢に使用できない懐事情もあるのだが、広範囲に弾丸をばらまくことが可能なザク・マシガンは制圧射撃に最適であるというのが、ジオン・アフリカ方面軍戦術研究班の結論だった。

制圧射撃とは、連続した射撃によって敵の行動を制限し、容易には移動できない状況を作り出す戦術なのだが、簡単に言えば大量の弾で敵を怯ませて動けなくしてしまうのである。

「行き止まりだな！ さあ、どう動くつもりだ?！」

プルフォウはアームレイカーを握りしめながら、感覚を研ぎ澄まさせた。

速度が落ちているから、回避するためには降下、反転して逃げるだろう。問題は左右どちらに逃げるかだ。こちらが「右腕」に武器を持っているから、向かって右に動くのがセオリーだ。しかし当然相手も同じ思考だと考えなくてはいけない。

裏の裏をかく騙し合い。このゲームに賭けるのは己の命だ。戦場で生き残るパイ

ロットなら、ギャンブラーになっても間違ひなく食べていける。

そして予想通り、敵機は右に動いた。

セオリー通りに直進してきた人間ならば、やはりストレートに反応するということが。

攻撃を避けるために、主翼からベイパーを発生させつつ急速ターンで回避行動をとっているが、それはかなりの高機動で、敵パイロットは相当のGを感じているに違ひなかった。

モビルスーツ形態の利点は任意の方向に攻撃出来ることだ。対して戦闘機形態の敵機はこちらを攻撃出来ない。

「墜ちろっ！」

敵機が回避行動に移った一瞬の隙を逃さずに、プルフォウは間髪入れず《ベルグソン》の左腕に内蔵されたビーム・キャノンを発射した。

発射タイミングと角度は申し分ない。

収束率の高い、細長いビームが一直線に目標へと向かった。ビームは大気中で煌めきながら尾を引いて、今まさに敵に確実な死をもたらそうとしていた。

プルフォウの脳裏に機体が爆発するイメージが浮かんだ。

だが、ビームが直撃するはずだった決定的瞬間の一秒前、プルフォウの予測はキャン

セルされた。グレーの敵機は瞬時に形態を変化させたのだ。変形に〇・五秒を費やし、次の〇・五秒でシールドを展開する。戦闘機形態からモビルスーツ形態への変形。トランスフォーム耐ビームコーティングが施されたシールドは、たちまちビームを弾いて反らしてしまう。

「なにつ、防御しただど!?!」

プルフォウが驚いたのは、可変モビルスーツのパイロットが回避機動と変形、防御を同時にやってのけたことだった。並の反射神経ではない。彼女は地球に降りてきてから、自分以外にそれが出来るパイロットを見たことがなかった。

「なんて奴だっ!」

その困惑がプルフォウの反応を一瞬遅らせてしまう。

可変モビルスーツは姿勢制御バーニアを吹かして姿勢を安定させると、シールド裏から大型のビーム・スナイパーライフルを取り出した。そしてコッキングレバーを引いてエネルギー・カートリッジを薬室チャムバーに送り込むと、素早く狙いを定めてビームを発射した。

「大尉! 避けてっ!」

虚を突かれたプルフォウは、エルマンの叫び声で我に返った。

「対空防御っ!」

プルフォウはアームレイカーを素早く操作してコマンドを入力した。

《ベルグソン》の両肩に装備されたバインダーを前方に展開して防御態勢をとらせる

と、フットペダルを底が抜けるほどに思い切り蹴り飛ばし、バーニア・スラストターを全開にして急速後退した。さらに僅かでもビームの威力を減衰させるべく、バインダーの小型ハッチからアルミコーティングされたダミーを申し訳程度に前方に放出させた。

ドンツという音がして、周囲の空気が衝撃波で震えると同時に、強力なビームが襲いかかった。コクピット内では、強烈な光からパイロットの眼を守るために防眩スクリーンが降りた。

スナイパーライフルのビームは精度と威力が桁違いで、あわや直撃するかと思われる。だが必死の回避行動によって、バインダーの装甲の一部を溶かしながらもギリギリでビームを反らすことに成功した。

それでも高出力ビームによって機体の装甲の一部が融解、気化して、高温と衝撃波が機体を激しく揺らした。

「ううっ！」

《ベルグソン》のコクピットにリアシートでも吸収できない激震が走り、プルフォウはたまらず呻き声をあげた。

「大尉！」

上官の危機に激高したエルマンは、ようやく戦闘宙域にたどり着くと、《ザクⅢ》の腰装甲に内蔵されたビーム・キャノンを敵モビルスーツに向けて連射した。

それは精度は低いが気迫に満ちた攻撃だ。

不意を突かれた可変モビルスーツは、体勢を整えるために逆噴射をかける。敵機は一瞬たじろいだようにも見え、相手を圧倒した勢いのまま、エルマンはとどめを刺そうと勢いよく突進した。

「もらったー！」

勝利を確信したエルマンは、敵機のコクピットを狙ってビーム・キャノンの狙いを定めたー。

「馬鹿、罠だー！ 深追いするんじゃないっー！」

可変モビルスーツの意図を察してプルフォウが叫んだ。

そう、敵はわざと誘ったのだ。

グレーの可変モビルスーツは、難なく《ザクⅢ》の射線から身をかわすと、空中を爆発的に突進し、最小の動作でコクピットを刺し貫くべく、接近戦用の必殺兵器ビーム・サーベルを腰から引き抜いてフェンシングのように突きを繰り出した。

『ビーム・サーベル！』

エルマンとプルフォウは、その敵機の素早い動作に、同時に驚きの声をあげた。可変モビルスーツは光剣をかまえて目にも止まらぬ速度で《ザクⅢ》に迫る。エルマン中尉はもはや避けようのない致命的な攻撃に悲鳴をあげた。

「うわああっ！」

だが恐怖で動けないエルマンの眼前に、最大出力で駆けつけた《ベルグソン》の巨大なシルエットが広がった。

「やらせるかっ！」

プルフォウは《ベルグソン》を急反転させて二機の間を飛び込ませると、可変モビルスーツの鋭い打突を、二刀流のビーム・サーベルで受け流させた。

二つのビーム・サーベルが合わさりはじけ、刃を形成する《Iフィールド》と呼ばれる力場が干渉した結果、周囲に凄まじい光と音が発生した。

「大尉！」

「お前は離脱しろ！ こいつは強いっ！」

そのまま二機は激しい動きで切り結んだ。

可変モビルスーツがコクピットを狙った必殺の突きを放つと、プルフォウはその攻撃を《ベルグソン》を横回転させることで避け、そのままの勢いで機体を一回転させると、ビーム・サーベルを横なぎに払った。

対して可変モビルスーツは、その斬撃を急激なひねり込みで回避してみせ、向き直ると再び鋭い突きを放った。

またもやビーム・サーベル同士がスパークする激しい火花が散り、数秒間つばぜり合

いをした後、二機はぼつとお互いから飛び退いた。

「あれがモビルスーツの動きなのかっ!？」

エルマンは、眼前で繰り広げられている熟練同士の戦いに圧倒されて動けなかった。それはエースパイロット同士の一瞬のミスも許されない極限の戦いで、常人には機体の動きは目で追えず、ブレて見えるほどの速さだった。決闘に介入することは許されないと感じた。その無駄がない一流の舞踏は、あたかも伝統芸能のような崇高なものに思えたのだ。

巨人同士の激しい格闘戦は死力を尽くして続けられたが、いまや二機の高度はかなり下がってきていた。重力が二機を地面へと誘い込んでいるのだ。激突死しないためには急いでバーニア・スラスターを噴射するか、モビルスーツ形態から航空機形態に変形しなければならぬ。

「こい、ベースジャバー!」

プルフォウは状況を素早く判断して、ベルグソンと分離させて滞空させていたベースジャバーを上手く利用した。サイコミュによる遠隔操作によって、タイミングを合わせてベルグソンの落下位置にベースジャバーを誘導したのだ。

敵機とドッグファイトを繰り広げつつ、精密なタイミングでベースジャバーとドッキングする。それはセンスと熟練の賜物だった。

「この戦い、もう少し続けたいところだが……終わりだな！」

プルフォウは《ベルグソン》をベースジャバーの背に降り立たせると、その優位なポジションから胸部に装備されたメガ粒子砲を発射した。

メガ粒子砲は、メインエンジンと直結した強力なビーム兵器である。三門の砲口から強力なビームの奔流が流れ出すと、敵機を囲むように拡散ビームが広がっていった。

「墜とすには惜しいパイロットだが、戦いは非情なんだ！」

メガ粒子砲は、直撃すれば巡洋艦ですら撃沈する威力がある。もはや可変モビルスーツの運命は決定した。強化人間であるわたしにかなうパイロットなど、いるわけがない。

プルフォウは勝利を確信した。

だが、あと僅かでメガ粒子砲が直撃すると思われるとき、可変モビルスーツはまるで跳ねるように方向を変えて攻撃を回避したのだ。

「馬鹿なっ!？」

起こるはずがない出来事が眼前に展開して、プルフォウは驚愕した。

高熱のメガ粒子がモビルスーツ形態時の両脚―ウエイブライダー形態時のエンジンポッド―の一部を焼きはしたが、それは致命傷にはなり得なかった。

彼女の予想を超えて、逃れることが不可能な必殺の攻撃すら、敵パイロットは避けて

みせたのだ。

それはつまりー

「あのパイロット、強化人間、いやニュータイプか!」

可変モビルスーツは、そのまま瞬時に機体を航空機形態に変形させると、バーニア全開で再びロケットのように後方に飛び去っていった。

「撤退した……?」

プルフォウは鮮やかに撤退した相手の手際の良さに感心する。同時に戦闘が終了したことに安堵し、自身の強化されている肺からほとんど消費されてしまった酸素を補充するべく息を継いだ。

離れたところで戦いを見守っていた《ザクⅢ》が、《ベルグソン》に近づいて肩に触れてきた。それは接触回線を開くためだったが、まるで仲間を気遣う人間の動きにもみえた。

「プルフォウ大尉、大丈夫ですか!」

「わたしは大丈夫……だが、あいつは恐ろしい奴だ」

プルフォウはふうつと息を吐くと、眼に入りそうになっている汗を拭うためにバイザーを開けた。手で汗を拭うと、ディスプレイにデータベースの照合結果が表示されていることに気付く。そこには『該当機種MSZ-006D《ゼータプラス》照合率90

％』と表示されていた。

《ゼータプラス》。可変モビルスーツ。安物の量産型とは違うやつかいな敵だ。だが本当に恐るべきはあの機体ではない……。

「敵機はガンダムタイプでした。だとすれば、やはり相手はエース級のパイロット……？」

「間違いなくそうだろうな。わたしをこれだけ苦戦させたんだ」

プルフォウは手が震えるのを自覚した。

地球連邦軍のモビルスーツの代名詞、一年戦争においてジオンを敗北に導いた悪魔のマシーン《ガンダム》という単語を認識したことがきっかけだ。

伝聞や流言が理由ではない。彼女は人を惑わせる言葉には動じない。特定の単語をキーワードとした、深層心理への刷り込み操作による心理的圧力が生じたのである。それは例えて言うならトラウマのようなもので、恐怖体験は遺伝子を通じて子孫に受け継がれるという理論を応用した、強化人間に施された心理的強化策だった。

問題はアドレナリンの過剰な放出だ。プリセットされた特定の単語が神経パターンとして検知されると、それをきっかけとして交感神経の緊張が促進され、彼女の血中には大量のアドレナリンが流れ込む。つまり人為的に興奮状態を作り出し、爆発的な戦闘能力を生み出そうというのである。

軍人と科学者が考えだした、人体への影響を顧みない非情な所作は、一種の自家中毒を生じさせて後遺症を引き起こしてしまいう危険を無視して実行された。

プルフォウは恒常的にアドレナリン中毒による身体の震えに悩まされている。そして、いままも精神安定剤を飲みたい衝動を何とかこらえていた。

「エルマン中尉、基地に帰ったら戦術研究班の連中と今の戦いを分析してくれないか？ どの部隊のモビルスーツかも知りたい」

「分かりました。あのガンダム野郎の対策を考えます。次は好きなようにもさせませんよ」

「あのパイロットは相当な腕さ。わたしが倒せなかったんだぞ？ 間違はなく強化人間かニュータイプだ。あんな奴にこの辺りを彷徨かれたら作戦の支障になる」

「大尉にそこまで言わせるパイロット。まさかアムロ・レイとかいうエースでしょうか？」

「さあな。ずいぶん敵意が剥き出しだったから、そんな有名人じゃないだろう」
「……」

「少し疲れたよ。早く撤退した方が良さそうだ」
すでに日が暮れ始めていた。

夜になれば視認される心配はなくなるし、ミノフスキー粒子のおかげでレーダーには

捉えられる心配もなくなる。だが迷って目的地にたどり着けなくなるのは避けたかった。

「これから急いでベルグソンを隠す場所を見付けるよ。……幸運を祈っててくれよ、中尉」

「大尉お気を付けて」

モニター越しに二人は敬礼すると、機体を別々の方角に向かわせる。夕焼けが二機を赤色に染めていたが、その夕日を背にしたシルエットは別れを惜しむ人間そのものに見える。

第5話 「クラスメイト」

5

ミーミスブルン学園

旧ヨーロッパのアルザス地方にあるミーミスブルン学園は、九十年ほどの歴史を持つ伝統ある学校だ。山脈とゆるやかな草原に囲まれた片田舎に建設された校舎は、けっして大きいとは言えなかったが、施設の質は高く充実していた。

ちょうど西暦から宇宙世紀に変わったところに設立されたこの学園は、宇宙開拓時代にふさわしい人材を育てることを目標に掲げて、全寮制で厳格なカリキュラムに沿った教育が行われていた。宇宙に新たな大地が産まれた時代、人類の新たな可能性を切り開くエリートを育てようと考えたのだ。それは後のジオン・ダイクンの思想にも繋がるもので、事実この地域からサイド3に移民した人々は多かった。

だが、ここには新たな戦争を産みだす火種が存在していた。

「ここからでも、連邦軍のモビルスーツが使ったビームの光が見えたんだって」

「見間違いないじゃないの？ 訓練中の事故とかさ」

二週間前、学園近郊のヴォージュ山脈でモビルスーツの戦闘があり、連邦軍が所属不明機を撃破したというのが、最近学園の生徒たちの間で噂になっている話だった。

「過激派のテロだろ？ ジオンを騙ったテロリストの。迷惑なんだよな、そういう連中は。ジオンは共和制になったんだから。民主主義を認めない偏狭な人間だよ」

「そんな単純な……。あなたの頭で理解できるわけないわね。もう少し社会情勢を考慮しなさい」

「なんだよ、それ？」

「最近になって軍事関連企業の株価が上がっているし、エネルギー価格も高騰してる。これは戦争の兆候よ。シャア・アズナブル大佐の『見えない、忍び寄る脅威』と表現してもいいでしょうね」

「シャア大佐が!？」

学園の副生徒会長であるティプレ・アンが口にした一年戦争の英雄の名前に、教室内がざわめいた。

シャア・アズナブル。キシリア・ザビ少将配下のジオン公国突撃機動軍大佐であり、赤い彗星と呼ばれたエースパイロット。その名前はいまや伝説となっていたが、その正体がジオンの創設者ジオン・ダイクンの息子だということは子供でも知っている話だ。

一年戦争の後、最終決戦ア・バオア・クーの戦いを生き延びたシャア・アズナブルは、

火星付近のアステロイドベルトに位置していた小惑星アクシズに逃れた。そして、その後どういふ経緯と意図があったかは不明だが、反地球連邦組織エウーゴの幹部として活動したのだ。

だがスペースノイド排斥主義者の集団であるティターンズ、ザビ家復興を掲げる古栗のアクシズとの三つどもえの抗争後、シヤアはふたたび行方不明となったのである。

そして雌伏四年、そのシヤア大佐が再び起つとの噂が広まっていた。動揺が広がることを恐れた教師たちは戦闘があつた事実そのものを隠ぺいし、誤魔化そうとしていたが、生徒たちはそうした大人の事情には敏感なのだ。

「そう、シヤア大佐は生きてるのよ」

薄紫の髪を派手にかき上げながら、アンはクラスメイトを煽る。

「でも、シヤア大佐はジオンを裏切つて地球連邦軍に入ったんでしよう?」

「クワトロ・バジーナ大尉の演説を知らないのかよ? 副生徒会長はさ」

他の生徒たちが一斉に否定するなか、アンは余裕の表情で応える。

「反論するなら、まず人の知性を考慮なさい。もちろんダカール演説は、わたしも何回も聞いたわ。でもね、あの演説は地球連邦軍を油断させるための演技なの。敵を騙すには、まず味方からつていうでしょう? あなたたちは演説に含まれたキーワードが分からないのかしら?」

「キーワードってなんだよ?」

「ふふ、お馬鹿さんね……」

アンは、再び豊かな髪をかき上げながら、ふんと鼻を鳴らした。

「説明してあげる。彼はこう言ったわ。『誰もがこの美しい地球を残したいと考えている。自分の欲求を果たす為だけに、地球に寄生虫のようにへばりついていて良い訳がない』。つまり、全人類は地球を出てゆけてことよ。シャア大佐が生きていれば、その要求を必ず地球連邦政府に突きつけてくるでしょうね」

アンの恐ろしい分析に教室は静まりかえる。

「怖いわね……」

「それが本当なら狂ってんな」

噂というものは尾ひれをつけて広まるものだ。想像上の『戦争』が、先日の戦闘騒ぎに装飾を付け足して、いつそう恐ろしげな話に思わせていた。

「ティプレさんって頭いいよね! あなたの予想って良く当たるし。でも嫌だよ戦争は。シャア大佐だって、きつとそう思ってるよ!」

ジェシカはいつものように、深刻になりすぎたクラスの雰囲気をやわらげようと努力する。

「どうも? お礼を言わせてもらおうわジェシカさん。演繹法による予測、推論ね。も

ちろんわたしも戦争は嫌よ」

「だよ。みんな、そうだよ。シャア大佐だって、まず話し合いで解決しようとするよ」

「それは甘いわね……。そうだ、マリーベルさん。あなたはどう思うのかしら？」

「えっ、わたし？」

急に話を振られたオレンジ色の髪をした女生徒は、驚いた様子で眺めていたコンピューター・パッドから頭を上げた。

「あなたはサイド3から地球に降りてきたんでしょ？　確かお父様のお仕事の都合だとか？」

「ええ。父は穀物や工業製品を扱う、商社の仕事をしていて……」

「いまスペースコロニーでは反地球連邦デモが起こっているそうね？　最近になって連邦議会でジオン共和国の自治権返還が採択されたっていうじゃないの。ジオンという名前が失われる。それに呼応した反政府デモは、ただのスペースノイドの不満レベルじゃないはずよ」

「政治は難しくよく分からないけど、サイド3ではデモは禁止されてるから……。反地球連邦政府運動なんてしたら、すぐに逮捕されてしまうわ」

「弾圧されてるってことかしら？」

「うん……」

「まあ、過激なデモの取り締まりはどのコロニーでもあるでしょうけどね。地球連邦政府へのテロ活動を未然に防ぐためにね？ 最近は《エグム》という反政府組織も生まれたらしいと聞くけど、あなたは知らない？」

「聞いたこともないわ」

「エグムって元々はエウーゴから分裂した過激派らしいですわね。わたしは行方不明のシヤア大佐がリーダーだと思うわね。そうは思わないかしら？」

「わたし本当にわからなくて。ごめんなさい」

「わからないですって!？」

転校生マリーベル・リプルの煮え切らない答えに、持論を得意げに語り、自分の頭の良さを自慢する学園の副生徒会長ティプレ・アンは不満そうだった。

彼女はもっと過激な、平凡な日常とは異なる刺激を求めているようだった。退屈極まらない日常から飛躍して、激動する世界の真実を知りたいと望むかのように。

「世間知らずな風を装うのはお止めなさい！ あなたはそんな馬鹿ではないはずよ。ふん、知り合いなんでしょう、シヤア大佐と？ あなたもモバイルスーツを操縦してるんじゃない？」

アンは突然話を飛躍させた。それは議論を加熱させるための常套手段だ。

「まだ、わたしがネオ・ジオンのパイロットだって疑ってるの？ いいかげんにして！」

「あなたの疑いが晴れたわけではないの」

アンはマリーベルが転校してきたときから、彼女がネオ・ジオンのスパイだと疑っているのだ。昨日もアンはマリーベルを容疑者のごとく追求し、教師が入ってきて授業が始まるまで尋問は続いたのである。

マリーベルは、もううんざりだった。

「わたしは悪い事なんて何もしてない」

「あなた、サイド3から密航してきたのですよ？ そう、例えば民間貨物船の荷物コンテナの中に隠れるなどして」

「まさか！ そんなことしたら酸欠になるわ！ それに大気圏突入時のショックで怪我するわよ」

「じゃあ耐熱フィルムを身に着けて降りてきたとでもいうの？」

「た、耐熱フィルム？」

「そう。薄い透明ビニールみたいな素材で、高熱にも耐えられるらしいの。雑誌で読んだことがあるわ」

「生身だったら、すぐに溶けて燃えてしまうわ！」

「地球連邦軍のモバイルスーツが使ってるのよ」

「知らないわよ。とにかく、プライベートシャツトルで地球に来たんだから」

「どうしても認めないようね……」

アンは、本当に困った子供だともいうように溜息をついた。

「……わかったわ。受け入れ難いけど、あなたの言うことを信じてあげないこともない」

「よかった」

マリーベルは安心して息をついた。

「はい、じゃあ募金をお願いします」

アンは、さっと自分の机の下から募金箱を出してくると、マリーベルの目の前に差し出した。

箱には『水の星に愛をこめて』と手書きで書かれている。

「えっ、ぼ、募金!? どういうこと?」

「出資者なら無理難題をおっしゃってもよろしくてよ。『水の星募金』一口千クレジツトからです」

アンはにっこりと笑っていった。

つまり言いがかりを止めて欲しければお金を払えということだ。はっきり言えばた

かりである。

その凶々しさにマリーベル・リップルは絶句した。

「またタイププレさんの募金が始まった。もう、雰囲気悪くなるからやめてよ」
クラスメイトたちから抗議の声があがる。

「何言ってるの！ シヤア大佐は確かに正しいわ！ 地球は疲れきっているのよ！

人は長い間、この地球というゆりかごの中で戯れてきたの。早く対策をしなければ、地球は水の惑星ではなくなってしまう。そのための募金なのよ！ さあ、マリーベルさん早く募金しなさい！」

「そ、そんな。急に言われても……」

ちやうどそのとき。タイミングよく始業のチャイムが鳴って、数学教師のヘルムートが教室に入ってきた。

「授業を始める！ 私語は慎むように。今日は最後にテストをするからそのつもりで」

「ええ、つ、そんなの聞いてないよ」

助かった……。何しろ財布の中には五百クレジットしかなかったのだ。

どう言い逃れしたら良いか考えあぐねていたマリーベル・リップル——その正体はジオンアフリカ方面軍所属のプルフォウ大尉——は、心の底からほっとした。

冗談じゃない。こんな目に遭うのもあの忌々しい少佐のせいだ！

着慣れない服、パイロットスーツとは何も共通点がない服、リボンが着いたブレザーとひらひらしたスカートといった制服に身を包み、自分は女生徒の真似事をしている。この状況は到底承服できない。だが、軍人として上官の命令は絶対なのだ。

この秘密作戦、コードネーム《ロストエメラルド》を立案したのはネオ・ジオン残党軍諜報部付きの専任少佐で、プルフォウをミーミスブルン学園に生徒として潜入させると決めたのも彼だった。

プルフォウは、自分はパイロットでスパイではないと強硬に反対したのだが、少佐は彼女が適任だと決めて譲らなかつたのだ。

第6話 「地球に降りた者たち」

5

三週間前 北アフリカ

北アフリカ西部に位置するモーリタニア、その旧首都ヌアクシヨット近郊にジオン残党軍の基地があった。

この砂漠に埋もれるように偽装されたジオン・アフリカ方面軍第七基地は、地下施設も備えた中規模の施設で、一年戦争の遺産ともいえた。北アフリカは地中海に面しているために兵站的にも有利で、ジオン公国はこの地域に、地球侵攻作戦の補給と兵站をつかさどる中継基地を数多く建設したのだ。

一年戦争が終結した後、ヨーロッパやアジア各地に設けられたジオン前線基地のほとんどは地球連邦軍に制圧、接收されてしまったが、アフリカ大陸では旧世紀から民族独立紛争が続いていて、地球連邦軍がこの地域の管理を半ば諦めていたことが第七基地には幸いした。

基地の所在はほとんど忘れさらられ、軍の戦略マップにも掲載されずに、ジャンク屋の旧式パーツ程度の扱いで放置されたのである。地球においてはヨーロッパやアメリカ大陸の復興こそが急務であり、価値の低いアフリカ大陸の優先順位は限りなく低く設定されたのだ。

いま第七基地、通称ヌアクシヨット基地の簡易シエルターでは、いつものようにモビルスーツの整備が行われていた。

アフリカ大陸特有の気候による高温と乾燥と埃、そして機体不足による過剰な稼働時間が、精密機械であるモビルスーツを消耗させる。補給もままならない貧乏所帯のジオン残党軍においては、パイロットとメカニックマンの努力と熱意と綿密な作業が、巨大な人型兵器の稼働率をкаろうじて保ち続けているのだ。

シエルター中央の整備ハンガーには、基地のフラッグシップ機、試作重モビルスーツAMX-021X《ベルグソン》が固定されていた。

この《ベルグソン》は、ネオ・ジオン軍の次期主力MSコンペティションにおいて、AMX-014《ドーベン・ウルフ》に敗北したAMX-011《ザクⅢ》開発チームが試作した機体だ。《ザクⅢ》は名機MS-06《ザク》の名を冠したものの、汎用性を高くしたばかりに性能不足だとネオ・ジオン上層部に判断され、対抗馬の、より大型で大火力を有する《ドーベン・ウルフ》が正式採用されたのだ。

だが、その短絡的で近視眼的な判断に怒り狂った《ザクⅢ》開発チームは、《ザクⅢ》をベースとして高性能サイコミュ・マシーンを作ることにした。技術の全てを注ぎ込み、自分たちが開発したモビルスーツのポテンシャルを証明しようと考えたのである。プロジェクトには気鋭の若手モビルスーツ技術者も参加し、そのアイデアと開発チームの執念が結実した結果、《ベルグソン》は、高性能機として完成した。

ベース機と比較してフレームと装甲が強化され、固定武装もメガ粒子砲、ビーム・キャノン、マシン・キャノンと充実化が図られた。さらに姿勢制御用スタビレーターと兵器コンテナを兼ねたアクティブ・バインダーを肩にマウントし、重力下飛行用に補助ジェットエンジンを装備したことによって機動性も飛躍的に向上した。加えて操縦インターフェイスとしてサイコミュも搭載され、必要ならば遠隔攻撃端末であるファンネルを搭載することも可能だった。

機体が大型化したことから。やや操縦は難しくなったが、もとよりスキルの高い強化人間用なのでそれは大きな問題とはならなかった。《ベルグソン》はこれ以上ないほど強力なモビルスーツに仕上がりに、開発チームは間違いなく正式採用されると信じて疑わなかった。

しかしながら完成が遅すぎたのである。ネオ・ジオン軍が地球連邦軍に敗北してしまつた結果、《ベルグソン》は正式採用される機会を永久に失ってしまった。けつきよく

二機が試作製造されただけにとどまったのである。

いま又アクシヨット基地に配備されているのは、アクシズが陥落した際に混乱に乗じて地球に持ち込まれた一機だった。

「このところ左腕のレスポンスが悪いんだ」

整備車両のバスケットに立つ少女が、『ベルグソン』左腕のメンテナンス・ハッチに身体を差し込みながら、傍に立つメカニックマンに話しかけた。

彼女は若干14歳ながら『ベルグソン』のメインパイロットを務める大尉で、この『ベルグソン』の開発にも関わったモビルスーツエンジニアでもあった。

「ああ、やはり思った通りだ。テストアーの数值では、アームレイカーの入力からの反応時間が〇・二秒遅れているな」

「プルフォウ大尉、光ファイバーセンサーには、フレームの歪みは検知されていませんでした」

「そうか……。リニアシートが壊れてきたかな？」

プルフォウは、シャツで汗をぬぐいながら言った。この簡易シエルターにはクーラーが設置されていないので、彼女は上半身シャツ一枚という姿だった。その豊かな胸が強調された姿に。メカニックマンは目のやり場に困まっていた。

「データログをみると、リニアシートからの信号に遅延はありません」

「だとすると、原因はフィールドモーター?」

フィールドモーターとは、モビルスーツの駆動部に組み込まれた超電動技術を応用したモーターのこと。通常のモーターや油圧シリンダーと比較してレスポンスが非常に速く、人を模したモビルスーツには欠かせない部品だ。

「その可能性は高いですね。いまチェックしてみたんですが、肘関節のフィールドモーターの磁界が弱まっています。まだ許容範囲ですが、大尉の反応速度だと気になる遅れかもしれません。……交換しますか?」

「予備はあるのか?」

「はい。このサイズのフィールドモーターは、あと三基ストックしています。分解整備する必要がありますが、一時間もかければ終わりますよ」

「しかし、まだ動くからな……。電圧を上げてみようか? 負荷がかかって寿命は短くなるが、どうせ交換するんだったら」

「良いアイデアだと思いますが、他の電子機器に影響がでるかもしれません」

「まずいかな」

「電磁シールドを二重化すれば大丈夫でしょう」

「よし、頼めるか? わたしはサブプログラムのパラメータを変更する」

機体修理の方針に満足すると、プルフォウは高所作業車のバスケットを降下させた。

「まったく、こいつは手間がかかるよ。自分も開発に関わっていたから言えたことじゃないが、もう少し互換性を持たせるべきだったな」

ミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉を動力とし、人間と似通った動作を可能とする可動骨格ムーバブルフレームから構成されたモビルスーツは、恐ろしく精密なメカニクスの集合体だ。にもかかわらず、白兵戦用の兵器だから、至近距離から銃で撃ち合ったり両腕で殴り合ったりと、とうてい上品に扱われることはない。

動作機構は二重三重のバックアップ経路を備えているため、細かな故障がすぐに動作不良に繋がるわけではないが、それでも常日頃のメンテナンスが大切なのだ。しかも、同じタイプが大量生産される地球連邦軍とは違って、ジオン系のモビルスーツは少数しか生産されないモデルが多い。

だから、そんなカスタム機に近い機体を維持するのは、主に部品の少なさによって困難が伴うのだ。工場からロールアウトしたばかりのまっさらな機体と修復を繰り返した機体とは、内部の部品がそっくり異なっていることも珍しくはない。

「せめて、もう少し予備パーツがあれば整備も楽なんだが……」
プルフォウは基地の補給事情を嘆いた。

地球連邦軍に敗北したジオン公国軍と、一年戦争後、ジオン公国の思想を受け継ぐ者たちが立ち上げたネオ・ジオン軍。両者とも地球連邦軍に敗北したが、かろうじて生き

残った残党たちは、寄り合って宇宙と地上で抵抗運動を続けている。出資者やスポンサーは少なく、当然ながら潤沢な補給は望めない。だからこんなオイルまみれで苦勞をしているのだ。

プルフォウは、アクシズ時代からモビルスーツの開発・製造に関わっていたので、その構造には詳しくかった。なにしろ、この《ベルグソン》も自ら基礎設計に関わったくらいなのだ。

だから、自分のスキルを活かしてモビルワーカーやモビルスーツを修理する商売を始めたら、けっこう稼げるのではないかと彼女は思ってしまった。ダミー会社を設立すれば活動資金の足しにもなる……。

馬鹿だな、それじゃまるでマツチポンプじゃないか。

プルフォウは馬鹿げた自らの考えに自嘲しつつ、電算機室に向かうためにバスケットを降りた。コクピットでも作業はできるのだが、いいかげんに暑いので、涼しい電算機室のワークステーションでプログラムをコーディングしようと考えたのだ。

(そのまえに食堂でアイスクリームでも食べるか)

オイルで汚れた手を拭いて、暑さと喉の渴きを一掃する好物を頭に思い描いたとき、プルフォウは部下のエルマン中尉が走りながらやってきたことに気が付いた。

「プルフォウ大尉ーっ！ ゲオルク少佐がお呼びですー！」

エルマン・クレメンズ中尉が、息を切らせながら、ただそれだけを伝えてくるために走ってくる。その姿は、まるで子供の使いのようだった。

「中尉。わざわざ来なくても内線で呼んでくれればいいよ」

プルフォウは、人手が足りない基地でただの使い走りをしてしまう部下を叱責した。それにしても上官に呼びつけられるとは……。そういうときは、大抵ろくなことがないものだ。

普遍的な法則は、宇宙世紀にあっても変わらなかつた。

「大尉を内線で呼びつけるなんて失礼です。エレカに乗ってきましたからね、お送りしますよ大尉」

「そうか。お前にしては気が利くな」

叱りはしたが、その申し出にはプルフォウも思わず笑みがこぼれた。中規模な基地とはいっても、滑走路を挟んだモビルスーツデッキから司令室がある建物まではかなり距離があるから、歩くと意外に体力を消耗するのだ。

「お安いご用ですよ。自分はエレカの運転が得意なんです。モビルスーツよりね」

「ははは、そうだろうね。中尉がエレカを運転している姿は、本当に楽しそうだ」

「わかりますか？」

「ああ、一目でね。そうだ、リニアシートとの操縦桿をハンドルに交換したら、お前もモ

ビルスーツの操縦がもつと上手くなるんじゃないか？」

プルフォウの半分本気の言葉に、エルマン中尉は苦笑しつつエレカを始動させた。

中尉はプルフォウが助手席に座ってシートベルトを締めるのを確認すると、アクセルペダルを踏み込んで短いドライブを開始した。

エルマン中尉はプルフォウより十歳年上で、そんな彼が上官を助手席に乗せて走る姿は、妹を迎えにきた年の離れた兄という感じだった。それを冷やかす視線もあつたが、エルマンは気にせずエレカを走らせた。基地で運用する小型エレカは少々窮屈なので、並んで座るとお互いの身体がくっついてしまうのだが、彼にとってはそれが何よりの楽しみなのだ。

大尉はシャツだけしか着ていないので、エレカが揺れて身体が動いたたびに彼女の胸元が露わになる。その光景を横目で覗き見ながら、エルマンはその無防備さに心を乱された。視線に気付かない横顔も美しい。

エルマンはプルフォウに見惚れた。

任務中にそんなことを考えてしまうのは若さゆえで、軍人として褒められたことではないのだが、彼のジオン軍人としての信念は確かに本物だった。

エルマン・クレメンスはサイド3のジオン共和国に住んでいたが、まともな職がなく、抑圧されて惨めな暮らしを続けていた父親を間近に見て育った。エルマンはアルバイ

トで家計を助けながら、いつか自分が偉くなって家族を養ってやろうと心に決めていた。

そんなある日、父は日雇いのコロニー建設作業であっけなく命を落としてしまった。ろくな安全対策すらされない危険な仕事だったが、残された家族には何の保障もされなかった。

そのときエルマンは、不幸の原因は地球がスペースコロニーを顧みないことなのだと気が付いたのだ。だからスペースノイドの解放という理想を胸にネオ・ジオン軍に入隊したのである。彼はパイロットとしての技倆とセンスはそれほど高くなかったが、それでも第二次ネオ・ジオン戦争を生き延び、アクシズが陥落した後は地球に逃げ落ちて、未だ戦いを継続しているジオン・アフリカ方面軍に参加したのだった。

プルフォウと出会ったのは二年前、彼女がこの基地に配属されてからすぐのことだ。最初は誰かの娘が訪ねてきたのかと勘違いして「お嬢さん、パパを訪ねてきたのかい？」とうかつにも尋ねてしまった。そのとたん彼女に投げ飛ばされて、何が起こったのか分からぬまま、衝撃とともに床に仰向けに倒れた。

しばらく呆然としてしていると、その少女に腕を掴まれて助け起こされた。「見かけで相手を判断すると死ぬことなるよ。気をつけな」と叱責されながら。

その鮮烈な姿は、ずっとエルマンの目に焼き付いた。そして彼女の美しさと強さがあ

れば、ジオンの理想もかなうのではないかと思っただのだ。

エルマンはプルフォウと一緒に戦い続けて、その思いは間違いはなかったと確信していた。彼女と一緒にいれば、どんなことでも実現可能な気がするのだ。

「大尉、少佐の用事って、何なのでしょうか？」

「ん？」

エルマンは上官を横目で見ながら言った。運転しながらよそ見するのは危ないのだが、どうしても惹きつけられてしまう。

「このところ戦局は落ち着いているからな。あるいは異動かもしれない」

「えっ!？」

「他の基地に転属とか……。この基地に配属されて二年経つから、可能性はあるだろう」

「そんな、俺は断じて反対です！　大尉がいるからこの基地は持っているようなものです。異動だなんて」

「わたしが抜けたらお前が昇進するさ。いつまでもわたしの部下じゃ不満だろ？」

「とんでもない！　大尉の部下で不満など一切ありません！」

「そ、そうか。満足してくれているのは嬉しいが……。まあ、シャワーを浴びてから少佐に会って話を聞いてみるよ」

「すぐに知らせてください」

「わかったよ。それにしてもハンガーは暑いな。アイスクリームを常備して欲しいところだね」

「それについては、自分がなんとかします」

アイスクリームがプルフオウ大尉の大好物だということは、第七基地の誰もが知っているトリビアだ。上官がシャツの胸元を引っ張りながらあおぐ姿に視線を引きつけられつつ、エルマンは彼女の期待に応えることを約束した。

第7話 「潜入任務」

6

「姫様が地球にいらっしやる?! それは確かな情報なのですか!」

プルフォウは、上官であるゲオルク少佐から衝撃的な情報を聞いて、思わず声をあげてしまった。

なにしろ、この数年間行方不明とされていたジオン公国の姫君ミネバ・ラオ・ザビ殿下が、ここ地球に滞在しているというのだ。それが本当の話だとすれば、重要機密扱いで、噂話でも話してはいけないレベルの情報である。

だが、少佐から渡されたコンピューター・パッドには、確かに事実だと裏付ける命令書が表示されていた。しかも命令書にはあのシャア・アズナブル大佐の署名すら書かれていたのである。

「い、これは……」

今から五年前の宇宙世紀〇〇八七年、地球と火星との間にあるアステロイドベルトに位置する資源衛星アクシズは、ジオン復興を掲げて万難を排して地球圏に帰還した。そ

して摂政である女傑ハマーン・カーンは、一年戦争の英雄ドズル・ザビ中将の娘、ジオンの忘れ形見ミネバ・ラオ・ザビを姫として擁していた。

そのミネバ殿下が本物であるという保証もなかったが、間違いなくアクシズ内で敬意が払われていたことは事実だった。彼女はジオンの希望であり象徴だったのだ。

しかしプルフォウが訓練を終えて親衛隊としての任務に就いたとき、すでにミネバは影武者にすり替わっていた。地球連邦軍との戦争や内乱によつて組織は混乱し、彼女の立場も危うくなっていたのである。それ以来、本物のミネバ・ラオ・ザビ殿下の行方を知るものはおらず、一部では死亡したという噂も流れたほどだった。

「姫様が、第二次ジオン独立戦争時に行方不明になったのは知っています。私は姫様の影武者と友人でしたから。彼女が話していたのです、ミネバ殿下は安全な場所に逃がされたのだと」

「聞いたことがあるよ」

「その姫様が、なぜ地球に？」

「さあ、わたしも詳しくは知らない。この数年間行方が知れなかったからな。だが、ここにきてダイクン派から情報がもたらされたのだ」

「ダイクン派？　つまりシャア・アズナブル大佐が、生きているということですか？」

「そのとおりだ。シャア大佐は月の軌道外で独自の艦隊を編成し、近々地球連邦軍に

対して大規模な反攻作戦を計画中らしい。だから安全のために殿下を地球から宇宙へ脱出させろということなんだ。指揮系統上は我々に命令なんか出せないんだがね……」

ゲオルク少佐は少々不満そうな態度をとる。ジオンで大きな影響力を持つシヤア大佐が組織したとはいえ『新参者』の組織に命令されるのが気に入らないようだった。いまや勢力が弱まった地球のジオン残党軍ではあるが、古参の生粋のジオン軍なのだ。

「姫様に危険が及ぶので、地球から逃がそうと？　まさか再度コロニー落としを？」

「まあ、あり得る話だろう。……そのときには、前もって俺たちにも情報が欲しいところだな」

少佐は肩をすくめて言った。

《コロニー落とし》とは、宇宙に浮かぶ人工都市スペースコロニーを地球に降下させ、そのまま質量爆弾として用いるという、非道かつ乱暴な攻撃手段だ。一年戦争の開戦時に奇襲で地球にコロニー落とし作戦をしかけたジオン公国は、文字通り悪魔のような国家として永遠に人類史に記憶されたのだ。

だがコロニー落としという攻撃手段は、実はあまり効率の良いものとはいえなかった。占領対象である地球の都市ひとつを消滅させ、さらにスペースノイドが宇宙に住む台地、基盤をまるごと失わせてしまうのだ。長期的に考えれば結局は攻撃者自らの首を絞める行為なのである。

またスペースコロニーは、重力を発生させる自転エネルギーをなるべく少なくし、加えて建造コストも抑えるために、大きさの割にかなり軽量に作られていることも問題だった。それゆえコロニー落としの最終段階では大気圏突入の際の衝撃に耐えられず、ほとんど崩壊寸前の状態で地表に落ちてゆくのである。

派手な作戦の割には質量爆弾としての威力は低く、戦略的には相手を脅して恐怖させて、交渉を有利に進める意味合いが大きい。もし本当に効果的な質量爆弾攻撃を仕掛けなければ、コロニーより中身が詰まった巨大な隕石を用いるべきだろう。

ともかく、そんな政治交渉目的の過激なパフォーマンスのために、味方に頭から潰されたらたまらないというゲオルクの意見には、プルフォウも賛成だった。

「今回の作戦のために、ザビ派のわれわれも、さらなる支援や補給が受けられるのでしょうか?」

「それはあるだろう。ジオン独立を理念とするのは共通だからな。本家や分家みたいなものだろうが、潰れそうな家で身内で争っても仕方がない」

ジオン公国、ネオ・ジオン、そのどちらもが身内の派閥争いで自滅したことを、プルフォウは思い出していた。

とはいえ支援という意味では、地球のジオン残党軍に対する宇宙からの補給は増えつつあるのだ。

彼女の愛機であるAMX-021X《ベルグソン》も新生ネオ・ジオン経由で宇宙から降ろされたもので、さらにAMX-009《ドライセン》やAMX-011《ザクⅢ》といった、比較的新しい部類に入るモビルスーツも搬入されている。

しかしながら、捨てるよりは厄介払いで送りつけた方がましというような機体もあった。特務仕様と聞こえは良いが、どうみても冗談で設計したとしか思えないモビルスーツが補給機体の中に混じっていたのだ。

象のような長い排気ダクトを有し、両腕に大砲をそのまま取り付けた鈍重そうなモビルスーツMSM-04G《ジュアツグ》は特に酷いものだった。実に旧ジオン公国時代の十三年前の機体である。

プルフォウはいったいどうすればあのような酷い兵器が開発できるのか、疑問に思うと同時に腹を立てた。おおかた現場を知らない、頭でっかちの技術者が思いつきで作ったのだろう。そして負け戦で混乱した軍部は、こんなポンコツでも祖国を救う超兵器に見えたに違いない。パイロットとして、動く棺桶には乗りたくないものだ。

「それで、わたしの任務は何なのでしょうか？」

「うむ。大尉には、姫様が滞在しているという寄宿制の学園《ミーミスブルン学園》から彼女を連れ出して、宇宙に脱出させてもらいたいのだ」

「潜入任務なのですね」

「そうだ。ただし、きみには生徒として学園に潜入してもらおう」

「……………えっ?」

その指令を聞いたとき、プルフォウは数秒間ゲオルク少佐が何を言っているのか理解できなかった。普段より冷静さを常とする彼女が混乱するというのは珍しかったが、文字通り頭の中が真っ白になってしまったのだ。

姫様を連れ出すというのは分かる。だが『生徒として』とはどういうことなのか?

ゲオルク少佐が冷めたコーヒーを飲むのを、プルフォウはじっと見つめた。

「……………少佐の仰ってる意味が良く分かりません」

疑念の言葉が口から吐き出された。

「優秀な君らしくもないな。話したそのままだよ。学園の生徒に偽装してしばらく滞在し、適切なタイミングで姫様を宇宙に上げるということさ」

呆然と佇むプルフォウに対して、ゲオルク少佐は大した任務でもないだろうといった様子だった。彼女の年齢は十四歳だから、モビルスーツを操縦するよりは生徒のふりをする方が遙かに自然で簡単なことだと少佐は考えているに違いなかった。

こんな馬鹿な任務を承服できるわけがない。

「お言葉ですが、まともではありません少佐! わざわざ生徒として潜入しなくても、誰かが学園の職員を装えばいいのでは? まったくまわりくどい作戦です。自分は子

供の真似などでできません！」

プルフオウはパイロットである自分に女生徒のふりをしろという、あまりに理不尽な命令に猛然と抗議した。

「大尉、ただ乗り込んで行ってミネバ・ザビ殿下を連れ出せばいいわけじゃないんだ。内部の状況はよく分からないのだから。しかも任務の性格上、周囲に悟られないように連れ出さなくてはならないのだ。調査をしつつ脱出プランを考える必要がある。アドリブと柔軟な対応が必要な、非常に困難な任務だよこれは。頭脳明晰な君には適任だろうか？ それに気を悪くしないで欲しいんだが、大尉の見た目は紛れもなく少女なのでね」

「……」

「不満はあるだろうが、生徒として自然に振る舞えるように、専門家から七日ほどレクチャーを受けてもらいたい。まあ文化や習慣なんかだな。君はすぐに士官学校に入学したから、普通の学校に通ったことはないのだから？」

「姉妹と一緒に、施設で教育を受けたことはありません」

「それは有能な軍人になるための英才教育だな。大尉は親衛隊だったと聞いている、普通の子供とは少々異なった環境だ」

「それが任務でしたから」

「だからこそだよ。努力して十四歳らしい女の子になってくれ」

「しかし……」

「大尉、これは命令だ。文句をいわずに実行しろ。命令違反は独房で過ごすことになる。それよりは学園で気楽に過ごす方がいいんじゃないか？」

プルフォウはゲオルク少佐の、脅しともとれる命令に腹が立った。部下に命令を承諾させるテクニックなのだろうが、こういう性格が、部下にいまいち信頼されない理由なのだとは口にはできなかった。

「了解しました。プルフォウ大尉、これより任務の準備に取りかかります。自分も、あんな使ってもいない独房で過ごすのは御免被ります」

「いちおう掃除はしているよ」

「少佐。あの部屋、隙間からサソリが入ってくるという噂ですよ？」

プルフォウは少佐に敬礼してから部屋を出た。そして渡された指令書に従って、女生徒を促成栽培するための訓練部屋グリーンハウスへと向かった。

そこは本来は、新米パイロットの訓練や、能力に劣るパイロットが再教育される施設だ。

なんとという屈辱。

普段は自信に満ちあふれて颯爽と歩く彼女の足取りは、今は足枷でも付けているかの

ように重かった。

第8話「グリーンハウス」

7

グリーンハウス
訓練部屋の一室は、白い内装に椅子とテーブル、壁に埋め込まれたモニターがあるだけの簡素な部屋で、程度の大きさの部屋だった。

いま、部屋には二人の人間がいて、ひとり椅子に座り、ひとりは演台に立っていた。「プルフォウ大尉、おつかれさまです。自分が今回の作戦についての必須情報をレクチャーさせていただきます」

「なんだ。講師つてエミリー軍曹か」

「おかしいですか？ これでも自分は駆け出しの俳優だったんですよ。だから『演じる』ことについては詳しいんです」

「ああ、そういえばそうだったな」

二人が向かい合っている様子はまるで学校の授業のようで、およそ軍事基地には似合わない光景だった。

エミリー・バルドは二十九歳の女性兵士で、ジオン・アフリカ方面軍の兵站を担当す

る下士官だ。彼女は物資を各基地に効率的に輸送、分配するロジスティクス能力に長けていて、さらに地球連邦軍の監視の目をかいくぐる輸送計画を立案する必要性から、連邦軍の部隊や内情にも詳しくかった。エミリーなしではネオ・ジオン残党軍は崩壊すると、冗談で言われるほどの有能な人材なのだ。

そんな彼女がサイド3で女優を生業としていたという話は有名で、テレビドラマや映画の脇役で彼女の顔を知っている兵士も多かった。ショートカットの黒髪と切れ長の瞳、形の良い唇は、確かに俳優といってもおかしくない風貌だ。

「民間の演技学校から講師を呼ぶことも考えましたが、作戦上の秘密保全が面倒なので、ですから私が担当させて頂きました。知る限りの知識を大尉に伝えることが自分の任務です」

「期待している。……それにしても、私が生徒になるなんてな」

「おそらく年齢で選ばれたのでしようね。だって大尉は十四歳ですから」
「脳天気な作戦だよ本当に」

気乗りはしなかったが、任務に忠実なプルフォウは、とにかく七日間で準備を万事整えるつもりだった。女生徒が軍人のふりをするよりは、軍人が女生徒のふりをする方が簡単だ。そう考えて納得することにしたのだ。

元俳優であるエミリー軍曹の持つ知識を全て吸収すれば、自分にも演技の真似事が出

来るかもしれない。学習能力には自信があるのだ。とはいえ、このような、ある意味芸術的な分野で自らの学習能力を試してみたことは一度もない。アクシズ時代に、血迷って音楽や絵画にチャレンジしたこともあったのだが、そのひどい記憶は固く封印されて、頭の中から消えさつていた。

「大尉は、まずそのムスっとした表情をなんとかする必要ががありますね」
エミリーは、不機嫌な顔をしている。プルフォウを見て言った。

「いつてくれるじゃないか」

「あ、すみません。悪気はないんです」

「わかつているよ、気にするな軍曹。実際その通りだからな。つまり、いつも笑ってればいいんだろ？」

「では、いま笑ってみて頂けますか？」

「……えっ？」

「いつも愛想よく笑っているというのは、なかなか難しいことなんです」
確かに意識して笑うと、どうしても不自然になってしまう。

「こ、こんな感じか？」

プルフォウは無理やり軍曹に笑いかけてみたが、それはひきつったような顔にしか見え、笑っているというよりは怒っている顔にしか見えなかった。

「申し訳ないですが、全然ダメですね。これじゃミネバ様も驚いて逃げてしまいます」
「そうはいつても、わたしには無理だ。急に性格を変えるなんてさ」

「難しく考えなくて良いんですよ。ただ相手に合わせればいいんです。鏡を見て練習するのが一番効果的ですよ」

「鏡で？」

「自分を客観的に捉えることが出来ますからね」

「フン、私だって鏡を見ることはあるぞ？」

「ふふふ、大尉はお綺麗ですから。あ、その堅苦しい軍服もいけないかもしれませんね」

「軍服が？ それはどういう意味だ？」

「ちよつとこちらに来て頂けませんか？」

「あ、ああ。わかった」

言葉にしたがつてプルフォウが歩いてくるなり、エミリーは彼女の軍服に手をかけ脱がし始めた。

「わつ、な、何するんだ!？」

「大尉、女生徒らしい服装に着替えて頂きます」

「やめてくれ！ 自分で出来るっ！」

「でも学校の制服、着方が分からないでしょう?」

「た、確かにそうだが、ここで着替えるのか!? 更衣室で着替えさせてくれ!」

「制服の着方も講義内容のひとつなんです」

「……どうしても必要なのか?」

「はい、どうしても。大丈夫ですよ。ここには、わたしたち二人しかいないんですから。さあ!」

「わ、わかったよ……」

エミリー軍曹は僅かに上気した顔で上官の衣服を脱がし始めた。背丈の違いから妹の着替えを手伝う姉のようにも見えるのだが、プルフォウの肢体を見つめる軍曹の熱を帯びた視線には尋常ならざるものがあつた。

上官をすつかり下着だけの姿にすると、軍曹は新しい下着を袋から取り出した。

プルフォウは、部下の前で下着姿をさらしている屈辱から、自分の顔が赤くなるのを自覚した。

「下着は、これをつけて頂きます。よろしいですか?」

「よろしいって、するしかないんだろ……」

それはいかにも年頃の女の子が身に付けていそうな、ひらひらしたフリルが付いたもので、およそプルフォウの好みとはかけ離れていた。彼女は動きやすい下着が好みで、

いまはシンプルな黒のタンクトップとハーフトイツを身に付けている。そのコーディネートを脱がそうと、エミリーは手をかけてきた。

「自分でやるからっ。頼むから、少しの間見ないでくれ」

「はい、わかりました。でも、お手伝いが必要なときは仰つてくださいね?」

エミリーは、ため息をついていかにも残念そうに応えたとプルフォウに背を向けた。が、彼女がそくさと下着を身につけている間、エミリーは横目でそれを盗み見ながらほくそ笑んでいた。

……ぬかりはない。ちょうど大尉を真正面にとらえるように隠しカメラを設置しているのだ。いま大尉の着替えを見れなくても気に病むことは無い。あとでじっくりと鑑賞すればよい。エミリーは、その至福の時間を想像して興奮を抑えることができなかった。

実のところエミリー軍曹は、この任務に率先して志願していたのである。

「それでは制服を着てみますか?」

エミリー軍曹は嬉しそうにシャツ、ブレザー、スカートをコーディネートし、それを手慣れた手付きでプルフォウに着せていった。ときたま軍曹の手がプルフォウの滑らかな肌を優しく触り、そのたびに彼女はぞくつと体を震わせた。

少々密着しすぎのようにも感じたが、プルフォウは我慢して軍曹の言いなりになっ

た。

「はい出来ました。鏡を見てみませんか？ 可愛い女生徒がそこにいますよ」

エミリーが仕上げにキュツと胸元のリボンを結ぶと、女性兵士に替わってミーミスブルン学園の女生徒が部屋に現れた。確かにそこには女生徒がいた。まるで自分ではないような、人形みたいな少女がそこに立っていた。

これがわたしなのか？

正直なところ信じられなかった。同じ顔なのに別人のようで、その奇妙な感覚に自分の姉妹を思い出して、感傷的になってしまった。

そして、すぐさま恥ずかしさがこみ上げてきた。この基地に赴任してからずっと、こんな女性らしさを演出するような、着飾るような格好をしたことがなかったからだ。

なんとも気恥ずかしいファッションショーだとプルフォウは感じた。

「あのな、これじゃ道化だよ……」

「とんでもない！ 凄く綺麗ですよ大尉！」

「気休めはよしてくれ。このブレザーは飾りが多くて動きにくいし、ドムみたいに下半身がスカスカに空いてるのが落ち着かない。涼しいのはいいんだが、これじゃ下から見ると下着が丸見えなんじゃないか？」

「まあ、スカートですから。見えるでしょうね」

「それにこのリボン！ 甘ったるくてわたしは嫌いだ。いけないよ恥ずかしいっ」
エミリー軍曹に、文字取り人形のように一方的に制服を着させられて、プルフォウは屈辱感を味わっていた。

自分は上官なのだ。軍曹に止めろと命令する権利だつてあるのだと、プルフォウは頬を膨らませながら思った

「そんなことありません、恥ずかしがるなんて！ こんなに綺麗な生徒はいませんよ」
「からかわないでくれっ！」

「転校したと勝手に学園のアイドルでしようね。うくん、ちよつと可愛すぎて目立ってしまうのは、潜入作戦上まずいかなあ……。あ、もしかしたらミネバ様も学園のアイドルになっているかもしれないね。だったら、接触するには好都合かも」

「アイドル、アイドルつて……。言葉の定義を教えてください」

「言葉の定義ですか。アイドルというのは、まあ簡単にいえば、ある特定のコミュニケーションで一番人気がある人物のことです。ジオンで言えばミネバ・ザビ殿下やシャア・アズナブル大佐、あるいはファンネリア・ファンネル、マリー・ファンネル姉妹などでしょう」

「ファンネリア？ 誰だそれ？」

「ジオン共和国のアイドルですよ。年齢は大尉と同じくらいで、かなり人気がありますよ」

すね。今はネオ・ハリウッドで女優をしています」

「ネオ・ハリウッド……たしかアメリカ大陸にある、映画産業が盛んな街だな」

「これを読んでみてください、大尉」

エミリー軍曹から手渡されたファッシュン雑誌には、ハリウッド女優ファンネリア・ファンネルの特集記事が組まれていた。プルフォウはこの数年間北アフリカの荒涼な砂漠地帯でパイロットをやっているが、そんな自分とは縁遠い世界が珍しく興味をひかれた。

ファンネリア・ファンネルは、以前はジオン共和国で活動していて、当時からかなりの人気を誇っていたのだが、四年前に一切を捨て、身一つで地球のアメリカ大陸に渡ったのだ。そして努力の末、ネオ・ハリウッドで女優として活躍するという夢を叶えたのである。

「なるほど、アメリカン・ドリームというわけか……。素晴らしい話だね」

プルフォウは、ファンネリアを綺麗な女性だと思ったが、なんとなく自分に似ているとも感じた。

「妹たちが生きていたら、どんな人生を歩んでいたんだろうな……」

プルフォウの姉妹は、四年前のアクシズの内乱でみな戦死してしまった。いつも夢の中では、妹たちが次々と撃墜されていく悪夢のような場面が繰り返し再生されている。

彼女は、暗く沈んだ気持ちを切り替えるためにページをめくった。

次のページには、宝飾品やバッグ、衣服を扱う総合ファッションブランド『チエルシー・テン』の特集記事があった。

『チエルシー・テン』は復興したニューヨークに本店があつて、新進気鋭の女性デザイナー、チエルシー・テンが代表を務める人気ブランドだ。当初は小さなアクセサリー・シヨップだったのだが、ファンネリアが身に着けたことで評判を呼び、一躍注目のブランドとなったのである。

ゆつたりとした服に身を包んだチエルシーの前髪は左目を覆うほどに豊かで、メガネをかけた顔は、著名なデザイナーには似つかわしくないほど可愛らしかった。

特集では、女優のファンネリアのためにデザインしたアクセサリーを手にインタビューを受けていたが、どうやら二人は知りあいらしく、会話が盛り上がっているのが文章からもわかった。

「なるほど。これは、文字通り私とは世界が違う人間だね」

プルフォウはコンピューター・パッドを操作して雑誌を閉じた。

「そうです。大尉は、これから違う世界に飛び込むのですよ」

「学園がこんな虚飾だらけの世界なら願ひ下げだ」

「あなたらしい言葉ですね。仕事に飾りは不用だというわけですか？」

「軍隊が飾りを作ることに専念すれば、張子の虎になってしまいうからな」それはプルフォウの実体験に基づく真理だった。

「ですが大尉、軍事における情報戦や心理戦は、ある意味ファクションやプロパガンダみたいなものですから。今回の任務にも求められることだと思いますよ？」

「どういうことだ？」

「だって自分を偽るのでしょうか？ そのためには内面、外面を飾ることに専念するしかないんです」

「そういうとらえ方もあるか……」

「アクシズを統率されていたハマーン閣下も、自らを飾ることにご熱心だったと思います」

「思い出してみると、ハマーン閣下は随分派手な格好をしていたな」

「聞くところによると、本来の性格はもっと穏やかだったそうなんです。それが、あんな仮面まで身に着けていた。つまりハマーン閣下は心理的效果を狙って、自分を飾ることで世間に異なるイメージを植え付けたのです」

「なるほどな……。しかし、テレビや映画に出演していた軍曹なら、そういう類のことは得意だろうな？」

「わたしの話ですか？ わたしも当時少しは人気があつたので、いろいろやってはみ

ましたね。自分を売り込むことが重要なんです。グラビアだって出しました」

「グラビア？」

「はい。ホログラフィック写真集のことなんです。カメラの前で男性が喜びそうな恰好で媚びたポーズをしたり、ちよつと切なげな表情をしたり……あとは裸に近い恰好の水着や下着で、思い切りはしゃじやつたりするんです」

「酷いな……。そんなのわたしならどうても耐えられないぞ」

「まだ十代でしたけど、お小遣い稼ぎには良かったですね。自分では青臭い、子供っぽい写真集だと思ったんですけど、そういうのが好きな男性は意外に多いんです」

「まったく理解したいことだ」

「大尉もグラビアを出したら売れると思いませんか？」

「ははは、冗談はよしてくれ！ 誰も買わないよそんなの！」

「ふふふ……」

エミリー軍曹は思わせぶりに笑った。

これはプルフォウ以外、基地の全員が知っている話なのだが、実はエミリーは、盗み撮りしたプルフォウの生写真をジオン残党軍の兵士達に密かに売っていたのだ。

飲み物を飲んだり、颯爽と歩いていたり、休息していたりする、プルフォウの日常の一瞬を切り取った写真は、男性兵士に絶大な人気があった。たまに笑っている写真があ

ると、それこそプレミアが付くほどだった。一番の常連客はエルマン中尉で、かなりの金額を費やして生写真を買ひ揃えていた。

エミリーはうまく商売をやっていて、五枚セットや十枚セットで売りさばき、袋の中身が分からないので複数セットを購入しないと全種類が揃わないという、阿漕な商売をしていたのだ。

エルマン中尉はコクピットにもプルフォウ大尉の写真を貼っているとの噂だった。ついさつき撮影した、大尉の着替え中の写真を買わないかと密かに持ちかけたら、全財産をつぎ込んで購入するのではないだろうか。その売上げ額を期待して、エミリー軍曹は身体を震わせた――。

「……おい、エミリー軍曹――」

「あつ?」

「どうしたんだ?」

「す、すみません、ちょっと昔のことを思い出してしまいました」

「まあ芸能人というのも大変だろうな。演技なんてわたしには到底無理な話だよ」

「そんな弱気にならないでください。わたしにまかせて頂ければ大丈夫です」

「わかったよ。……しかし、これでは何をやっているのかわからなくなるな?」

「本当に」

プルフォウとエミリーは顔を見合わせると、こらえきれずに吹き出してしまった。

第9話 「生徒を演じる兵士」

8

「……にこやかに笑っていれば、なにかトラブルが発生しても大抵は切り抜けられます。それが可愛いらしい女性なら、なおさらのことです。好感を持たれますから。大事なのは、演出の力で自分からそういった雰囲気を作り出すことなんです」

「なるほど。切羽詰まった状況でも笑っているなんて、よほど演技に自信がないとダメだろうな。スパイというのも大変だ」

エミリー軍曹の演技指導は丸々七日間続き、正直なところプルフォウも飽き始めていた。

エミリーは自らの経歴からのこだわりからか、生徒を演じるための演技論には力を入れていた。スタニスラフスキー・システムやらメソッド演技やら、初めて聞くような理論を即席とはいえ叩き込まれたが、うっかり同じ間違いを繰り返したときはエミリー軍曹に容赦なく怒鳴られた。

ベテランの兵士であるプルフォウが恐怖を感じたほど、その指導は鬼気迫るものだった。

た。

「そうなんです。人間が相手ですからね、ごまかしは効きません。でも、これまでのことを応用すればいいんです」

「そうか……いや良く理解できたよ。ありがとう軍曹、感謝する」

プルフォウはふうつと息をつき、コンピュータ・パッドのテキストを閉じた。これで、ようやく退屈で長つたらしい講義から解放されるのだ。

「こちらこそ、いろいろと失礼しました。でも大尉、わたしがこれまで教えた生徒の中で抜群にセンスがありますよ？ 綺麗で魅力的だし、俳優としても十分にデビューできますね」

「冗談だろう？ さんざん怒ってたじゃないか、全然ダメだって」

「素養があるから本気で指導できるんですよ？ 素人が演技すると、たいていギクシヤクとしてわざとらしくなってしまうんですが、センスのある人は最初から自然さを出せるんです。セリフはちよつと固くてもね。自分を客観的に見る事が出来る人は、立ち位置が分かるということですよ」

「そんなものかな……」

「戦場で敵の感覚を捉えることができる大尉は、周囲の『空気』を読むのが上手いんじゃないですか？」

「ああ、言われてみればそうかもしれないな。こんなことに役に立つとは思わなかったが……。空気を読むと言えば、地球連邦軍のデータによると、接客業で頭角を現わした子供を調査したところ、ニュータイプの素養があつた事例があるそうだ」

「確かに、接客業は演技をするようなものですからね」

「まあ、わたしは嫌だけだな。嫌な客は殴つてしまいうだから。それはともかく、能力が高いニュータイプは人の心の中を覗くことも出来るらしい」

「そんなことが可能だなんて驚きですね。大尉にもそういう御経験が?」

「いや、わたしはそこまでの経験はないな。心が理解できたと言えるなら、それは姉妹くらいだ」

「でも、ちよつと嫌ですね。相手の心を知つたら、まともに戦えなくなっちゃうんじゃないですか?」

「確かに。そういう場合は感情をシャットダウンするしかないだろう。でない、心が壊れて人でなくなってしまう」

二人は演技論とニュータイプ論を重ね合わせていた。人類全体が地球圏を舞台として壮大な劇を演じているが、確かに人類全体がニュータイプに進化したら、地球圏から争いはなくなるのかもしれないのだ。

「その話、またの機会にお話を聞かせてください。ニュータイプという概念には、とて

も興味があるんです。でも、今は任務に集中することが大事ですから」

「そうだな。わたしも部屋に戻って任務の準備をしないと」

愛機《ベルグソン》の発進準備も整えなければならず、時間を少しも無駄には出来ないので、プルフォウは服を着替えるために立ち上がった。

「あ、待つてください大尉！ 最後に仕上げのテストがありますから！」

「えっ？ テストって？」

不吉な言葉に、プルフォウは顔を強ばらせた。

「エミリー演劇学校の卒業テストです」

「いったい何をさせようっていうんだ」

「その女学生の恰好で、基地内を一通り回ってきてください。違和感なく、女学生になりきって回って回ることができたら合格です。不安なく学園に潜入できることをわたしを保証します」

ようやく解放されたと安堵していたプルフォウは、覚えた知識と能力をすぐに発揮して見せろというスパルタ式の教育に、アクシズ時代を思い出さざるを得なかった。

「そ、そんなテストに興味があるのか!?! だって全然状況が違うじゃないか。知った顔ばかりで、最初からばれてるよ！」

プルフォウの必死の抗議に、エミリーはふーっと溜息をついた。

「困ります大尉。本当にわたしの講義を聞いていたんですか？ 演出が大事だって教えましたよね？ 分かりきってはいても、本当は大尉はミーミスブルン学園の生徒だったんじゃないかと、演技と演出で信じ込ませるんですよ。それに敵を騙すには、まず味方からつていうじやないですか。味方くらい騙せないと、任務達成は到底無理です」

「確かに一理あるが……」

「もちろんズルをしちや駄目ですよ？ 監視カメラとレコーダーで、わたしが大尉の全てをチェックしてますから」

「わかった、わかった。この恰好で歩き回ればいいんだろ！ あとで他の連中に謝るのは軍曹の役目だぞっ！」

「大丈夫です、ご安心を。……あ、忘れてました。大尉の生徒としての偽名はマリール・リプルです」

「マリール？ いかにも女の子という感じだな」

「マリール・リプルの父親フレデリクは商社を経営、仕事の都合でサイド3から地球に降りてきました。母親とは先の戦争で死別しています」

「シリアスなカバーストーリーだ」

「地球連邦政府の中央データベースからデータを拝借して改ざんしたんです。ばれることは、まずありません」

「軍曹の仕事は信頼している。で、マリーベルはどんな性格なんだ？」

「名前の通り、清楚な女の子ですよ。大尉とは性格が正反対かも知れません。そうプロファイルに設定しました……大尉の演技が楽しみです」

「清楚な……軍曹、わざとやつてないだろうな？」

「まさか！ 潜入には目立たない性格が一番。派手なスパイというのは、映画の中だけの話なんですよ？」

「な、なるほど……目立たないようにか」

「はい」

「そういえば、軍曹の出演していた映画にもスパイ映画があったな。たしか旧世紀のスパイ、ニンジャが出てきた内容だったか……」

「あれですか。まあ出来はあんまり良くなかったですけどね。でも映画みたいに今回の作戦が成功することを祈ってます」

「それには、まずテストをクリアしないと？」

「プルフォウは鏡を見て自身の姿をチェックすると、部屋を出て居住区の方へと向かった。」

エルマン中尉はプルフォウ大尉の格好が信じられなかった。なにしろ普段からノ

マルスーツか軍服しか着たことがない大尉が女学生のような制服を着ているのだ。リボンがついたブレザーとスカートを身に付けた彼女の姿は、率直に言って可愛らしかった。伸ばした後ろ髪を白いリボンで結んでいて、眼もまつ毛が長くてぱっちりとしている。

「大尉、その恰好はいいたい……？」

エルマン中尉の慌てふためいた言葉に、プルフォウは意外そうに首をかしげる。

「学園の生徒が制服を着るのはあたりまえでしょう？ そんなにおかしい？」

そういうと、プルフォウはスカートの端を手で掴んでくるつと一回転した。

目の前の可憐な美少女に、エルマンはまるで降臨した天使を見るかのように惚けてしまった。そして、プルフォウ大尉の性格までが変わっていることにびっくりした。普段なら、そんなくだらないことを聞くな！ と怒られるに違いないのだ。

声色も優しげで声のトーンも高い。年頃の女の子のような――確かにプルフォウ大尉は年頃の女の子ではあるのだが――服装と、いかにも女の子らしい仕草がエルマン中尉に与えた衝撃は大きかった。まるで至近距離から連邦軍のハイパーバズーカを喰らったようなインパクトだ。

「……あ、いえ、可笑しいどころか、とても似合っております大尉！ むしろ普段から着て頂きたいくらいです……とても可愛らしいと思います」

エルマン中尉は顔を真っ赤にしながら、改めてプルフォウの制服姿を上から下までじろじろと眺めた。

上は赤に黄色のラインが入ったパフスリーブのジャケットに、胸元に白いふんわりとしたリボンを付けていて、下は短めのプリーツスカートに革のベルト、黒のレギンス、ローファーを身に付けている。

普段の精悍な感じの大尉も良いが、こんなストレートな可愛さもたまらない。なんでも自分はカメラを持っていないんだ！ この可憐な美少女を自分だけのものにした。エルマンの心はプルフォウのことでいっぱいになっていた。

「ありがとう中尉……」

満面の笑みを浮かべて感謝の言葉を述べつつも、プルフォウは内心はらわたが煮えくりかえっていた。

バカ！　これが演技だって早く気が付け！　少しは空気を読めっ。わたしが理由もなくこんな格好をするわけがないだろ！　何年わたしの部下をやっているんだお前は……呆れるね。さっさと向こうへ行くんだ！

「ですがプルフォウ大尉。学園の生徒というのは……？」

「プルフォウ……それは偽りの名前。わたしの本名はマリーベル、マリーベル・リプル。これからは普通の女の子として生きてゆこうと思うの。アルザスのミーミスブル

ン学園に転校するつもりよ。……あなたに黙っていてごめんなさい」

プルフォウは自分の口から発せられる、あまりに青臭い言葉に、制服を脱ぎ捨てて大声で叫び出したかった。

だがこの瞬間にも、エミリー軍曹は彼女のしぐさや振る舞い、言葉づかいを詳細にモニタ―してチェックしているのだ。軍曹の厳しい審査に合格しなければ、またあの退屈極まりなく、屈辱的な演技指導が繰り返される。それは絶対に避けなければならぬことだった。

「転校!? 異動になるかもしれないと仰ってましたが、その話と関係あるのでしょうか? まさか軍を退役なさるんですか!?!」

「中尉と別れるのは辛いけれど、これも運命なの。でも、別れというのは新たな出会いの始まりでもあるわ」

「そんな……大尉が行ってしまうなんて」

「中尉は、本当にわたしによくしてくれました。地球に降りてきてから不安だったから……感謝しています」

「嘘ですよね大尉……」

「あなたに素晴らしい出会いがありますように」

「あ、大尉! 待ってください!」

狼狽するエルマン中尉を振り切るように、プルフォウは涙すら流して走り去った。自分の演技に涙するとは――。

その後一時間が経過し、基地の大勢の人間に衝撃を与えた後、プルフォウはようやく訓練部屋に戻ってきた。ドアを乱暴に開け放つて部屋に入ると彼女はエミリー軍曹に詰め寄った。

「どうだ！ 合格か!? もう気が済んだら軍曹!」

「う〜ん……」

「何が不満なんだっ。みんなわたしを見て驚いていた。学園の生徒になりきっていたという確かな証拠じゃないか!」

「それはただ、とても大尉だとは思えないショッキングな格好と態度に、皆が驚いただけです。見知らぬ女生徒が紛れ込んできた、くらいの演技をして頂かないと……。泣き出してしまふとか、いかがですか?」

軍曹は少し笑いを堪えているような感じで言った。

「からかっているのか!?!」

「大尉、相手の思考を読めば、もつと自然に振る舞えるんじゃないですか?」

「まさか、そんなの無理だよ! さつきも言ったが、目の前の相手の思考を読むなんて、ニュータイプ能力は、そんな都合の良いものではないんだ」

「えつと……じゃあ、いまわたしが何を考えているか分からない？」

「それが分かれば、こんな楽しくもない訓練をする必要はないだろう」

「そうなんですか。安心しました、ばれちやうかと思つて……」

「何のことだ？」

「告白すると……さつき着替えているところを隠しカメラで録画していたんです」

「おいおい冗談はやめてくれ……」

「本当です。あとでじっくりと見させて頂きますね。これも演技指導のためなんですから」

「軍曹っ！ ふざけるのもいい加減にしろっ！」

プルフォウはドンツと机を折らんばかりに叩いた。彼女は着替えているとき、エミリーに裸にされた屈辱感を思い出していた。彼女は着替えているとき、エミ

もう限界だ！ 軍法会議にかけられてもいい。こんな任務は放棄してやる！

怒りに身を震わせるプルフォウは、今まさに少佐のオフィスに怒鳴り込まんと部屋から出ていこうとした。

それをみた軍曹は「ふふふ、合格ですよ大尉！」とにっこり笑いながら言った。

「えっ？」

「年頃の女の子は感情的ですからね。あまりすましているのもかえって疑われます。」

清楚な女の子とは言いかもしれませんが、もう少し感情的に行動してもいいと思いますよ？
まあ潜入任務なので、不自然に目立ってしまっても問題ですけど」

「騙すとは人が悪いな……。じゃあ隠し撮りというのは嘘なんだな？」

「ええ、まあ……」

「安心したよ。まあ演技なんて人を騙すテクニクみたいなのだが。でも、自然に感情的にか。難しいな。メソッド演技法を發揮しないと？」

「まだ知らない自身の内面を出してみてください。なかなか魅力的な女の子ですよ、マリーベルさん？」

「もうヤケだよ、なんでもするよ……」

そうは答えたが、あえて感情的になれとは酷い話だ……自分の姉じゃあるまいし、とプルフォウは思う。

第二次ネオジオン戦争で戦死してしまったが、プルフォウの姉ともいえる少女エルピー・プルは、かなり奔放な性格だったらしい。上官であるグレミー・トト閣下のいうことも聞かず、命令違反を繰り返したあげく、けつきよく敵のパイロットになつて裏切ってしまったのだ。安っぽい言い方をすれば、仕事よりも恋愛を優先したということころだろうか。

エルピー・プル、彼女はネオ・ジオンの恥だ。あんな勝手な性格だからプルツー姉さ

んは身内を殺すことになってしまったんだ……。

失敗作と判断された強化人間エルピー・プルに続くプルシリーズは、すでに活動を開始していたプルツー以外、ニュータイプ部隊計画が頓挫するのをリカバリするべく遺伝子レベルで再設計され、遺伝子組換えベクターを導入された。さらには記憶もオリジナルから修正されて、年齢以上に大人びた性格に再調整されたのである。

コンピューターの画面上で手軽にコピー&ペーストすることで加工された記憶。そうやって無理矢理に成長させられた。

それが今度は子供に戻れというのだ。

軍隊の命令とは理不尽なものだが、簡単に了承できるものではない。プルフォウは自分を納得させる言葉を見付けようと思ったが、それを引き受けてくれる言葉は何も思いつかなかった。

第10話 「兵器を語る二人」

9

「まったくひどい目にあった。なんて任務だ」

プルフォウは、這々の体で訓練部屋グリーンハウスから脱出した。エミリー軍曹の演技指導に、精神的にも肉体的にも限界まで追い詰められてしまったのだ。

ともかく、まずは自室へと向かわなければならぬ。長期任務になるだろうからその準備もあるし、何より今は一人になりたかった。エミリー軍曹に全てを見られ、監視された一週間の生活は、プライベートというものが一切なかったのである。

だが、ふらつきながら基地の廊下を歩いていると、同僚のオスカー・ウィルフオード大尉とばったり顔を合わせてしまった。

オスカーは三十八歳になる一年戦争以来のモビルスーツ・パイロットで、この基地ではプルフォウの次に腕の立つパイロットだ。がっしりとした体格で、短い髪に長めのアゴの顔は少々強面ではあるが、部下の面倒見は良い。外見に寄らず、人が良くて気が利くところがある。

それだけに今はタイミングが悪かった。

「プルフォウ大尉、ちょうどよかった。実はな……」

オスカー大尉はそう言いかけて、なにやら困惑した表情になった。

それも無理からぬことだろう。プルフォウは、数時間前は学校の制服を着て基地内を練り歩き、少女っぽい言葉使いで会話していたのだから。もちろん、皆なにか触れてはいけない禁忌を扱うような感じで、理由を訊いてはこなかったが。

その気遣いが、かえってプルフォウの恥ずかしさを助長していた。

「オ、オスカー大尉、なにか……?」

「いや、あの制服は着るのを止めたのかい? 可愛くて良かったと思うがね」

オスカーは笑いながら言った。

「えっ……」

「プルフォウ大尉も、ようやく女の子らしくなったと皆で話していたところなんだ。あ、マリーベルと呼んだ方がいいのかな?」

ネオ・ジオンのエースパイロットを評価するには全く似つかわしくなく、捉えようによつては侮辱ともとれる形容詞の羅列に、プルフォウは顔を真っ赤にしてうつむいた。

「な、なにを言い出すんだ」

「変わったレクチャーだったようだな。工作任務における偽装や変装の練習? と

いったところ？」

「あ、いやっ……そうなんだ。エミリー軍曹に強引にね」

「なるほどね。エミリーは女優さんだったらしいからな。あるいはプルフォウ大尉を着飾りたかつたんだろう。女性ってそういうものだろう？ モデルがいいなら尚更さ」

オスカー大尉は腕を組んで納得したように言った。

「やめてくれ。パイロットなのにあんな服を着せられてバカみたいなんだから」

「まあ着慣れないだろうがね。大尉は綺麗なんだから、自分の良い素質は大事にした方がいい」

プルフォウはしばらくうつむいたままだったが、その表情はだんだんと凄みのある顔に変わっていった。

「オスカー、模擬戦でわたしのハードなしごきを受けたくなかったらな、その話は二度としないほうがいいぞ？」

プルフォウはオスカーを睨み付けながら、出せる限りの低い声で言った。

「いや、そんなつもりでは……なぜ、そんな怖い顔なんだ？」

「怖い顔にもなるさ！ 嫌なんだよ、ああいうの！」

「そういうものなのか？」

オスカーはプルフォウの迫力にたじろいでいる。なぜ彼女が怒っているのか、さっば

り分らないといった表情だ。

「全て忘れた方が貴公の身のためだねっ！ それで？ なにかいいかけていたようだが？」

「あ、ああ……いま君が言った模擬戦闘だよ。レクチャーが終わってすぐで申し訳ないんだが。プルフォウ大尉と手合わせ願いたいと思つてな」

「貴公のドライセンとか？」

「受領したばかりなんでな。機体に慣れておきたい。だが性能を限界まで引き出せる相手となると、そうはいないからな。君と戦えば、限界特性もわかるつてもものさ」

オスカー大尉の申し出に、プルフォウは疲れた体がアドレナリンで急速に回復するのを感じた。モビルスーツで戦うということに、これ以上の興奮を憶える。やはり自分はモビルスーツパイロットなのだと自覚せざるを得なかった。

「わかった、いいだろう。二時間くらいなら、作戦の準備にも支障はない。この一週間座学だけだったから、リハビリとベルグソンの慣らし運転にはちょうどいいさ。だからといって、勝てるとは思うなよ？」

「君に勝てたらジオン中に名前が鳴り響くよ」

「そうはさせないよっ」

プルフォウは笑みを浮かべてパシッと両手を打ち鳴らした。

「でもドライセンか。わたしはこれまで搭乗する機会はなかったな」

「当然じゃないか？ ドライセンはサイコミユを搭載していない一般兵士用だ。君が搭乗してたのは、キュベレイとかいうニュータイプ専用モビルスーツだろう？」

「そうだ。アクシズではキュベレイの量産タイプに搭乗してたよ。ハマーン閣下や姉が乗ってたプロトタイプを改良したモデルだね。なかなか凝った作りをした。性能は良かったが、少しサイコミユの負荷が大きかったかな」

「サイコミユの負荷？」

「サイコ・マシーンは、脳波で機体制御をしたりファンネルをコントロールするんだが、送信されてくるデータは全てサイコミユが脳波に変換するんだ。フィルタリングされてもノイズがあるし、フィードバックループもあって……ようするに凄く頭が痛くなる」

「なるほど。だが、そんな状態で操縦するとは、よほどタフじゃないとな。……子供にやらせることじゃない」

「だから強化人間なんだろう？」

「確かにそうだが……」

オスカーは悲しげな表情でプルフォウを見た。

プルフォウはオスカーの態度に困惑しつつも、彼のヘーゼル色の瞳が少し可愛いと

思ってしまったって、慌ててその考えを頭から追い出した。

「なにか言いたいことが？」

「きみの前では言いにくいんだが、上層部のモラルや倫理観を疑ってしまう」

「意外と純粋なんだね。まあ、こんなことはわたしたちだけにして欲しいとは思うよ。自分は戦争の暗部が手を振って歩いてるみたいなものだからな」

「……すまなかった。謝る。安っぽい同情だなんて、大尉に失礼だった」

「いや、いいよ。気にしないさ」

プルフォウは自嘲気味に笑った。自分という人間を客観的にみると、哀れな戦闘人形にしか見えないからだ。

「たまには同情されるというのも嬉しいものだよ」

「そ、そうか……」

しばらく二人は無言になってしまう。

プルフォウは気まずさを感じて、話題を早く元に戻したいと思った。

「と、とにかく、そういった理由もあって、キュベレイはパイロットも限られるから、親衛隊で集中運用されたんだ」

「俺は戦場でキュベレイタイプを見たことはなかったな。下っ端には親衛隊なんて雲の上の存在だったよ」

「でも見なくて良かったんじゃないか？ わたしはグレミー閣下に仕えてたんだから。オスカーはハマーン閣下側だったんだろ？ 貴公を撃墜してたかもしれないよ」

「それもそうだ。ファンネルで全方位から攻撃されるなんて、ぞつとするよ」

「最近ファンネルとはご無沙汰だけだな」

ファンネルとは、バーニア・スラストとビーム砲を備える、サイコミュで操作する遠隔攻撃端末のことだ。全方向攻撃が可能だが、小型で搭載燃料が少なく、重力下では長時間飛行させることができないので《ベルグソン》には装備されていない。

「で、オスカーは？ アクシズでは何に乗っていた？」

「最初の乗機はガザCだった。次はガザDで、最後はガ・ゾウムだ」

「ガザ系ばかりか。操縦訓練でガザDには乗ったことがある。ガザCはないな」

「乗らなくて良かったぞ。ガザCは造りが酷くてな、全力加速をしたとたんGで機体がミシミシ軋むんだ。モビルアーマーにも変形できたが、スピードだけは速くなるが、操縦性が落ちるから逆に怖かった。最悪なのは頭にコクピットがあったことだな。とにかく狭くてね。まあ操縦はしやすかったし、あの、なんだかいったビーム・キャノンだけは威力があつたよ。命中精度は悪かったが……」

「聞いてると最悪じゃないか。ガザCは地球侵攻作戦用に、作業用のモビルワーカーを急遽戦闘用モビルスーツとして改修した機体だからな。コクピットや燃料タンクの

装甲も薄かった。機動性が良いのも、ただ軽かったからか……。二、三度戦闘すると空中分解する危険があったとか」

「そうなんだ。被弾するとすぐ燃えるしな。だから寄り合って集団戦法で戦っていた。単独では死にいくようなものだからな」

「でも地球連邦軍との交渉用に数を揃えるために、とにかく安く大量生産する必要があったことは考慮しないといけないだろう。アクシズ総出で、どの工場でも、服とか椅子を作ってた工場でも部品を作っていたらしいね」

「当時は、いざ戦争になるということで、アクシズの市民みんなが高揚してた。欲しがりません地球連邦軍に勝つまではってね。ザビ家の後継者ミネバ・ザビ殿下をスペースノイドの救世主だと信じてな。でも大量生産されたガザCをみたときは、確かに興奮したよ。旧式モビルスーツばかりのなかでガザCは未来的だった。色だって《赤い彗星》シャア・アズナブル大佐のパーソナルカラーで塗られたんだ。まあ色で誤魔化して、少しでも強そうにみせたのかもしれない。シャア大佐の専用機なみのモビルスーツを大量保有するというわけだ。とはいえハリポテをたくさん作って、相手を驚かしたって感じではあるな」

「それでも連邦軍のエウーゴやティターンズが、競ってアクシズとの同盟を望んだんだから効果はあったろうね。すごい軍事力を有してるってさ。ハマーン閣下の手腕は

たいしたものだよ」

ハマーン・カーンはアクシズの摂政で、幼かったミネバ・ザビの代行者として、アクシズの政治・軍事を全て取り仕切っていた女傑だ。

「本当に、二十歳そこそこの女性とは思えぬ方だった。俺たち兵士にとつても憧れだったなあ」

「そうだろうな。グレミー閣下とハマーン閣下が協力していればね……。残念だ」

「まったくな」

再びしばしの沈黙。ネオ・ジオンの敗北と凋落は、内部抗争が原因だというのが何ともやり切れない話だった。二人が手を組んでいれば、いまごろは地球連邦政府を転覆させていたかもしれないのだ。

「……しかしガザCは、グリプス戦争でかなり撃墜されてしまったようだな？ わたしはほとんど見なかったよ」

「プルフォウ大尉は理由を知らないのか？」

「ああ。損耗率が高いというのは想像できるが」

「他でもないシヤア大佐にやられたのさ」

「えっ、それはどういうことだ？」

「シヤア大佐は、グリプス戦争時は潜入任務で、地球連邦のエウーゴに所属していたの

は知ってるだろ?」

「ああ、エウーゴの幹部だったらしいね」

「それで正体がばれて、エウーゴに忠誠を見せろと言われたのかしらんが、金色モビルスーツのメガ・ランチャーで数十機のガザCを一気にな」

「メガ・ランチャーで……そこまでする必要があったのか? 味方なんだぞ……」

プルフォウは絶句してしまった。欺瞞のためとはいえ、味方の兵すら平気で倒すことができるとは。その非情さに総毛立ってしまう。

「ハマーン閣下と人間関係のトラブルがあつたらしいから、当てつけだったのかもな。あるいは自分の色が使われて気に食わなくて一掃したのか。どちらにしる巻き添えを喰ったのは下っ端だ」

「酷い話だ」

それにしても、一機種のモビルスーツからでも、アクシズ、ネオ・ジオンの内情がよく分かるものだ。その意味では、ガザCはアクシズを象徴する機体なのだ。

「でもプルフォウ大尉がガザCを知らないとはね。グリプス戦争時は何をしてたんだ?」

「ん? 裸で寝てたよ」

「……あ、いや……そういうプライベートな話は……」

プルフォウは、オスカー大尉の狼狽する顔が面白いと思った。

「あ、すまない。変な意味じゃないよ。姉妹と一緒に、一時的にコールドスリープさせられてたんだ。肉体的な調整とか睡眠学習なんかでね」

「な、なるほど。強化人間もいろいろ大変なのだな」

「身体を弄られたり、調べられたりね。貴公も強化手術を受ければ体験できるよ」

「いや、俺は遠慮しておくよ。オールドタイプの俺の場合、強化してもたいして変わりはなさそうだ。資金の無駄遣いだな」

「どちらにしろ、もう施設もないから無理だけどね。……じゃあ、そろそろ準備するか？」

「了解だ。……二人きりだから、エルマンの坊やに嫉妬されるね」

「?」

二人はそれぞれロッカールームに入っていたが、プルフォウはオスカーの別れ際の言葉を聞き取ることが出来なかった。

第11話「モックバトル」

10

プルフォウとオスカーがノーマルスーツに着替えてモビルスーツ・ハンガーへと向かうと、二人の愛機AMX-021X《ベルグソン》とAMX-009《ドライセン》はすでに整備が終了していて、核融合炉を起動すれば、すぐにでも発進できる状態になっていた。

二人がこれから行う模^{モック}擬^{バトル}戦闘は、パイロットとしての技量を維持するには最適な方法だった。リアシートには練習用にシミュレーター・プログラムが搭載されているので、複数を連動させて対戦することもできるのだが、シミュレーションと実際に操縦する模擬戦闘とはやはり異なるのだ。シミュレーターでは、機体の重量と加速を感じる事が出来ないのである。

もちろん、模擬戦を行えば地球連邦軍に発見される恐れがあるので、地形的に探知されにくい場所で実施しなければならない。プルフォウたちは、又アクシヨット基地から百キロほど離れた場所に、ポイント・タウと呼ばれている演習ポイントを設定していた。

そこは磁性を帯びた砂や岩石が天然のレーダージャミング装置となっていて、演習場所としては最適だった。地球連邦軍の偵察衛星が上空を通過する時間を避ければ、まず発見されることはない。

プルフォウとオスカーは今回もそこを使うことにして、アフリカ方面軍司令部から使用許可を得た。そして、ポイント・タウまでは直線移動はせず、何度もルート変更をして目的地に向かう飛行計画を立てた。時間は倍かかるが、万が一にも連保軍に発見されるのを避けるためだった。

「ミノフスキー粒子は通常レベルか……。今日は定期便が飛行しているくらいだな」
「旅行気分なんでしょう。懲りない奴らですよ」

「それが仕事だからな？」

プルフォウが定期便と表現したのは、地球連邦軍の長距離偵察機のことだ。ミノフスキー粒子が薄い場所では、長距離レーダーは大いに有効なのである。

プルフォウはコンピューターパッドをメカニックに渡すと、ハッチを開けて《ベルグソン》に乗り込んだ。リニアシートに座り、背中のバックパックをシートの窪みに固定すると、コンソールのスイッチを操作してシステムを起動した。

ほどなくして、ミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉の律動が、格納庫に響き始めた。

「エアをくれ！ ジェットエンジンをスタートさせる。」

コンプレッサーから送られた高圧空気によって、両肩に備え付けられた熱核ジェットエンジンがアイドリングを始めた。キーンという、タービンブレード特有の甲高い音がコクピットにも聞こえてくる。

「各部作動チェック。電動アクチュエーター正常。腕部、脚部作動オーケー、アクティ
ブ・バインダー作動オーケー……」

プルフォウはチェックリストを読み上げながら、機体に問題がないことを確認していった。動作不良を起こしていた左腕も、修理の甲斐あって問題なく作動している。

「……メインカメラ、各部センサー、通信システム異常なし。」

チェックリストの項目が全て丸で埋まると、プルフォウは機付長に親指を立てた。

「よし、機体に問題はない。プルフォウ、ベルグソン出るぞ！ 模擬戦闘だからパレットガンを持っていく」

「了解。しばらくぶりの発進ですな大尉。声が弾んでますよ」

機付長が、明らかに嬉しそうに見えるプルフォウに声をかけた。みな彼女が、一週間グリーンハウスにこもっていたことを知っているのだ。

「ふん、子供みたいにはしゃいでいるわけじゃないよ。でもモビルスーツに乗れるのは最高さ」

プルフォウはそう応えると、《ベルグソン》の両脚をリニア・カタパルトにのせた。

モビルスーツの両足がリニア・カタパルトの発進用スロットにはめ込まれて、スロットが閉じてしつかりと固定された。地下格納庫から飛び立つ際は、燃料を節約するためにカタパルトを使用するのだ。

「よし、ハッチを開けてくれ。発進する」

プルフォウがフットペダルを踏みこんでゆくと、両肩の熱核ジェットエンジンと、腰と脚部に装備された複合サイクルエンジンとが唸りをあげて、《ベルグソン》はいまにも飛んで行きそうになった。

基地の擬装扉が開き、管制官から発進OKのサインが出ると、電磁式のリニア・カタパルトによって《ベルグソン》は音もなく瞬時に上空に打ち上げられた。

「ぐっ……い！」

瞬間的にかかる強烈なGに耐えると、プルフォウはすぐに姿勢制御スラスターとアクティブ・バインダーを作動させて、機体を精密にコントロールした。

今回はベースジャバーは使用しない。《ベルグソン》は、ベースジャバーと合体することでモビルアーマーに変形できるが、模擬戦にモビルアーマー形態は不要だからだ。

プルフォウは熱核ジェットエンジンの出力を上げて上空で待機し、オスカー大尉の《ドライセン》を待った。ほどなくして《ドライセン》がバーニアを全開で追いついてきた。

「よし、私はこのまま飛行して、ウェイポイント2に到達したらホバー走行に移行する」

「了解だ。どのみち、このドライセンには飛行機能はないんだ」

「そのドライセンは、少し重そうだな？」

「重装甲だからな。そのかわりホバー走行は得意だよ。それにしても、ベルグソンのかなり装甲は厚いだろうに、よく飛べるものだな？」

「両肩にジェットエンジンを積んでるからね。加えて両肩のバインダーで、飛行機の翼みたいに揚力を発生させてるのさ」

「なるほど……。これは模擬戦闘では苦労しそうだ」

「ハンデをつけるよ。こっちが飛んでちや勝負にならないだろ？ ドライセンの性能評価が目的だからね」

「ちよつと悔しいが、そうしてもらうか」

二人は探知されないように、たつぷり時間をかけてポイント・タウにたどり着いた。苦労したが、それだけの価値はある。ここなら連邦軍に探知されることもなく、思い切りモビルスーツを動かすことができるからだ。

「よし、これより模擬戦闘を開始する。移動範囲はレンジいっぱい、高度制限は千フィート。使用武器はペレットガン。固定武装はビームサーベルの使用を許可。必ず

シミュレーションモードにしておくこと。いいな?」

「了解だ。まずは有利な場所を確保したいな。鬼ごっこみたいなものさ」

「子供の遊びじゃないぞ?」

上空に砂が舞い、青空と雲が濁る。この磁性を帯びた砂こそが、模擬戦に必要な状況を作り出すのだ。レーダーやセンサーも使えないが、それはミノフスキー粒子の散布状況を模していると考えればよかった。

プルフォウ大尉の《ベルグソン》とオスカー大尉の《ドライセン》は、それぞれ手ごろな遮蔽物を見つけて身を隠した。

飛行用バインダーを備えた高性能機《ベルグソン》と、大柄だがオーソドックスな作りのモバイルスーツである《ドライセン》。両者には機動性に差があるが、高度を規制したので条件は対等だった。もちろんドライセンも高出力のジェネレーターと複合ロケットエンジンを搭載しているので、旧世代のモバイルスーツとは比較にならない。

「オスカーのやつ、上手く隠れたな」

さて、オスカーがどう出るか? ロングレンジにおいて、この《ベルグソン》にはかなわないだろう。しかも、自分の狙撃能力はジオンでもトップクラスだと自負しているし、強化人間としての予測能力もある。そのスキルを使うのは卑怯だとも思えるが、簡単にスイッチでオン、オフ出来るものではないから仕方がない。

おそらくオスカーは接近戦に持ち込むはずだ。強化人間の予測能力も、近接戦闘のミニマムな時間においては決して有効とはなりえないからだ。それはモビルスーツの四肢の可動速度に限界があるからだ、必ずドッグファイトになるだろう。プルフォウはそう確信して、あらかじめセンサーを近接戦闘用に切り替えておいた。

「戦闘開始！」

オスカー大尉が模擬戦の開始を宣言した。

だが戦闘が開始されたものの、しばらくは変化のない状況が続いた。お互いに位置を把握していない場合は、慌てて動いたほうが負けなのだ。

といって、ずっとかくれんぼをしているわけにはいかない。

プルフォウは遮蔽物としていた岩から《ベルグソン》を出して歩かせた。

「んー、右かー！」

オスカー大尉の《ドライセン》が、ペレットガンを発砲しつつ遮蔽物から飛び出してきた。プルフォウはすぐさま反応すると、《ベルグソン》をジャンプさせつつ後退した。弾頭に黄色い蛍光塗料が封じ込められたペレット弾が、機体のすぐそばをかすめていく。

プルフォウは《ベルグソン》に何度か方向を変えさせながら、弾をギリギリで避けつつ距離をとった。ウイングバインダーを装備しているので、《ベルグソン》は空力性能が

よく、ジャンプの軌道を正確にコントロールできるのだ。

だがオスカー中尉は《ドライセン》をバーニア全開で一気に増速させると、《ベルグソン》にとって巨大な肩のバインダーのせいで対応しにくい斜め方向から接近した。時計でいえば二時方向である。

牽制でペレット弾を撃ちながら、左手にシミュレーション上の仮想ビームサーベルを構えて肉薄した。

「やるなー」

そのオスカー大尉の戦術をみて、プルフォウは頭の中で二機の相対スピードおよび角度を正確に計算した。《ベルグソン》はまだジャンプ中で機動に制限がある。つまりオスカー大尉は《ドライセン》の高速性能を發揮して、こちらが迂闊に動けない状況を作り出したわけだ。慌てて後方に逃げれば、それこそ思うつぼだ。

《ドライセン》の腕が上がり、ペレットガンから再びペイント弾が発射された。もしペイント弾がヒットすれば、その部位は仮想的に機能が制限されて作動不能となってしまう。手脚を『破壊』して動きを止め、ビームサーベルで止めをさすのがオスカーの戦術だろう。

プルフォウはバインダーでペレット弾を防御しながら、急速接近する《ドライセン》を見据えた。

「もらったー！」

オスカー大尉の気合いとともに《ドライセン》の腕が素早く振り下ろされた。

現実では《ドライセン》は棒切れを持つているだけだが、モニター上では激しく発光した仮想のビームサーベルが光の軌跡を描き出していた。その軌跡が《ベルグソン》に重なり、胴体が仮想的に切断されたーはずだったが、CGによる派手な演出効果は発生しなかった。

舞い上がった土煙がモニター全体を覆っていた。

「どこにいった!？」

オスカー大尉は《ドライセン》の目であるモノアイを忙しく上下左右に振って、いきなり視界から消え失せた《ベルグソン》を探した。

そして次の瞬間、けたたましい音とともに、モニターいっぱい『撃墜』の表示が点滅した。

「なにっ!？」

「オスカー大尉。貴公は撃墜された」

プルフオウが、オスカーの背後から静かに宣言した。

「くそっ、負けか」

「そのとおり」

「いったいどうやったんだ？ いきなり背後に移動するなんて。まるで見えなかったぞ」

「ちよつとしたアクロバットさ」

「アクロバット？ 見世物にやられたってわけか」

「悪いね。トリックみたいな真似をして」

プルフォウは、《ベルグソン》をアイドリング状態から一気にバーニア全開にすると、目にも留まらぬ速さで跳躍させたのだ。

急激に飛び上がると機体の制御は難しくなる。だがプルフォウは、四肢の動きと姿勢制御バーニアを併用することで、まるで体操選手のような捻りこみ回転ジャンプをやってみせたのである。

素早いジャンプなのでセンサーも追いきれず、加えて巻き上げた砂の欺瞞効果もあった。そうして死角に入るや否や、《ドライセン》の真上でビームサーベルを振って真つ二つにしてしまったのだ。シミュレーション上では、《ドライセン》は真ん中から左右に分かれてしまっていた。

「これじゃあ俺も真つ二つになってるな。流石だよプルフォウ大尉」

「でもギリギリだったよ。ドライセンの機動性は確かに一流だ」

二人は機体を停止させると、戦闘のデブリーフィングを始めた。

「……ただ重いから、加速と旋回能力が悪いのが弱点か」

「確かに。そこは気をつける必要がある。でも実戦ではビームキャノンも使えるし、ジャイアント・バズーカも装備するつもりだ。機体コンセプトとスペックから判断すると、攻撃力で一気に制圧する機体特性だろうからな」

「うん、わたしも同意見だ。ドライセンは重装甲と攻撃力に優れた、典型的な突撃型モビルスーツだろう」

つまり味方より先に敵部隊に突入し、機先を制して敵機を撃破するタイプだということ。

「機体マニュアルによると、白兵専用にはビーム・ランサーやビーム・トマホークも用意されていたらしい。でも備品になくてな」

「ビーム兵器は消耗品だからな。もう生産されてないし入手は難しそうだね」

「仕方がないからドムのヒート・サーベルを背中に装備する」

「ああ、あのすぐに切れなくなる棒ね……」

「溶けた金属が付くと切れ味が悪くなるからな。でも切れなくなったら先端で突けばいいや」

ヒート・サーベルは長い棒状の形をしていて、全体が加熱することで敵機の装甲を溶断する高熱切断兵器だ。コストも安くエネルギー使用量も少なくてすむが、一度敵モビ

ルスーツに使用するとオイルと溶けた装甲が付着して、急激に切れ味が鈍ってしまう。そうなったら最後は突き刺すしかない。基本的には使い捨ての武器である。

「それに接近戦用の特殊装備もあるんだ。トライブレードって奴がな」

「トライブレード？ 三ツ刃？」

「ああ、背中のラツチに三つ。バズーカを装備する場合は二つだが、回転しながら飛んでゆくカッターなんだ」

「フライング・カッターか。随分とアナクロな古臭い武器だな？ 放ったら元に戻っ

てくるのか？」

「いや、それつきりだ」

「ふーん。不意打ちには良さそうだが……。外れたら戦闘後に拾えばいいのか」

「子供が遊ぶみたいに？ 開発者は子供の頃に遊んだオモチャから思いついたんだろうな。ニンジャが使うシュリケンとかな」

「ニンジャね……。旧世紀に存在していた東洋のスパイ、暗殺者だったな。エミリー軍曹が出演してた映画で見たことがあるよ」

「スパイ映画？ 軍曹がニンジャ役なのか？」

「まさか！ 軍曹は主人公の親友の娘役さ。父親を殺されてしまう悲劇の娘役なんだ。ストーリーはあまり面白くないけどね。でもエミリーがシャワーシーンで裸に

なつてたのは驚いた」

「ほうっ！ かえつたら観てみるか。タイトルは何なんだ？」

「おいおいオスカー……帰る前にもう三戦はするぞ？」

「わかってる、わかってる。だからタイトルを教えてください」

「……シャワーシーンを見るつもりなんだな？」

「あ、いや……」

「凶星だな。ニュータイプ能力を使わなくなつて分かるよ」

プルフォウはモニター越しにオスカー大尉を睨みつけた。

たしかにエミリー軍曹は美人でスタイルもよく大人の魅力に溢れている。女性として嫉妬せざるを得ないほどに。

「……仕方がないな。『コロニー・スパイ 殺人ガンタンクを追え！』だよ」

「感謝するよ」

プルフォウは、通信モニター越しにオスカー大尉がメモするのを見た。

「呆れるよ、ほんと」

「実際、彼女は美人だよ」

「ふん、どうせ子供のわたしには関係ないことだよ」

「悪かった。あまり、怒らんでくれよ。機嫌を直してくれ」

「とにかく模擬戦を再開する。集中しろよ？ オスカー」

「当たり前だよ。オレが言いだしただんだからな」

「よし！ 始めるぞ！」

だが、けつきよく残る二戦もプルフォウが圧勝してしまった。オスカー大尉もやる気を失ったのか、もう訓練を切り上げようと提案したので、少し早いが基地に帰還するこ
とにした。

オスカーは最後はあきらかに集中力を欠いた様子で、プルフォウは余計なことを言っ
てしまったと反省した。

「いや、完敗だよ。プルフォウ大尉。さすがだ」

「どうだか。最後はエミリー軍曹の裸でも想像していたんじゃないか？」

「ははは……」

「まあ、いいさ。《ドライセン》の戦闘データは集まったからな。あとは基地で分析す
れば……」

そのとき、プルフォウは身体の震えに気付いた。戦闘後はいつもこうなのだ。

「どうしたプルフォウ大尉？ 気分が悪いのか？」

「いや、なんでもない。……帰還しよう」

いまのところ影響はないが、パイロットとして身体的なコンディションはベストに

保っておかなければならない。

第12話「家族」

11

プルフォウはヌアクシヨット基地に接近すると、長距離レーダーによる探知を避けるために《ベルグソン》を低空飛行させて基地への帰還コースにのせた。

「グリーン・コントロールタワー。ガーネット1着艦許可を求む」

『コントロールタワー了解。クリアー・トウ・ランディング。二番滑走路を控え』
「ガーネット1了解」

プルフォウは、操縦桿に取り付けられたスイッチを操作して《ベルグソン》のバインダーを展開し、揚力を最大に発生させてゆつくりと着陸体勢に入った。そしてほとんど速度がゼロの状態まで減速させた後、一気に機体を着陸させた。

脚部が滑走路を掴み、高強度コンクリートを叩く音がすると、サスペンションが作動して衝撃を吸収した。

プルフォウは機体が完全に停止したことを確認すると、《ベルグソン》をハンガーまで歩行モードで移動させた。

『プルフォウ大尉のベルグソンが帰還！ 整備班はハンガーに固定後、冷却ダクトを接続しろ』

プルフォウはヘルメットを外すと、戦技データをメモリーにダウンロードしてから、コクピットハッチを開けて外に出た。だがタラップを降りたとき、かなりの疲労感を感じていることに気が付いた。そう、理由はあのエミリー軍曹の集中講義だ。講義を受けた後、すぐに模擬戦闘を行ったのがいけなかったのだろう。

プルフォウは自室で休みたいと思ったが、その前に医務室に向かわなくてはならなかった。疲れて歩いて行くのは面倒だ。どこかにエレカが――。

そう考えたとき、プルフォウは目の前にエルマン中尉が立っていることに気が付いた。彼はいつものようにエレカを運転している。

「お疲れさまですプルフォウ大尉！」

「エルマン中尉か。どうした？ また少佐から呼び出しか？」

「いえ。あと二十分で補給の輸送機が到着する予定なんです。だから大尉にお知らせしようと思って」

「ああ、そうだったね。知らせてくれて感謝する。注文してた部品もあるんだ」

「自分もザクⅢのオプション装備を発注してるんです。でも、なかなか入手できないみたいで」

「まあ気長に待つしかないだろう。ザクⅢは、あまり生産されなかったみたいだから」

「改良型のバックパックやリアスカートが欲しいんです。もつと機動性が欲しい」

「そうだな。そうすればベルグソンとの連携もとりやすくなる。わたしたちも搬入作業を手伝わないとな？ そのまえにシャワーを浴びて着替えたいんだ」

「エレカで兵舎までお送りします」

「いつも悪いな。ちよつと待つてくれるか？」

プルフォウはヘルメットを脱いで髪留めを外すと、まとめていた髪を下して身体に冷却スプレーを吹いた。

ひんやりとした冷たさが気持ちがいい。

プルフォウは、胸と肩につけていた強化プラスチック製のプロテクターを外してエレカ後部の荷台に置いた。そうしてからノーマルスーツの前を開くと、アンダーウェアの上から冷却スプレーを吹きかけた。

汗とスプレーの飛沫がパツと飛び散って、かすかな虹を作り出した。ちよつとスプレーがもつたないのだが、疲れた身体に心地よいからやめられないのだ。

少しばかり夢中になっていたプルフォウは、エルマンがじつと見ていることに気がついた。

「あ、すまない。早くしてくれというんだろ？」

プルフォウは顔を赤らめながら言った。

「……」

「中尉？」

「と、とんでもありません！ 自分は全く構いませんから」

「じゃあ遠慮なく」

冷却スプレーをかけたあと、タオルでしっかりと汗をふくと、シャワーを浴びるまでは我慢できそうだとプルフォウは思った。

「待たせたな中尉、兵舎までやってくれるか？」

「分かりました。模擬戦の成果はありましたか？」

「うくん、まあまあだね。ドライセンは性能が良い機体だということは分かったが、わたしが圧勝してしまった」

「当然でしょうね」

エルマン中尉がじつと自分の身体を見ていることに気が付いて、プルフォウは不機嫌になった。オスカー大尉が、スタイルの良いエミリーの裸を見たがっていたことを思い出したのだ。

「何を見てるんだ？ どうせ子供みたいだと思っっているんだろ？ 失礼じゃないか

「？」

「そ、そんなことは！ い、いきます」

だが、そのとたんエレカは燃料タンクに激突してしまって、プルフォウは衝撃でエルマンの太ももの間に倒れこんだ。

「おい、ちゃんと運転してくれ！ 首を違えるところだ！」

プルフォウが抗議しようとエルマンの膝をつかんで起き上がったとき、彼と目が合った。

触れられるほどにお互いの顔が近くにあったのだ。実際、プルフォウの髪は彼の頬に触れていた。

「……なんだ？」

「プル……」

エルマンが何かを言いかけたようだったが、プルフォウはそれを無視して椅子の背もたれに手をかけて起き上がると、ノーマルスーツのファスナーを引き上げてシートに座りなおした。

「もう、気をつけてくれよ」

「……失礼しました」

「急ごう。輸送機が着いてしまう」

エルマン中尉の手足は震えて、なんとかエレカをコントロールしている状態だった。だから、いつもより時間がかかってしまったのだが、その間二人は無言だったので、さらに倍の時間がかかったように感じてしまった。

エルマン中尉と別れて部屋でシャワーを浴びたあと、プルフォウは医務室へ向かった。医務室は居住施設のなかでもモビルスーツデッキに近い部屋にある。怪我人や重傷者をすぐに運び込むためだ。

「失礼します。先生います?」

プルフォウはドアをノックして言った。

「ああ、はいりたまえ」

プルフォウが医務室に入室すると軍医のフィッツパトリックがいた。フィッツパトリックは一年戦争時代からのジオン軍の軍医で、サイド3から降りてきてから、そのままずっと地球で軍医を続けているベテランだった。

「プルフォウ大尉。どうしたのかな?」

「たいしたことはないんです」

「大尉も成長期だからな」

「勝手に話を進めないでくれませんか?」

プルフォウはちよつと口を尖らせて抗議した。

「悪かった悪かった。身体の調子はどうなのかな？」

「問題ありません。ただ、前に言った身体の震えが」

「診察しよう。服を脱いで、胸をはだけで」

プルフォウはその通りにした。

体の震えがアドレナリン中毒によるものなのか、あるいは肉体が強化されたことによる心臓への負担なのか。強化人間は、筋肉や神経を強化するために薬物の投与などが施されているから、それがまだ幼い肉体にかなりの負担をかけることは間違いなかった。

だから、不調がないか定期的に検査を受けることは重要なのである。面倒だとは思いますが、いつ不調に陥るのか分からないのだから。

だが噂では、地球連邦軍の強化人間はネオ・ジオンほど技術が進んでいないから、肉体と精神に負荷がかかりすぎて、精神崩壊を起こしてしまうらしいのだ。

それに比べれば、とは思う。

「あとは血液検査だな。ベッドに横になって」

プルフォウは言われるがままに血を抜かれ、MRA検査で血管の様子を調べられ、一通りの面倒な検査を受けさせられた。

検査を終えて休んでいると、小一時間ほどで検査の結果がでた。

「検査結果を見たが。いまのところ問題はないな」

「そうですか……。安心しました」

「肉体は正常そのものだ。普段から身体を鍛えてるのも良いことだよ」

「パイロットとして当然のことです」

「体の震えがひどいのは、どういうときに？」

「最近は、戦闘後はいつも。でも、そんなに酷くはないんです」

「精神的な原因もあるのかもしれない。大尉は頑張りすぎだな。少し休暇を取った方がいい」

「休んでなんかいられますか」

「医者忠告は聞いておいた方がいい。きみを見ているといつも哀しく思うよ。わが軍が、こんな女の子に戦いをさせているという状況をね」

「先生。お言葉ですが、わたしはただの女の子ではないですよ？　いまの時代、わたしのような人間が戦うことはめずらしくもないんです」

「そりゃきみの精神は大人だろうけど。肉体的には間違いなく子供だ。胸は大きいがね」

「怒りますよ。説教かと思えばセクハラですか」

「言いにくいことを言うのが医者役目だよ。とにかくモバイルスーツに乗るのは控え

た方がいい。分かったね？」

「……考えておきます」

「まだ上官には進言しないよ」

「進言しても、あの少佐が聞くかどうか。ありがとうございます。失礼します」
「なにかあれば、すぐに来るようにな」

ブルフォウは、軍服に着替えて部屋を出た。

モビルスーツに乗らない方がいい、か。それはパイロットにとつては引退を宣告されたようなものだ。物心ついてから、ずっとモビルスーツを操縦しているのだ。それを、いまさら止めるなどとは。だがその意味では、秘密任務に就くことになれば、しばらくモビルスーツに乗ることはないのである。なんとも皮肉な話だなとブルフォウは思った。

緩やかな動きから、最大積載量いっぱい荷物を抱えているとわかる貨物機が、砂塵吹きすさぶ地面を掠めるように飛行していた。

その機動は地形を利用してレーダーを回避する策ではあるのだが、限られた範囲を窮屈に飛ばなくてはならないストレスの上、狭い滑走路への短距離着陸がパイロットにとつては大きな負担となってしまう。

だがそれだけの価値はあった。いま着陸しようとしているこのヌアクシヨット基地にとつては、積んである貨物が重要な生命線なのだ。

「相変わらず砂しかないなここは。地球上の砂が全部集まってくるんじゃないのかね」

「砂が細かくて、どこにでも入り込んできますからね。やつかない砂ですよ本当に！こんなところには住みたくないですわわたしは」

輸送機『デュゴン』のオーナー、ドミニク・ロジステイクスのCEOとはいっても社員は三人だけなのだがドミニク・プライスは、いつも変わり映えのしない景色にうんざりしていた。

この土地は何世紀も前から、まるで人間を排除するかのようにな細かな砂が猛威を振るっている。テクノロジーが発達した宇宙世紀になっても相変わらず砂だらけで、その量はますます増える一方だ。実際この地域は、やはり人間には地球の自然はコントロールできないのだという、手痛い教訓と反省の象徴として語られることも多いのだ。

だが、そんな過酷な土地ではあっても、ドミニクはこの基地を訪問できることが嬉しかった。彼の家族がここにいるからだ。

ドミニクはヨーロッパとアフリカ大陸で活動する武器商人で、主にジオン残党軍や反地球連邦組織と取引をしていた。あまりまつとうな商売とはいえないかもしれない。

不正な取引で安く買い叩いたり、倉庫からくすねたりした兵器をたくさん売りつけるのはいつものことだ。彼は大企業に勤めていたこともあるのだが、一年戦争で家族を失ってから世捨て人になり、こうした商売を始めたのである。

「グライドパス確認。着陸します」

滑走路を震わせる衝撃の後、ゴムタイヤの甲高い音が鳴って、直後にスラストリバーサーの噴射が大柄な機体に制動をかけた。この貨物機はSTOL（短距離離着陸）性能に優れていて、短い滑走路にも着陸できるから、このような隠れた貨物輸送や密輸には最適なのだ。《ミデア》輸送機や《ファット・アングル》輸送機のようなVTOL（垂直離着陸）機であれば、より小さなスペースでも着陸できるが、音が大きく、積載量が少ないのが問題なのだ。

ドミニク・プライスは滑走路にタキシングした輸送機の後部タラップから降りると、そこに知った顔を見つけて顔をほころばせた。タラップが降りるなり、下で待っていた少女は満面の笑みで初老の運び屋に手を振った。

「ひさしぶりー！」

「プルフォウ！ お前に会えるなら、すぐにでも飛んでくるさ。いい子にしてたか？」
「いいかげん『いい子』はやめてよ。あたしは大尉なんだよ？」

「大尉になっても良い子には違いないだろう。そうじゃないかね？」

「あはは……」

ドミニクは四年前、天涯孤独になってしまったプルフォウの身元引受人となった。

混迷を深めたアクシズでの最終戦闘で、プルフォウは量産型キュベレイで出撃して撃墜されてしまった。辛うじて脱出ポッドで脱出できたのだが、数日漂流していたところを、ちょうど通りかかったドミニクの輸送船に発見されたのだ。

ドミニクはプルフォウを保護したあと、一年ほど彼女に商売の手伝いをさせた。それは兵士としての経験しかなかった彼女にとって新鮮な体験だったようで、最初は少し苦労していたものの、生来の感の良さですぐに仕事を覚えてしまった。そのまま一緒に仕事を続けられれば良かったのだが――。

ドミニクは久しぶりにプルフォウを抱きしめた。

「ちよつと、部下に見られるよ！ 恥ずかしいからやめてよ。馬鹿にされるからー！」

「本当はお前をここから連れ出したいんだがな。女の子が戦争なんてするもんじゃないんだ。司令官からどうしてもと請われたから許したが……」

ドミニクは後悔の表情を浮かべながら、絞り出すように声を出した。

「何言ってるの？ わたしはもともと軍人でネオ・ジオンのパイロットなんだから。

原隊復帰は当然なんだよ」

「どうなんだ？ 最近の状況は」

「うん、まあ……」

「良くないのか？」

「ここは人も戦力も物資も、何もかも足りないからね。なんとか戦線を維持しているってところかな」

「そうだろうな。基地の補給だって、私みたいな小さな業者に頼っているくらいだから想像はつくが……。私はお前が心配なんだ」

「パイロットは常に危険と隣り合わせだよ」

「でも勝ち戦と負け戦とでは全然違うだろう。……言いくいんだが、地球のジオン軍は、このままでは負ける運命じゃないかね？　ここの上の連中はどう考えているのかわらんが、起死回生の策があるとは思えんよ」

「そんな頭が切れる戦略家はいないんだよ。シヤア大佐みたいな英雄がいれば別だけどね。人材不足なんだ」

「そりやそうだろう。お前が大尉なんだぞ？　他に誰もいないってことじゃないか。一番有能なのがお前なんだぞ」

「ちよつと馬鹿にされてる気もするんだけど？」

ドミニクの物言いに、プルフォウは不機嫌そうに頬を膨らませた。

「そんなことはない。わたしはいろんな軍をみてきたからな。人を見れば組織が分か

る。……そろそろ逃げ出す潮時じゃないのか？ このままだといずれ全滅するぞ」

その言葉にプルフォウは打たれたように身体が固まった。

「全滅……」

「取り返しがつかなくなる前に消えた方がいい」

「だとしても、ひとり逃げ出すわけにはいかないよ。大尉としての責任もあるし」

「それが手なのさ。そうやって真面目な人間に責任を負わせて、逃げられないようにするのが連中のやり方なんだよ。お前をさらってでも、ここから連れ出すべきかもしれないな」

「そんなこと言ったって無理なものは無理なんだよ！ 勝手なことばかり言って、あまり困らせないで！」

プルフォウはこらえ切れずに思わず怒鳴ってしまった。論理的に考えれば当然の帰結だということはわかっていた。だが軍人である限り逃亡、脱走は許されない。そんな当たり前のことを、ドミニクがわざと無視しているから腹を立てているのだ。

「しかしな、プルフォウ……」

「安全な場所から見ただけじゃ分からないんだよ！ ジオンを守るためには、誰かがやらなくちゃいけないってことくらいわかるでしょ！」

「宇宙にいる連中、ジオンのお偉いさんはお前達を捨て駒のように考えてるんじゃないな」

いのか?」

「捨て駒?」

「人間を消耗品のように考えているんだ。お前のようなパイロット、強化人間はマシーンと同じに扱っているんだよ」

「そんな言い方……」

プルフォウの眼にうつすらと涙が浮かび、普段は気丈な彼女の意外な仕草に、ドミニクも議論するのを止めた。彼女が涙を見せるのは身内の前だけなのだ。

「……すまん、悪かった」

ドミニクがプルフォウの肩を抱きかかえると、彼女はしばらく身体を預けた。

「強化人間は戦うために造られたんだから。産まれたときから義務と責任があるんだよ」

「この宇宙世紀に、基本的な人権もない人間がいて良いはずはない。お前も自由に生きる権利があるだろう」

「それが出来るときもくるかもしれない。でも、それはジオンが勝つか負けるときだよ。今は考えるときじゃないから」

「儂はお前が心配なだけなんだ。責任感の強い子というのは分かってはいるんだが。無理だけはするなよ」

「……うん、わかった」

他の人間に見られるのもかまわず、親子はただ無言で抱き合っていた。

「そのパレットには精密機器が入っているんだ！ 丁寧に扱ってくれ！ 壊れてもしらんぞー！」

「わかったよ、じいさん！」

「まったく乱暴な連中だ！」

輸送機からパレットに載せられた貨物が次々と降ろされてゆく。モビルスーツの部品や弾薬に混じって、食料や生活必需品などもごった煮で詰め込まれている。輸送機が連邦軍に見付かる危険があり、駐機していられる時間も限られているので、又アクシヨット基地総出で搬入作業が行われていた。

「あ、そういうえば頼んでたものは見つかった？」

荷物の整理を手伝っていたプルフォウが、思い出したようにドミニクに尋ねた。

「ん？ 流行りの服だったか？ そうだろう、おしゃれをしたいお年頃だろうからな」

「違うって！ 弾だよ弾。頼んでおいたでしょ」

「まったく、お前は服より玩具の方が好きなんだな。良くないぞ」

「おしゃれとか、そういうのわたしには必要ないから」

「仕方がないな。心配しなくても手に入れてきたさ。『フレッシュト弾』だったかね

「？」

「それそれ。地球連邦軍がハイザック用に開発した、試作120mm弾頭」

ドミニクが兵士に指示してパレットひとつを持ってこさせると、その中身を彼女に見せた。

「ありがとう」

「手に入れるのは苦労したね。ハイザックも古いモビルスーツだし、今じゃマシンガンなんてあまり使われないからな。それでも、なんとかあちこち探しまわって五百発集めたんだ」

「五百発……。ちよつと少ないんじゃない？」

「無茶いわんでくれよ。儂は貧乏武器商人にすぎんから、おこぼれを拾うように這い回らなきゃならん。老人にそんな惨めな思いをさせて、褒美に何をくれるのかね……？」

「ゲオルク少佐がちゃんと報酬を支払ってくれるよ」

「あんな嘘つきのつまらない男の顔など見たくもない！」

「まあまあ。少佐が誤魔化したらあたしに言つてよ。怒鳴り込んでやるからさ」

「ありがとうな。でも儂はただいつもの褒美が欲しいんだ」

「え、また？ 嫌だよ恥ずかしい……絶対嫌だ」

「プルがそんなに冷たいとはな……老い先短いのに、もう生きてる意味もない……」
「もう大袈裟なんだから。わかったよ」

プルフォウは、辺りを見回して誰もいないことを確認すると、恥ずかしそうにドミニクの頬にキスをした。

「こんな弾を手に入れたからって、あまり危険なことはするなよ。老人を悲しませないでくれ」

「わたしは強化人間だからね。心配いらないよ。ドミニクこそ連邦軍に撃ち落とされないように気を付けて？」

「せいぜい気を付けるさ。モビルスーツを腹に抱えて一緒に死ぬのは御免だからな」

そのとき大きな音を立てて、輸送機の奥からシートに包まれた大物がパレットの中から引き出されてきた。そのシルエットはプルフォウの目を引いた。

「なんだろう、あの大きいの。モビルスーツ？ ずいぶんコンパクトだけど、分解されてるのかな？」

「これも手に入れるのに苦労したさ。フランク軍曹が欲しがっていた機体なんだ」

「フランク軍曹が……？」

ちょうどそこへ件のフランク・マクレガー軍曹が姿を現した。彼も輸送機の到着を待ちわびていたのだ。

「プルフオウ大尉！ あれはかなり珍しい物ですぜ。ドミニクさんに長いこと探し回ってもらってたんで」

「へえ、随分もったいぶるじゃないか」

「二年戦争時のモビルスーツなんですがね……ケンプファーです」

「ケンプファー！ そんなレアな機体、良く見付かったな。何機も生産されてないんじゃないか？」

MS-118E《ケンプファー》は一年戦争末期にジオン公国で開発されたモビルスーツで、大推力のバーニアスラスタを装備した機動性に優れた機体だ。

爆発的な加速によって、素早く敵機に肉薄して撃破する、いわゆる強襲用モビルスーツなのだが、簡易に組み立てと解体が可能な構造で、特殊部隊向けの機体として運用された実績もある。

「ちようど連邦軍に接収された機体があつてな。倉庫で眠っていたんだが、偶然儂が見付けたのさ。ほとんど装甲がない状態だったがね……。で、書類を誤魔化して持ち出してきたつてわけだ」

パレットに固定された機体は、内部構造がほとんどむき出しになっていた。装甲がないので、新規に作り起こさなくてはならないだろう。

「これを完成状態に持って行くのは大変じゃないか？」

「そんなことはありませんよ。ケンプファーは、これでほとんど完成してるんで」「ん？ どういうことだ？」

「大尉、ケンプファーの特徴はなんだと思います？」

「特徴か？ まあ軽量さと大出力スラスターによる高機動性だろうなあ。ホバー機動もできたらしいね。装甲は紙みたいだが……あ、そういうことか」

「そう、ケンプファーにとつては装甲なんかおまけなんですよ。なくても良いくらいで。まあ、それは言い過ぎですが、一緒に設計図を入手しましたからね。ついでに機体を強化するつもりです。ガルスの子エネレーターを搭載してバーニアも追加する。装甲も余ってるザクやグフの装甲を加工すれば」

「でも実戦ではどうだろうな。装甲が薄いつて、ちよつと怖いんじゃないか？ わたしは装甲はなるべく厚い方がいいな」

「どんな攻撃も、当たらなければどうということはないんですよ」

「ははは、それは当たり前じゃないかっ！」

プルフォウは、軍曹のジョークにこらえ切れず吹き出してしまった。

「でも難しいね。強化人間のわたしでも、全ての攻撃を避けるなんて無理だよ」

「まあ見ててくださいよ。こいつを完成させて連邦軍をけちらしてやりますよ。ケンプファーはガンダムタイプも撃破したといわれていますからね」

「……そうだったか？」

「リボークロニーでの戦闘で、ニュータイプ用の新型ガンダムも含めて、単機で連邦軍一個MS中隊を壊滅させたんですよ」

「ふーん、ちよつと眉唾だが……まあ自信があるのは良いことだ。戦果を期待してるよ」

プルフォウはフランク軍曹の肩をポンと叩いて鼓舞した。

「それじゃドミニク、わたしは作戦の準備があるから、そろそろ部屋に戻るよ」

「そうか、気をつけてな。またすぐに来るからな」

「わかった」

プルフォウはこのあとすぐ、極秘任務であるプリンセス救出作戦を開始した。

第13話「偽り者」

12

ミーミスブルン学園

ミーミスブルン学園の教頭ステファン・コレスは、四年前にはアクシズにいた。彼は元ネオ・ジオンの文官で、経理業務を担当していたのだ。小惑星アクシズという浮き世離れた組織であっても、経理や財務といった現実的な仕事から逃れることはできない。

ステファンの仕事はかなり忙しかった。ザビ家復興を御旗に掲げたアクシズ、ネオ・ジオンに期待した人間は多く、一年戦争の恨みを晴らそうとするジオンシンパからは、企業、個人かかわらず、多額の資金援助が行われたからである。

ジオンを信奉したのは全てスペースノイドだったが、皆がスペースコロニーに住んでいると言い切れるほど世界は単純ではない。ジオン・ダイクンの支持者は地球にも大勢いて、サイド3から地球に降りた後、一年戦争開戦後も宇宙に上がらずに地上に留まっ

た人間も多かったのだ。多様なバックグラウンドを持つ人々から、あらゆるルートを通して集まってくる金を管理するのは大変な作業だった。

その意味では、地球連邦政府の監視が緩かったのは幸いだった。

地球連邦政府は、旧ジオン公国の資源衛星アクシズを監視はしていたが、まさか軍備を整えていたとは思ってもみなかったのである。連邦高官たちは、小惑星に落ちのびた惨めな敗残者たちが糊口をしのぐために、隕石の資源を掘ってかろうじて生活しているとしか認識していなかったのだ。

事実アクシズの貿易収支は赤字で、バランスシートを見れば辺境の貧乏国にすぎなかった。だが裏取引や闇金融取引の流れを注意深く追ってゆけば、それがとんでもない間違いだということに気付いただろう。アクシズに流れ込む金は膨大で、調査の目を逃れるために鉱物資源貿易を隠れ蓑にして、ダイヤモンドや金などの現物に変えられて貯めこまれていたのだ。

経理担当の役目はそうした金を管理し、マネーロンダリングで『綺麗な』金に変えて、軍事計画に沿って様々な部門に予算を割り振ることだった。ステファンはかなりの権限を与えられていて、有能な文官だと自負していた彼は、いずれはネオ・ジオンの幹部に出世するつもりだった。

だがステファンは致命的な失敗をおかしてしまったのである。

ネオ・ジオンとエウーゴとの戦争が佳境を迎えたとき、グレミー・トトという士官がハマーン・カーンに対して反乱を企てたのだが、ステファンはその反乱軍であるグレミー一派に、管理していた資金のほとんどを盗まれてしまったのだ。問題なのは、その資金奪取が、彼が密かに開設していた隠し口座を通して実行されたことだった。ようするにステファンは、自らの権限と立場を利用してネオ・ジオンの資金を継続的に横領していたのだが、反乱軍はそれに目を付けて利用したのだ。ほどなくステファンの不正行為も明らかとなり、結果的に二重の罪をおかすことになってしまった。

当然ながらネオ・ジオン軍を指揮するハマーン・カーンの激しい怒りを買って、彼の運命は風前の灯火となった。だが国家反逆罪の罪で処刑される寸前、グレミー軍蜂起の混乱に乗じて、家族共々辛くもアクシズを脱出することが出来た。そして一年戦争時代のサイド3とのコネを最大限利用して、ミーミスブルン学園の教頭の地位におさまったのだ。

ミーミスブルン学園は、ステファン・コレスにとっては身を隠すには最適の場所だった。その成り立ちからジオンと関係が深いミーミスブルン学園には、いまなお地球に潜伏するジオン・シンパの人間、企業が出資しているが、その理由は彼らが自らの家族を守るためだった。人類は、宇宙世紀になっても未だ差別や迫害を根絶できておらず、学園は出資者の子供達を守るセーフティ・ネット、安全基地として機能しているのだ。そ

れは公然の秘密ではあったが、ジオンと関係がない生徒も入学させているため、少なくとも公には普通の寄宿生の学校と変わりはないかった。

いまステファンは、学園の執務室でもったいぶった態度で訪問者を迎え入れていた。執務室には、わたしは人生の成功者なのだと自分自身に暗示をかけるかのように、家族の写真や賞状、勲章などが飾られていた。

訪問者である地球連邦軍のパイロットは、その部屋の真ん中でヘルメットを脱ぎもせずに立っていた。

「お待ちしていた。わたしはステファン・コレス。ミーミスブルン学園の教頭だ」

ステファンは『教頭』という単語を強調しつつ、相手を見下ろしながら手をさしたのべた。

「知っている。裏切り者でしょ？」

連邦軍パイロットは握手には応えずに言った。

ステファンは、その無礼な態度を腹立たしく思った。

いきなり挑発してくるのは、相手を動揺させて優位な状況を作り出そうとする作戦だろう。だが、自分に対してそうしたふざけた態度をとった奴は皆長生きしなかった。若さゆえの過ちで許されることではない。

それにしても兵士にはずいぶん小柄な女だ。女を寄越すのも自分という人間を

見くびっているし、まるで子供のようにも見える。

大きなサングラスをかけているので顔が良く見えず、年齢を確認する手助けにはならない。確かにアクシズにも子供のパイロットはいたが、子供が戦いに参加するなど忌むべきことで、大人の世界に子供が首を突っ込むのは許しがたい。

本音を言えば、ハマーン・カーンに代表される、若輩ばかりが偉そうな態度をとっていたネオ・ジオンが気に入らなかつたのだ。大人の論理で動いていたジオン公国時代こそが真のジオンであり、資金を横領していたのも、ジオン再興を考えて独自の組織を立ち上げようとしたからだ。それがグレミー・トトとかいう若輩の大馬鹿者のせいで全て台無しになってしまった。

まあいい。まだチャンスはある。この取引がその始まりとなる。

「裏切り者とは。これはまた手厳しいですな」

「嘘がつけな性格なのよ。わたしは地球連邦軍第24航空団第1大隊所属のプレサイス少佐。よろしくとは言わないわよ」

プレサイスのノーマルスーツは鮮やかなパープルで、右胸の部隊マークが目立っていた。

「プレサイス……『正確な』?」

「コールサイン。まあ、渾名みたいなものね」

「それにしても女性とは……。そしてかなりお若い」

「そう、私の所属する部隊は実力主義なの」

ステファンは自分の地位を揶揄するような言葉にむっとしたが、怒りを抑えて話を続けた。

「プレサイス少佐、突然の訪問で驚きましたよ。前もって連絡が欲しかったですな。しかしパイロットスーツで学園を訪れるのはやめて頂きたかった。生徒が不安がってしまう。まさか駐車場にモビルスーツを駐めてはいないでしょうな？」

ステファンは生徒のことを思う立派な教頭らしく振る舞いつつ、連邦軍人に高圧的な態度を改めるよう釘を刺した。

「わたしの機体ゼータプラスは垂直離着陸ができるから、確かに駐車場に駐めても良かったかもしれないわね」

プレサイスはそう言って肩をすくめた。

「ノーマルスーツが生徒達を驚かせたなら謝るわ。なるべく見られないように気をつけてはいる。それよりもあなたの情報の方が心配ね。間違いはないの？」

「当然です。そこは信用して頂きたいな」

「信用ですって？ ふざけてるのかしら……。そんなこと無理に決まってるじゃないの。わたしは裏切り者は反吐が出るほど嫌いなものよ」

プレサイスの声からは、はつきりと分かる嫌悪感が感じられた。目の前の男はクズ以下の人間なのだと思下り果てるようなイントネーションだった。

「わたしも教育者だ。この学園にたいして責任がある。今回の取引は生徒のためを思つてのことだ。学園の中は平和に保たなければならない。トラブルの火種は取り除かなければ」

「立派な考えだこと。それが私欲を隠すための方便でもね」

「ひとりの生徒のために大勢の生徒を危険にさらすわけにはいかないのだ！ あなたも地球連邦軍の軍人なら理解できるはずだ」

ジオン出身のステファンは内心地球連邦軍を唾棄していたが、ここは媚びるのが得策だと考えて持ち上げてやろうと考えた。この取引を成立させられるなら安いものだ。

「ジオン出身のわりには民主主義に傾倒しているのね？」

「無節操な人間に見えますかな？」

「自分の利益ばかり考える、利己的な人間に見えるんじゃないかしら？」

「馬鹿な！ しかし、それをいうなら民主主義、市場主義の本質は利益の追求だろう！」

「まあ、それについては同意するわ。せいぜい得たお金で、市場経済を賑わせなさい」
「報酬はわたしが犯すリスクと犠牲への当然の見返りだ。あなたも職業軍人だ。地球

連邦軍から給料をもらっているはずだ」

その金こそがこの会談が行われている理由だった。

ステファンの復讐心と野望は、学園に所属している、とある重要人物を引き渡す取引を、密かに地球連邦軍と行うまでに膨れあがっていたのだ。その見返りとして、ステファン自身の身柄の保証と、彼の口座への莫大な金の支払いが行われることになっていた。もちろん口座止め料の意味合いもある。

「尊い労働の対価と、インチキして稼いだ汚い金とは全然違うわよ」

「口の減らないお方だ……それで、いったいどういう御用件なのかな？ 軽蔑する人間の顔をわざわざ確認しに来たとは言わないでしょうな。それとも儲かる投資先でも教えにくてくれたのですかな？ 取引の手順はすでに伝えてはいるはずだが」

「上層部はあなたを信用してないの。だからわたしがわざわざ監視しにやって来たというわけよ」

「では伝えて頂きたい。何の問題もないとな。わたしはこの学園の教頭なのだ。誰もがわたしの言うことを聞き、話が外部に漏れることもない」

「本当に？ それならジオン残党軍のスパイが潜り込んでいるのは、いったいどうい
うこと？」

「ジオン残党軍のスパイだと？」

「そう。ご自慢の『独自の情報ネットワーク』からは知らされていないのかしら?」

「まったくくない。噂すらない……」

「なら、その情報網はクスよ。馬鹿な人。少しは我々の役に立つところを見せてもらいたいものね」

「ふざけるな! わたしの情報提供があつたからこそ、貴様達は戦争犯罪人を逮捕出来るんだろ?」

年齢が半分以下の生意気な女性パイロットに自らの存在価値を否定されたステファンは、ついに感情を露わにして怒鳴り声をあげた。

子供に馬鹿にされる筋合いはない! 自分はこの生意気なガキが生まれる前から地球圏の荒波に揉まれてきたのだ。自分に頭をさげて教えを請おうとする組織はいくらでもある。自分の価値を認めない奴は、ただの無能かボンクラだ。目の前の人物の価値すら判断できないものに、世の中の道理が分かるはずがないだろうが!

「犯罪者はあなたでしょ? それに、もうあなたの利用価値はなくなつたということになるんじゃないの?」

「何だと? 間違いなく身柄は保証してくれるのだろうな」

「そう聞いている。でも覚えておきなさい。本来はあなたとは釣り合わない人物との交換取引なのよ。身内を裏切る卑しい人間とはね」

「卑しかろうと何だろうと、わたしの頭の中には値千金の機密が溢れるほど詰まっているのだ！ 疎かには扱えないはずだ！」

「はははっ、笑わせないでよ！ ゴミが詰まっているくせに！」

「貴様！」

「まあいいわ。またこちらから連絡する。それまでは普段通りにしていなさい。余計なことはしないようにね」

プレサイスは嘲るように言うのと、一刻も早くこんな薄汚れた部屋からは離れたいというように、足早にドアへと足を向けた。

部屋に飾られたきらびやかな装飾品も、彼女にはまるで役に立たないようだ。若さ故の融通の利かない潔癖さなのだろう。くだらないことだ。だが数年後には世の中の現実を理解して、権力者に媚びることになる。このわたしに。

ステファンが苦々しくプレサイスを見送っていると、彼女はドアの近くに飾つてある陶磁器の壺の前で足を止めた。

「なに、これは？」

「ん？ それはいいものだ。古代中国北宗時代の水瓶だよ。ジオン公国のマ・クベ大佐が所有していたという一品だ」

「そう……」

プレサイスはしばらく興味深そうに壺を眺めた。

生意気な女が感嘆している様子に、ステファンは壺の価値が彼自身の価値をひきあげたと感じた。そうでもっと驚くがいい。わたしはお前が知らない世界をたくさん見ってきたのだ。

だがプレサイスは何か違和感を感じたようで、腰に取り付けていた携帯センサーを取り外すと壺にかざして調べ始めた。

「なんだ、何をしている？」

「ちよつと黙ってなさい」

「疑っているのか？」

「ふん、疑うも何も、まったくの偽物よ」

「なんだと!？」

「放射性アイソトープを計測したけど、古代中国の物じゃないわね。比較的近代に作られた物よ。おそらく土産物か何かのために作られた模造品レプリカでしょう」

「馬鹿なことをいうな! わたしがアクシズから持ってきたものなんだぞ!」

「泥棒じゃないのそれ? まあ、どうでもいいけど。とにかく炭素の放射性同位体C14の数でわかるのよ」

「なんだそれは? 意味が分からん!」

「騒がないでよ。まあ作りは悪くないから花でも生けておくといいわ。少しは部屋のセンスもよくなるでしょう。ひどいわよ、この部屋は」

そういうとプレサイスはさつきと部屋を出ていった。

あとには怒りの形相のステファンが取り残された。怒りで血が煮えたぎり、今にも内部から爆発しそうだった。

「くそっ、ふざけやがって！」

ステファンは壺を持ちあげると、部屋の反対側に走りながら思い切り床に叩き付けた。白い陶磁器が一瞬で砕け散り、ガシャンという透明感のある大きな音が部屋の内外に響き渡った。

執務室のドアをノックしようとしていた女生徒ナツメ・スワンソンは、ガラスが割れるような大きな音に驚いて立ちすくんでしまった。

スワンソンは教頭から呼び出しを受けていたのだが、ドアから急に紫色のスーツを着た女性が出てきたので、彼女と真面からぶつかってしまった。

「きゃっ」

小柄なスワンソンは突き飛ばされて尻餅をついた。

「あら、ごめんさない！ 大丈夫!？」

スーツの女性はすまなそうに謝罪して、スワンソンの手を取って助け起こしてくれた。背はそんなに高くないし、大人の声でもない。年齢はそれほど離れてないのだろう。

「あ、はい。大丈夫です」

「よく確認しないで出てきてしまつて……。本当にごめんなさい」

「わたしがドアの前にいたのが悪いんです」

スワンソンは少し緊張した笑みを浮かべながら言った。

「まあ可愛らしい娘ね。学校は楽しい？」

「はい。勉強することが多くて大変ですけど楽しんでます」

「そう、良かった。これからいろいろあると思うけど、しっかりと頑張つてね。それじゃ、またね」

「さようなら」

スーツの女性は急いだ様子で廊下を歩いて行った。

『顔は見えなかったが優しそうな人だ』

スワンソンはそのスーツ姿の女性に好感を持った。でも、あのスーツは確か地球連邦軍のパイロットスーツではないだろうか？ 以前同じ格好をした人間を見たことがある。もしかしたら先日の戦闘騒ぎに関係があるのかもしれない。

しばらくスーツの女性を見送っていたが、ここにやって来た目的に意識を戻した。そう、教頭に会わなければならないのだ。急に呼び出されるなんて。成績が悪いわけではないし、問題を起こしているわけではないのに。

スワンソンは不安な気持ちを抑えながら、開いたままのドアをノックした。

第14話「ウェイブライダーズ」

13

地球連邦軍パイロット、コールサイン”プレサイス”少佐は、スポーツエレカを運転してミームスブルン学園から飛行場まで移動した。

アナハイム・オートモービルズ製のスポーツエレカはかなりの加速性能だったが、ホイールスピンをさせながら学園を飛び出してきたので、少々目立ってしまったかもしれない。だが、この学園の教頭とのやりとりは不愉快でたまらず、そうでもしないと気は晴れなかった。

高速道路を飛ばすと15分ほどで中規模の民間飛行場に到着した。エレカを駐車場に停めて軍のカードで決済すると、隔離された駐機スペースに向かった。目の前には彼女の愛機であるグレーの航空機が羽根を休めていて、彼女はその優美な姿に見惚れた。隣には同じ部隊の同型機の姿もあったが、やはり自分の機体は格別美しい。

逆三角形をしたその航空機は、実はモビルスーツが複雑に変形したもので、”波に乗る者”《ウェイブライダー》と呼ばれている。もともとは大気圏再突入用に設計された

航空機をそう呼ぶのだが、語感が良いので航空機形態に変形するマシンの通称となっているのだ。大気の波に乗り、空中を自由に駆けめぐるといっわけである。そして、このウェイブライダーに変形可能なモビルスーツMSZ-006D《ゼータプラス》は、優秀なエリートパイロットだけが搭乗できる高性能機だった。

機体の周りには、数人の地球連邦軍兵士がアサルトライフルを抱えて立っていて、機体保全のための警備を行っていた。プレサイスが《ゼータプラス》に向けて歩いてゆくと、彼女の到着に気が付いたひとりのパイロットが飛行場の待機室から出てきて出迎えた。

「ご苦労さん。どうだったジオン野郎は？」

「オコンネル中佐、先にスードリIIに帰っていたかと思つたわ」

「当ててみようか？　いつものように『魂どころか肉体も地球の重力に引かれて、轢かれたカエルみたいに潰れた男』だつていうんだろ？　その意味は良く分からないがね」地球連邦空軍第24航空団第1大隊、通称《ウェイブライダーズ》の隊長ロバート・オコンネル中佐は、チエックリストとドリンクパックを副隊長に渡しながら言った。

「当たり前よ。まあ分かりやすくいうと醜いクズつてこと。性格も部屋のセンスもどうしようもない男。俗物よ、あれは」

プレサイスはサングラスを外してノーマルスーツのポケットにしまうと肩をすくめ

た。

彼女のオレンジ色の瞳は知的さを感じさせ、上品な薄紫の豊かな髪とあいまって、パイロットというよりはどこかの名門の令嬢を思い起こさせた。とはいえ少し言葉使いが汚いのが玉にきずだった。

「君のお眼鏡にかなう男はそうはいないだろう。まして裏切り者の、保身だけを考えているクソ野郎ではな？」

オコンネルは笑いながら言った。

「まあ、うちの軍にもそんな奴はたくさんいるでしょうけど。組織には一定の割合でクズが混入するようね。選別して捨てないと」

「うちの部隊は大丈夫だ。ウェイブライダーズ隊には、その理論は適用されないな」

「当然でしょ？ センスのない下手くそは、ガルダへの空中着艦時に激突して死んでしまうでしょうから。つまり機体が選別装置ってわけね」

「このチューンアップしたゼータプラスは、普通のパイロットには乗りこなせないよ。我々だけが手足のように操縦できるんだ」

「確かにね。でも中佐、過信は自分の足をすくうわよ？ この前わたしが戦ったジオン残党軍のモビルスーツ。あのパイロットはただなものじゃない。ネオ・ジオンの強化人間に違いはないわ」

「強化人間……。仮にそうだとしても君にはかなわないだろ？ それにこちらには連携攻撃がある。奴らは単独行動が多い」

「戦場ではあまり味方を当てにしないで。気合い負けするわ。奴らの強みはそこにあるのだから」

プレサイスは年上の上官を叱責して気合いをいれた。

「スードリⅡに帰投します」

プレサイス少佐は、機体の周囲をぐるっと一周して異常がないかチェックした後、ノーマルスーツのバックパックに引っかけていたヘルメットを被り、機首のコクピット脇に備え付けられたラダーを登った。そして機体外板に設けられた小さなパネル内のボタンを押してハッチを開くと、フレームをまたいでリニアシートに座って、バックパックをシートの窪みに固定した。

そして慣れてはいても、いつも気持ちを高揚させる起動手順を始めた。

コンソールに配置されたメインスイッチを押して核融合ジェットエンジンをスタートさせると、甲高いタービン音が響いて機体が軽く振動し始める。

すぐにコンソールパネルを操作してコマンドを入力、人工知能によるシステムの自己診断を開始。次々とシステムがオンになっていくと、ほどなくして全天周モニターに周囲の映像が投影された。

しばらく待ち、核融合ジェットエンジンの回転が安定したことを確認すると、翼の動作確認を行う。感圧式コントロール・スティックを優しく触れるように繊細に動かし、主翼のエルロンとスタビレーターが間違ひなく動作することを確かめる。同時にモビルスーツ形態では足首のカバーとなるエアブレーキが動作することもチェックする。こうした命に直結する機構のチェックは、どうしても自己診断プログラムには任せられないのだ。

プレサイス少佐は黙々とチェックリストを消化していった。彼女はこの手順が好きだった。何事も正確さを好み、機体を完璧な状態に保つことを心がけているのだ。

それにしてもゼータプラスは美しい機体だ。ほれぼれとする。性能はもちろん、美しい航空機に変形できるところが気に入っていた。その意味では、同じ地球連邦軍製の可変モビルアーマーNRX-044《アツシマー》などは、自分の美的センスに照らし合わせてみれば落第点だった。

言わせてもらえばハンバーガーみたいな形をしている《アツシマー》は、《ゼータプラス》と比較すればまるで話にならず、冗談みたいな機体なのだ。そんなセンスのない機体に乗ると想像しただけで寒気がする。

美しい機体だからこそ、先の戦闘で脚に傷がついてしまったことが不快だった。敵モビルスーツのメガ粒子砲によって、エンジンポッドの一部を傷つけられてしまったの

だ。動作に支障は無いが見栄えが良くない。交換パーツが届いたらすぐに修理するつもりだった。名誉の損傷ともいえるが、美しい機体に傷が付くことは耐えがたく許せない。

「かならずリベンジしてあげるわ。待っていなさいネオ・ジオンの強化人間！」

その勇壮な目標にプレサイスの気持ちは高揚した。感覚が鋭敏に研ぎ澄まされてゆく。

「準備完了、発進する」

プレサイスはオコンネル中佐より先に離陸することを宣言した。

「こちらEFAFウェイブライダー02、バーゼル・コントロールタワー離陸許可を求

む」

「バーゼル・コントロールタワーよりウェイブライダー02へ。離陸を許可する」

「了解」

「お前たち、民間の旅客機を脅かさないように気を付けてくれよ」

「何をくだらないことを、当たり前でしょ」

暇に任せて、わざと民間機を驚かせる連邦軍パイロットがいるらしい。レベルの低い奴……。そのようなモラルの低さだから、地球連邦軍は職業安定所などと揶揄されてしまふのだ。軍人として意識を高く持つ必要がある。……悔しいが、あのジオン残党軍の

パイロットのほうが、そうしたクズより意識は高いだろう。もちろん彼らと相容れることはないが。

それにしても、あの濃紺色をしたジオンの重モビルスーツとの戦いは久々に胸躍るものだった。持てる技量を全て発揮した、死力を尽くすプロフェッショナル同士の戦い。それこそ崇高なものだ。素人同士は地べたで無様に踊っていればいい。あのパイロットこそ、自分が望んでいたライバルなのだ。

プレサイスは高揚感に浸っていた。

フットペダルを踏み込むと、上昇用のリフトスラスタから機体下面に向けてジェット噴流が吐き出されて、機体を地面から浮き上がらせた。そのまま二十メートルほど垂直上昇させた後、垂直離着陸モードから通常飛行モードに切り替えてメインスラスタを全開にした。機体後部からジェット排気が勢いよく吹き出して強烈な振動が機体を支配すると、とたんに爆発的な加速が開始された。

「この加速……」

Gによってリニアシートにギュッと押しさえつけられる刺激がたまらない。ぞくぞくとする。この瞬間のために、わたしはパイロットをやっているのだ。

プレサイス少佐は恍惚となった。周囲の全ての物が意識から消え去り、自分と愛機だけの世界となる。機体を感じることで操縦する一体感が高まるのだ。

それがまずかった。

突然、空を覆っていた厚い雲の隙間から、民間旅客機が降下してきたのだ。

「なんだというの!?!」

加速に酔いしれていたプレサイスは、周囲を感じる感覚が鈍っていたので旅客機の接近を感じできなかった。このままでは、わずか数秒後には二機は激突し、ひとつの光球と化すだろう。素早くビームガンで撃破すれば自分だけは助かるかもしれない。無差別大量殺人者になることを受け入れるならば。

「冗談じゃないわっ!」

プレサイス少佐は鍛え抜かれた反射神経で即座に反応すると、スロットルを戻して操縦桿を左手前いっぱい引き、鋭いバレルロールで旅客機の周囲をぐるりと廻るように飛行して間一髪で避けた。コクピットのスクリーン越しに操縦士の目をむいて驚いた表情が見えた。動揺を隠しきれない様子だ。何をわざとらしく驚いている? 自分のミスが分からないのか!

激怒したプレサイス少佐はコントロールタワーへの回線を開いた。

「管制官、どういう指示をしている!?! 危うく死ぬところだ! あのバカをなんで降ろした!」

「俺のせいじゃない! あの旅客機が勘違いしたのか勝手に降りてきたんだ!」

「素人みたいな言い訳はやめなさい！ あなたの責任よ。だったら、そのパイロットの飛行士資格をはく奪しなさい！ 馬鹿と一緒に死ぬのはごめんだ！」

「無理を言わないでくれ。航空会社に苦情は申し立てるが、世界的にパイロット不足なんだよ！」

「センスのない奴が飛んでも空が汚れるだけだ！ 汚らわしい！」

プレサイスは憤懣やるかたない感じで叫んだ。

「まあ、いいわ。わたしだったことを感謝することね。他のパイロットなら突っ込んでいたところよ！」

プレサイスは怒りを抑えられなかった。素人どもが……！

彼女の理想の空は遠かった。

プレサイスは今度こそゼータプラスを思い切り加速させると、そのまま雲を突き抜けて遙か雲の上まで上昇した。そこには濃い青空が広がっていた。不快な気分を忘れさせてくれる汚れ一つない綺麗な空だ。癒やされる。その光景を人生の指標とするべく、忘れないように目に焼き付けた。

しばらく巡航速度で飛んでいると、後方からオコンネル中佐の機体が追いかけてきた。

「大丈夫か少佐？ 危なかったな。下からみてもギリギリだったぞ」

「アクロバット飛行はいつものことだけど、危うく民間機を撃墜するところよ。ジオンじゃあるまいし」

「秘密任務なのに大事になるところだったな」

「ガーウィン少将から大目玉ね。ウェイブライダーも解散になってわたしたちもクビかしら？」

「間違いない。そうなたら君はどうする？」

「まあわたしは若いから。起業するとかモデルになるとか、そういうチャレンジも面白いわね」

「たいした自信だな、少佐」

プレサイスはこの澄んだ青空を飛ぶように、自分の人生を美しく駆け抜けたいと考えていた。だから、そのためにネオ・ジオンのライバルを倒す必要があった。それこそがわたしの産まれた理由なのだから。運命を超えるためには、産まれた理由を消し去る必要があるのだ。

第15話「姫とのコンタクト」

14

プルフォウがミームスブルン学園に潜入してから二週間が過ぎていた。ようやく学園生活に慣れつつはあったが、だとしても、彼女はとうてい落ち着いた気分にはなれなかった。秘密任務の遂行が目的なのに、未だ何の成果も上げられていなかったからだ。だが焦りは禁物だと、寄宿舎のお風呂に浸かりながらプルフォウは思った。

「まったく不愉快だ。パイロットのわたしが潜入任務だなんて。人手不足といったって、素人に三文芝居を演じさせる理由にはならないよ」

湯船にはたつぷりとバスソルトを入れていた。学園での生活は、知らないことや慣れないことだらけで、大いにストレスが溜まっているからだ。

だが、不条理がちよつとした幸運をもたらすこともある。その一つが、ここでは好きだけ水を使えるということだ。アイスを食べるくらいにお風呂に入るのが好きなので、これはとても嬉しかった。常に物資不足のヌアクシヨット基地では、シャワーを浴

びるのも気を使うのだ。

基地の仲間たちには申し訳ないと思いつつ、プルフォウは存分にお湯を使っていた。まるで、それが自分へのちよつとしたご褒美だというように。

プルフォウは湯船からあがると、バスタオルで頭と体を拭いて、裸のままベッドに寝転んだ。こうやって寝ていると幼いころのコールドスリープの体験を思い出してしま

う。
彼女は薄暗い部屋で姉妹と一緒に、一糸纏わぬ姿で人工的に寝かせられていたのだが、それは戦闘訓練と学習、および精神、肉体的な調整を、幼い肉体に定着させるための処置だった。

「フン、あのコールドスリープ装置だつて懐かしく感じるな」

そうしているうちに通学時間が迫ってきた。プルフォウはベッドから跳ね起きると、急いで下着を身に着けて、ドライヤーで髪の毛をとかし始めた。

この作業はかなり面倒だった。上手くまとまらない髪の毛に、プルフォウは思わずドライヤーを投げ投げそうになった。彼女は少しくせ毛気味で、丁寧にドライヤーをかけたつもりでも反抗するように髪が跳ねてしまうのだ。

「ちっ、見てくれだけ繕おうだなんてさ」

プルフォウは自分らしからぬ行為に苦笑した。

だが、それ以上に苦勞しているのはクラスメイトとの会話だった。誰と誰が付き合っているとか、芸能人の話とか、美味しいデザートのお店があるだとか、連中は取り留めのない話を延々としゃべり続ける。

記憶力は良いから、無理のない会話を生成はできた。あらかじめ流行のファッションやグッズ、話題の映画や芸能人などの情報は頭に叩き込んであるのだ。だが精神的にはかなりの苦痛を伴っている。

「子供と話すのは本当に疲れるよ。早く帰還したいものだ。基地は変わりないだろう。みな無事だといいいんだが」

ただし、美味しいアイスクリーム店の情報だけは大いに興味深く、時間があれば行ってみたくとも考えていた。アイスを食べるものも女生徒らしく振る舞うには必要なことなのだ。

そう自分を納得させつつ、プルフォウはなんとか満足できる形まで髪を整えた。

「まあ、こんなものだろう。モバイルスーツを修理するよりよほど簡単な作業だな」

プルフォウは身だしなみを整えると、通学用バッグに、コンピュータースーツ、ハンカチ、化粧ポーチ、コミュニケーションを詰めこんで部屋を出た。

軽くリップも塗っていて、これは資料としてエミリー軍曹から提供されたファッション雑誌を熟読した成果だった。言ってみれば簡単な塗装みたいなものだ。モバイルスー

ツの外装を補修したときは、自分で塗装までしてしまうので、そのスキルを応用すれば簡単だった。

よし、準備は完璧だ。

寄宿舎の門を出て石畳の小道を歩いてゆく。学園は全寮制なので、生徒はみな寄宿舎から通学している。

小道を抜けて広い通りに出ると、真正面に学園の本校舎が見えた。通りの両側には白樺並木があつて、太陽の光を受けて影が動く模様を描いていた。

景色は驚くほど綺麗で、思わず感動してしまった。自分にそんな感情が残っていたのが驚きだが、あるいは生徒を演じていることが、心に影響を与えているのだろうか？

だが道を歩いていると、男子生徒がじろじろと見てくることに気が付いて、プルフォウは戸惑ってしまった。

ちっ、まさか自分の格好がおかしいのか？ ちゃんと軍曹に習った通りに制服を着ているし、髪もみつともないくらいには整えている。あるいはくせ毛を笑っているのか？ 潜入任務に従事しているので、周囲から浮いてしまうのはまずいことだった。スパイが目立ってしまったては都合が悪いからだ。

プルフォウは歩く速度を僅かに速めたが、前方から三人の男子生徒が近づいてくることに気が付いた。

「きみ転校生だよな？」

高学年の男子生徒が馴れ馴れしく話かけてくる。年上の男子生徒に囲まれると、さすがにプルフォウも戸惑ってしまった。基地では、自分以外の全ての人間が年上だから、おかしな話ではあるのだが。

「え？ あ、はい。先月この学園に」

「だと思った。見かけたことがなかったからさ」

プルフォウは、お前は全ての生徒を覚えているのか？ と反論したくなるのをぐっとこらえた。

「この学園には慣れた？ なかなかいい学校だろ？」

「え、ええ。だいぶ慣れてきました。本当に素晴らしい学園ですね」

「転校したばかりで何か困ってるんじゃない？ 良かったら助けになるぜ？」

「いえ、そんな。大丈夫です。お構いなく……」

「遠慮すんなよ。上級生の親切は素直に受けなくちゃな」

「でも……」

プルフォウは、じっと見つめてくる男子生徒から思わず視線を反らした。時間の浪費に、内心イライラとしてくるのを感じる。

「まだ友達や彼氏はいないんだろ？　ひとりだしな」

「狙っているやつは多いんじゃないの？　おまえ唾付けとけって」

「黙ってろよ！　余計なこと言うんじゃないよ」

男子生徒たちは勝手なことを言つて盛り上がっている。プルフォウはその場を離れようとしたが、一人が道を塞いだ。

「きみさ、モデルとかしてるの？」

「モデル？　モデリングのことですか？」

「してないなら俺が仕事紹介してやろうか？」

「……」

プルフォウは、男子生徒の言っていることが理解できずに困惑した。こいつらは工学科ということか？　いずれにせよ、任務に必要なことはしないつもりだった。

「放課後どこか一緒に行かない？　街を案内するからさ」

「すみません、放課後は用事があるんです。時間がなくて」

「その用事が終わってからでいいからさ」

「本当にごめんなさい！　急いでますので！」

「おい、名前だけでも聞かせてくれよ！」

プルフォウは、相手を殴り倒したくなる衝動を抑えながら、男子生徒の間をすり抜け

るようにして走り去った。

なんてしつっこいんだ！ 話を合わせてやればいい気になって。任務の邪魔だからどこかに失せろ！

プルフォウは強化人間なので、思い切り走ると普通でないスピードを出してしまう。だから、不自然にならないように速力をセーブした。加えて後を尾けられないように、目的もなく建物に入ったりする、監視を撤くためのスパイテクニクを使ったりもした。

「もう追ってこないようだな……。あんな奴らに付き合っていられるか！」

だが、これは良い警告になった。姫様と接触する際は、周囲に溶け込むような、自然な雰囲気を出さなければならぬだろう。他の人間に話を聞かれるのは絶対に避ける必要があるのだ。

『姫様の偽名はナツメ・スワンソンだったな。学年は七年生のはずだ』

地球連邦政府は、ザビ家一族を戦争犯罪人として断罪しようと考えているから、ミネバ・ラオ・ザビ殿下は追跡を逃れるために、この学園では偽名を使っていた。

十二年前の一年戦争当時、ミネバ姫は一歳の幼子だった。彼女の母親でありドズル・ザビ中将の妻ゼナ・ザビ殿下が、そのまま地球連邦軍に投降していれば、あるいはミネバ・ザビは人知れずひっそりと暮らすこともできたかもしれない。だがゼナ・ザビ殿下

は幼子を連れて小惑星アクシズに逃れ、そのまま体調を崩して病死してしまった。そして摂政であるハマーン・カーンがミネバ様を担ぎ出した。それが彼女にとつての不幸の始まりだったのだ。

プルフォウは、登校する生徒達に混ざつて学園に向かつて歩き続けていたが、前方に下級生の一団を見つけた。

「姫様がいる……」

プルフォウの感覚がそう告げた。

彼女も学園に来てから遊んでいたわけではない。学園に潜入した三日後にはミネバ・ラオ・ザビ殿下を特定していたが、それから一週間かけて準備したのだ。

ミネバ殿下の行動パターンを監視、分析した結果、接触するには登校時が一番良いと判断した。殿下は放課後活動として管弦楽部に所属しているが、練習を終える時間が日によつてまちまちだった。納得するまで演奏しているようで、かなり練習熱心だということが想像できる。真面目な性格なのだろう。

殿下のことは記憶しているが、十二歳に成長していることを考慮する必要があつた。接触するのは慎重に進めなければならぬ。ジオンの姫ではなく一般人として暮らして数年が経っているのです、突然ネオ・ジオン兵が現れれば動揺される可能性がある。繊細な性格なので、シヨックを与えないように気をつけると上官にも注意されていた。本

来そんなカウンセラーのような任務はパイロットの役目ではないが、しかし年齢が近いので気を許すということは確かにあるかもしれない。なかった。

プルフォウはあくまでミネバ殿下に自然に話しかけるために、数日かけて考えた手段を実行に移すことにした。

七年生に在籍する十二歳の少女ナツメ・スワンソンは、髪型を気にしながら歩いていた。このところ後ろ髪が少し跳ねてしまうのに困っているのだ。彼女はこれも成長して髪質が変わってきたからなのだろうかと考えたが、ならばいつこうに伸びない背丈も成長して欲しいと思わずにはいられなかった。

スワンソンは髪型を気にはしていたが、自分で髪をセットしているわけではない。亜麻色の髪の手入れは、いつも侍女にまかせている。

スワンソンはそういう身分の人間なのである。

ショートカットにした髪は、クルツと巻かれた前髪が特徴的で、エメラルド色の瞳は高貴さを感じさせた。目鼻立ちが整ったすました顔は、容易に人を寄せ付けない雰囲気醸し出していた。

スワンソンがこの学園に転校してから三年が経っていた。八歳までは宇宙暮らしをしていて、勉学のために地球に降りてきたのだ。この学園にはVIPの息子女が数多

く所属しているが、なかでも彼女の待遇は最高レベルのものであった。寄宿舎は最上級グレードの部屋をあてがわれ、警護と身の回りの世話をする侍女もいる。

そうした待遇にはそれだけの理由があつたのだが、このミーミスブルン学園の中で、ごく限られた人間だけがその事実を知っていた。

『だがこのような待遇、いつまでも続くものだろうか……?』

それがスワンソンの本音だつた。彼女はいつも漠然とした不安を抱えていた。

スワンソンの本来の人生は宇宙にある。地球は仮の住まいなのに、その宇宙からの情報が一向に地球へと伝わってこないのだ。もしかして、自分は見捨てられたのではないだろうか? そうした疑念をじぎるを得なかつた。

いつものように、そんなことを考えながらスワンソンが校門を通り抜けたとき、サークルの勧誘をする生徒達が数人いることに気が付いて、彼女は思わず警戒した。サークルの勧誘が本当に多いことにスワンソンは心底うんざりしていた。ほぼ毎週一度は何らかのサークルに勧誘されてしまうのだ。

男子生徒数人に囲まれたりするとたじろいでしまうが、思い切つて無視して歩き去ると諦めてくれる。歩き去つた背後で「本当に気取つた女だな。あれじゃ友達もいないだろ」と陰口を言われたりするが、彼女は他人とあまり深くつきあうのを避けているので気にはしなかつた。

そう、確かにこの学園に友人はいない。でも所属している管弦楽部で、幼いころから続けているバイオリンの演奏に集中していると、孤独なことはまったく気にならない。

親しい人間といえば侍女のクラークくらいで、あるいは自分を姫だと意識している感情が人との交わりを困難にしているのかもしれない。けっして性格が悪いとは思っていないが、人に尽くされることに慣れすぎているのは否定できないのだ。

「ちよつといいかしら?」

「えっ?」

スワンソンは早足で校舎に入ろうとしたが、初めて見る上級生がディスプレイシートを手にして話しかけてきたので、思わず足を止めてしまった。

「またか。うんざりする。話しかけてきたのは珍しく女生徒だったが、どうせサークルへの勧誘に決まっている。」

「なにかわたしに御用ですか?」

「突然でごめんなさい。あなたナツメ・スワンソンさんね?」

「……」

「わたしはマリーベル・リップル。よろしくね。ちよつと話があるのだけれど時間いいかしら?」

「サークルの勧誘ですか? でしたら、わたしは管弦楽部に入っています」

「あ、わかった？」

やっぱり。いつもと同じように断って同じように嫌われる。その繰り返しだ。

「わたし今度演劇サークルを作ろうと思ってるんだけど、あなたを一目見て気に入ってしまつて。演奏会で見たんだけど、綺麗な子だなくつて。お姫様の役なんかぴつたりだと思つたな」

「えっ？ お姫様？」

「興味ある？ ちよつとだけでいいから話を聞いてくれないかな。お願い！ 可愛い子に入部してもらえたら嬉しいな」

その上級生は、演劇同好会の勧誘デジタルシートを手渡してきた。シートを見ると、そこには『部員募集！ 違つた自分になりたい人はいませんか？ 演技で自分を解放しよう』という宣伝文句が、動くイラスト入りで書かれていた。イラストは姫と王子、馬だが、正直なところあまり上手くはない。

スワンソンは、サークルには興味がなかったが、演劇という言葉が気に留まつた。違つた自分になりたいとは興味深い。確かに自分は異なる身分を演じている。この今の学園生活そのものが演技だといえるのだ。

彼女は、その奇妙な符合が気にかかった。人生において偶然はあまり信じていない。この女性には別の意図があるのではないだろうか？

この上級生はまっすぐ自分に近づいてきた。そして『お姫様』と強調したのも気にかかる。悪い人物とは思えないが油断は禁物だ。地球連邦軍の罠という可能性もある。正体がばれたとは考えにくいものの、だとすれば言葉巧みに誘い出すつもりなのかもしれない。

スワンソンは思い切って尋ねてみることにした。

「あなたはなぜ、わたしが姫の役に興味があると考えたのですか？」

「そうね、仕草とか表情かしら。あなたはお姫様役として素人ではないと感じたの。

……前にお姫様を演じたことはない？」

スワンソンの頭の中で警告音が鳴り響いた。この女性はわたしの正体を知っている

!?

「演劇サークルの勧誘だから演技をするのですか？ 誤魔化しはやめなさい。あなたの

意図は別のところにあるのでしょうか？」

そう言い放つと、スワンソンは素早く逃げ出した。

「あ、ちがうの。待って！」

女の声を無視してスワンソンは走った。

自分の正体を知って近づいてくる人間などは、まず悪意を持つ人間に違いない。白昼堂々、誘拐するつもりか。とりあえず校舎に逃げ込まなければならぬ。

「ちよつと、危ないじゃない!」「おい走るなよ!」

周囲の声を無視して、スワンソンは校舎に向けて全力で走った。危機に直面したときは思い切りが必要だ。他人の迷惑など考えていられない。

小柄な身体を生かして、他の生徒が並んで歩く間を縫って走り抜ける。

だが一瞬背後を確認したのがまずかった。石につまづいてしまったのだ。

「あつ!」

体勢を崩して前方に倒れこんでしまうが、運悪く目の前には噴水があつた。まずい、このままでは真つ正面から石に激突してしまう!

スワンソンは頭を両手で抱えて、何度もしたことがある耐シヨック姿勢をとつた。

周囲から悲鳴があがり、いよいよ激突すると思つたとき、スワンソンは自分の身体が誰かにしつかりと受けとめられたことを感じた。

ドスツと鈍い音がして、二人はひとかたまりとなって地面に倒れ込んだ。

誰が助けてくれたのだ? 侍女のクラーラか? だが、彼女はずつと後ろにいたはずだ。では誰か別の生徒か。あるいはこの人間も敵で、自分を捕まえるために?

思わず見上げると、さつき声をかけてきた女が微笑みながら見つめていた。

笑う顔が綺麗な顔だと思い、そのとたん、顔が赤くなるのを自覚して俯いた。彼女は自分が噴水に激突しないようにクッションになつてくれたのだ。そして、いま自分を抱

き抱えている女の青紫色の瞳は、かすかに記憶にあった。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

スワンソンは女の身体から離れようとしたが、このまま抱かれているのが心地よいとも思ってしまった。

「わたしは決してあやしい者ではありません。……あなたの臣下です」

そういうと、その女はスワンソンを立たせた。

しかし、この女は後ろから追いかけていたはずなのに、前にまわって自分を受けとめるとは……。尋常でない身体能力だ。やはり？

スワンソンには思い当たることがあったが、女は制服の埃を払いながら立ち上がる、すばやくその場を離れようとしていた。

「あつ、待ちなさい」

「今は状況が悪いようです。また改めて参ります」

「そ、そう……」

「回りくどいことをして申し訳ありませんでした。……姫様」

『姫様』と呼びかけられて、スワンソンの全身の感覚が反応してぶるつと震えた。

客観的に考えれば、この高度に近代化された宇宙世紀に姫とは非現実的だとは思いますが、その事実は自分にとつてはまぎれもない現実なのだ。

「本名を教えてもらえないか？」

「はい喜んで。自分はプルフォウといいます。ジオンアフリカ方面軍に所属する大尉です。証にこれをあなたに預けます」

女生徒はバッグから小さな金属プレートを取り出すと、スワンソンに手渡して素早く立ち去って行った。スワンソンはそれが何であるのかをすぐに理解した。

侍女のクララがようやく追いつき、心配そうに駆け寄ってくる。

「ミネバ様！ ご無事ですか！」

「ああ、問題はない」

「対応が遅れてしまって申し訳ありません！ あの女生徒は何を？」

「クララ、心配はいらぬ。彼女は味方だ」

スワンソンの口調は変化し、威厳のある物言いとなる。いや、むしろこれが元々の彼女なのだ。

「ジオンのエージェントだと仰るのですか？ ですがそのプレート、あるいは危険物かもしれません。わたしがお預りします」

「そうして欲しい。しかし……どうやら宇宙そらに帰るときが来たようだ」

「宇宙へ？」

侍女が緊張した面持ちになる。だが学園近くでモビルスーツによる戦闘が発生したとき、こうしたことが起こる予感があったのだ。

そう、ナツメ・スワンソンからミネバ・ラオ・ザビに戻らなければいけない。彼女はジオンの忘れ形見、ザビ家の末裔ミネバ・ラオ・ザビなのだから。

「マリーベル・リップル！」

「えっ!? テイプレ・アン！」

プルフォウは、トラブルを嗅ぎつけた野次馬たちが集まってきたので、騒ぎの場を素早く離れたつもりだった。だが、副生徒会長のテイプレ・アンが鬼の形相で立ち回ったことに驚いてしまった。

自分の脚力についてくる!? 一般人にしては相当に運動神経が良い女だ。

「驚いたのは私ですわ。あなた、大勢の前で下級生の女子を押し倒すなんて破廉恥な！」

恥を知りなさい！」

「わ、私は彼女を助けようとしただけです」

「助ける? 誰から? あの子に襲いかかったのはマリーベルさんでしょう?」

「そんなわけないじゃない、失礼な! ……サークルに勧誘はしましたけど」

「よほど強引に勧誘したのでしょね。演劇同好会でしたっけ？　すでに演劇部はあるというのに新設したいだなんて。主役になりたいのでしたら、たいした目立ちたがりではなくて？」

「私は演技理論にメソッド法を取り入れてるので……」

「意味がわからないけど、部員ひとりでは許可出来ませんから」

「部員は揃えてみせます」

「強引な勧誘をまた耳にしたら、次は生徒会でとりあげますわよ？　気をつけることね。それと教室に入る前に制服の埃を払いなさい。みつともないわよ」

ティプレ・アンは、プルフォウの土で汚れた上着を指差し、馬鹿にしたように笑うと、校舎に向けて歩いていった。

ギスギスした会話を終えて、プルフォウはふうつと息をつく。

『あいつ、余計なことばかり言ってくるな。邪魔な奴。しかし、下級生の女子を押し倒しただなんて言いふらされたらまずいぞ。エミリー軍曹によれば、生徒という連中は噂好きらしいからな』

この極秘任務は目立たぬように遂行する必要があるので、余計な揉め事を起こしてしまつたとプルフォウは反省した。今後は、十分に気をつけて姫と接触しなければ。

『それにしても、姫様のお身体は柔らかかつたな。まだ子供らしいというか……。いや

いや、私はなんてことを考えているんだ！　これは軍法会議物だぞプルフォウ！』

プルフォウは妄想を振り払うことに苦労した。腕に残る姫を抱いた感触に気を取られて、時間が過ぎるのを忘れてしまったのだ。

彼女は時間厳守を重視しているので、これまでブリーフィングや作戦に遅れたことはなかったのだが、この後、一時限目の授業に遅刻することになったのである。

第16話 「脱出計画」

15

ナツメ・スワンソン―正体はジオン公国を統べていたザビ家の末裔ミネバ・ラオ・ザビーは、寄宿舎の部屋に戻るとすぐに侍女クララに金属プレート調べさせた。彼女は、その類いの調査、分析に長けているのだ。

爆発物が含まれている可能性を考慮して、クララは念のためマイクロアナライザーやガスクロマトグラフィによる検査も行った。検査の結果、火薬が付着していることがわかったが、それこそが、この金属プレートの由来を証明するものだった。

はたしてプレートの正体はネオ・ジオンの兵士認識票だった。表面には個人の生年月日や識別ナンバーが刻印されているが、内蔵された電子チップにも個人情報や身体的なデータが記憶されていて、接触してきた女生徒がネオ・ジオン兵士であることを証明していた。兵士認識票を他人に預けるといふことは、ジオン兵士にとつては身柄を預けることにも等しいのだ。命を捧げるといふ覚悟であり、忠義の証なのである。

ミネバはプルフォウの認識票を手にとると、その重さを感じとった。明らかになったプロフィールから、彼女の背景にある人生を想像した。

認識番号ZSF-0965004プルフォウ。《プル》という名前には聞き覚えがある。ミネバは、自分と同じくらいの年端もいかなない少女たちが集められて、ニュータイプ部隊と称する特殊部隊が編制されていたのを思い出していた。

ニュータイプとは認識能力、予測能力が異常に優れた人間のことだ。一説にはテレパシーのような能力も有ると言われていたが、ニュータイプのような人知を超えた能力は未発達の子供こそ発現しやすいというのが、彼女たちが集められた根拠だった。とりわけ女性が集められた理由は、ジオンで最も成功したニュータイプがララア・スンという少女だったことに他ならない。

そして《プル》とはジオンが研究、開発していた、人間をベースとした類人兵器、強化人間のコードネームだった。4とはプルシリーズの四番目の試作品という単純なネーミング……。

ミネバは研究とか試作という言葉に、生理的な嫌悪感を覚えた。人間を実験動物のように扱うなどと。彼女たちは自分より年上だが、それでも当時は十く十一歳くらいだったはずだ。そんな少女を科学者たちが身体的にも精神的にもいじくりまわし、プライバシーも尊厳も切り刻んで類人兵器として改造したのだ。

強化人間だけではない。コロニー落としや無色無臭の毒ガスG3、核兵器など、非人道的な戦争犯罪を数多く行ってきた軍事国家の姫だという事実は、ミネバの心をずっと苦しめていた。

だから、それは演技だったかもしれないが、プルフォウの表情が明るい感じだったのは救いだった。強化人間といえば、もっと恐ろしい顔つきをしていると思っていたのだ。見た感じは普通の女学生にみえる。

「クララー、プルフォウ大尉を探してわたしの部屋に呼んで欲しい。彼女は、おそらくこの数週間以内に転校してきた女生徒だ。探すのは容易だろう」

「わかりました」

プルフォウがジオン残党軍からの使いで、その指令が宇宙からもたらされたものだとすると、事態は急を要する。

「彼らの意図を確かめる必要がある」

その日の夜、プルフォウはミネバの寄宿舎にやってきた。クララーがプルフォウをすぐに探し出して連絡をとってきたのだ。クララーも姫の侍女だから優秀なエージェン卜なのだろう。

だが寄宿舎といってもVIP待遇のミネバは建物が違うので、立ち入り許可を得るの

に少し時間がかかってしまった。嚴重なチェックを抜けて六階までエレベーターで上がったプルフォウは、少し緊張してミネバの部屋へと入室した。

ミネバの部屋は、あまり装飾品や飾りがなくシンプルではあるが、置いてある家具からは品の良さを感じさせた。かなり高価な一品に違いない。

「姫様、プルフォウ大尉ただいま参りました」

「ご苦勞大尉。夜分遅くにすまぬな……」

この亡国の姫君の隠れ家において、二人はもう上級生と下級生の間柄ではなく、姫と家臣の間柄だった。

プルフォウは時間を無駄にはせず、ただちに自らの任務を簡潔に説明し始めた。

ミネバはしばらく黙って聞いていたが、納得できない気持ちを隠すことは無理なようだった。

「やはり、わたしにこの学園を出ろというのだな？　しかし、ずいぶんと急な話だ。理由を聞かせてもらえるのだろうか」

ミネバの言葉には威厳があり、有無を言わせぬ力があつた。

「はい、姫様」

プルフォウはミネバ・ザビに敬意を示すために片膝をつくと、知っていることを包み隠さず話し始めた。

「この数年間行方不明だったシャア・アズナブル大佐が、宇宙で新生ネオ・ジオンを組織しつつあるのです。シャア大佐の新生ネオ・ジオンは、アクシズとは成り立ちを異とするダイクン派の組織で、月の軌道外で艦隊を建造して地球圏に戻り、いまは旧式のコロニーを拠点としております。そして姫様を保護しろとの命令は、他でもないシャア大佐の指示なのです」

ミネバ・ザビのエメラルド色の瞳が驚きで丸くなる。シャア・アズナブル大佐は彼女がよく知る人物だ。

「シャアがな……信じられぬ話だ。シャアはハマーンを説得して、わたしを戦争に巻き込まないために地球に逃がしてくれたのだ。その彼が再びわたしを宇宙に呼び戻そうというのか？ どういうことなのだ？」

「申し訳ありません姫様。情報漏えいを防ぐためにわたしにも詳細な情報は知らされておりません」

「そういうやり方は知っている。区画化された情報というものだな。秘密組織めいたやり方だ。だがなプルフォウ大尉、これは地球連邦軍の罠ではないのか？ わたしを捕えるためのな」

ミネバの境遇は、常に疑うという癖を彼女に植え付けた。小惑星アクシズを離れて地球へ向かうことになったとき、あらゆる人間が彼女に接触してきたのである。そしても

ちろん、彼ら、彼女たちは、ミネバの境遇を哀れんで助けようとしたわけではなかった。協力するふりをしつつ、ザビ家の遺児を地球連邦軍との取引の材料に使おうとしたり、ジオン残党と取引をするための便宜をはかってもらおうとするなど、ミネバを上手く利用しようと画策したのである。

そんなことが続くと、常に自らの状況や生まれた感情を客観的に分析するようになってしまう。

「確かに可能性はゼロではありませんが、それはないでしょう。我々は三種類のルートからダイクン派の暗号化された通信を受け取りましたが、その全ての通信がデータ的に一致することを確認したのです。つまりジオンの正規の通信だということですよ」

「シヤアと話したのはのか？」

「いえ、シヤア・アズナブル大佐から直接に連絡はありませんでした。ですがその通信では、近々ダイクン派は決起し、地球連邦に対して攻撃をしかけるとの警告が含まれておりました」

「警告？ 味方に警告とはどういうことなのだ？ ……まさかコロニー落としを？」

「暗号名『フィンブルの冬』としか伝えられていませんが、わたしもコロニー落としの可能性は高いと思います。姫様を地球から脱出させようと命令されたことが、その何よりの証拠でしょう」

「あれほど地球の汚染を憂いていたシヤアがコロナー落としとはな……信じられぬ」
「シヤア大佐とは親しかったのですか？」

「ああ、短い間だったが良くわたしの話を聞いてくれた。赤い彗星として恐れられてはいたが、優しい男だった」

「だとすれば大佐には何か別の目的があるのでしょうか」

プルフォウは顔をあげて自らが仕える姫を見た。彼女は十二歳とは思えぬ口ぶりで、さすがにジオンの姫としての威厳がある。だが、いまはかつての側近であった英雄シヤア・アズナブル大佐を思い出し、彼を懐かしみ心配している。プルフォウはミネバの感情の乱れを感じた。

優しかった父親のような男が変貌してしまう。それは耐えられないことだろう。シヤアだけは違うという期待もあったのかもしれない。なにしろ彼女の周りの大人たちは、争いの原因ばかりを作ってきたのだ。

「そうだな、分かった。詳細は宇宙に出てから直接シヤアに聞くとしよう……」
ミネバのシヤアへの想いは複雑なのだということが、プルフォウにも分かった。

「姫様、それでは？」

「プルフォウ大尉、宇宙へ戻る理由は理解した。だが問題は地球を脱出する方法だ。貴公の計画を聞かせてもらいたい」

「わかりました。これもまたわたしの担当範囲内で恐縮なのですが、ダイクン派が手配するシャトルが用意された段階で連絡がきます。わたしがモビルスーツを用意しておりますから、これに姫様に同乗して頂きます。打ち上げ場所まで、このわたしがお送り致します」

プルフォウはかしこまりながら話したが、姫に報告するにはかなりずさんな内容だということとは自分でも分かっていた。

「それだけなのか？」

「はい、その通りです」

しばし部屋に沈黙が訪れた。

「困ったものだな大尉。通常、軍事作戦とはもつと綿密なものではないのか？ お前の話すプランは、とうてい作戦とは言えないものだ。まず失敗するだろう」

臣下が提示した脱出計画を落第点だと断ずる。これがジオンの姫としての威厳なのだ。プルフォウは思わず恐縮してかしくまってしまった。

「姫様、不肖なわたしをお許してください。ですが情報漏れを防ぐために、あえて綿密な計画を立てていないのです。連邦の目を盗んで宇宙に上がらなければいけないので、搭乘するシャトルも直前まで決定出来ませんが、臨機応変に対応致します」

「それは理解できるがな……」

「どうかご安心ください姫様。そのためにわたしが選ばれたのです」

「だが不確定要素が多すぎる」

「姫様、まだ脱出までには期間に余裕があります。その間にも情報収集し、作戦を完全なものにアップデート致します。完璧な計画を立ててみせます」

「おまえはそういう能力を備えているということだな？ 精鋭というわけだ」

「この身にかえても、必ず姫様を宇宙に脱出させる所存です」

プルフォウは深々と頭を下げて自らの決心を示した。最初は嫌々ながらやって来たとはいえ、自分は任務に忠実なネオ・ジオン軍人だ。それをこれまでの作戦でも証明してきた。今回も自らの能力とプライドをかけて作戦を成功させるつもりだ。しかも今回の作戦は、最重要人物であるジオンの姫君を護衛し、脱出させるのだ。これこそ元ネオ・ジオン親衛隊の自分にふさわしい任務なのだ、プルフォウは姫を目の前にして改めて感じた。

「貴公は忠義に厚い、信頼できる兵士のようなだ。そのようなものが側にいるのは心強いものだ」

姫の賞賛に、プルフォウは自分でも驚くほどに感激し、敬意をもってミネバの手をとった。ミネバ・ザビ殿下に信頼されたということがとても誇らしい。それはジオンの

軍人なら全ての人間が望むことだ。幸せに感じるとともに、姫様の期待に応えるべく身を引き締める。

そのときプルフォウはミネバの手が僅かに震えていることに気がついた。

姫様、不安がっていらっしやる……？

強がってはいるが、姫様は十二歳の少女。自らの運命が大きく変わろうとしているとき、すぎるものが欲しいのだと理解した。それが、このわたしなのだ。

プルフォウは気丈に振る舞うミネバの気持ちを慮り、自分の身を捧げても良いと思っ
た。

「ご安心ください姫様。このプルフォウが命をかけてお守り致します」

プルフォウの力強い言葉に、ミネバは納得したように頷いた。

ミネバは寂しかった。

いったいいつまでこの学園にいれば良いのだろうか。当初はすぐに迎えが来ると思っていたが、すぐに一年が過ぎた。そして風の便りで、後見人であるハマーンが戦死し、さらにはアクシズが壊滅したことを知ったとき、彼女は絶望して打ちのめされた。もう自分には帰るところがなくなってしまった。

いつかはこの学園を出て行かなければならない。だが、いったいどこに行けばいいの

だ？ 何の能力も才覚もない。あるのはちっぽけなプライドだけだ。好きなバイオリンを練習してバイオリン奏者になったらどうだろうか……？ それには技術も覚悟も足りないし、もつと才能のある人間には全くかなわない。とうていかなわぬ非現実的な夢にすぎない。

ならば地道に大衆に混じって働くか？ もし市井の人間として働ければ、いずれザビ家の生き残りという自分の正体がばれて、それを知った恨みを持つ人間に袋叩きにあい殺されてしまうのではないだろうか。あるいはもつと酷いことも。

そう思うとミネバは自分の運命に背筋が寒くなった。

業が深い家系に産まれてしまった運命を呪うには、彼女はまだ純粹すぎた。呪い方すら分からなかったのだから。

「マリーベル様！」

プルフォウが部屋を出ると、クララ少尉が後を追いかけてきた。

ミネバの侍女であり警護を担当しているクララは十六歳で、学年的にはプルフォウの二つ上になる。だがネオ・ジオンでの階級はプルフォウの方が上だ。

クララの二人だけで話したいという雰囲気を感じて、プルフォウは寄宿舎近くの人気の無い場所に移動した。

「クラーラ少尉。まだ何か？」

「あ、いえ。名高い方にお会いできて光栄です。アフリカ方面でのご活躍もお聞きしています」

「そうか、ありがとう」

「姫様を警護する人間として、あなたのような英雄のお力添えがあれば安心できます」

「少尉、それは買いかぶりすぎだよ」

「えっ」

「褒めてもらえるのは嬉しいが、わたしは英雄なんかじゃないよ。昔所属していたニュータイプ部隊も全滅さ。ずいぶんコストをかけた割には役立たずだったね」

「そんな……」

「まあ、ニュータイプや強化人間が過剰評価されていたんだよ。子供だけで部隊を編成するなんて無理があったのさ。能力があつても経験がなきや駄目だということが身に染みだよ。しかもだよ、状況も良く分からないまま内輪の争いの尻拭いをさせられたんだ。結局、戦っていた相手は自軍のエースパイロットだったんだから。戦死した姉や妹はやりきれずに死んでいったのかなと思ってしまうんだ……」

「言葉もありません」

「いや、愚痴を言つてすまなかつた。その意味では、姫様を警護できるのは本当に誇ら

しい任務さ。貴公はいつから姫様の警護を？」

「四年前からです。ハマーン閣下の命を受けて、ミネバ様が地球に降りることになって以来、この任務を継続中です」

「貴公の忠義は称賛に値するよ。アクシズが連邦軍に落とされてからは不安だったろうね。本国からの援助はあったのか？」

「はい。アクシズが落ち、ハマーン閣下が亡くなられたときは正直どうすればいいのかと……本当に困惑しました。ですが、幸いサイド3本国からの支援の申し出があったのです」

「ジオン共和国に、ジオン公国復活を目指す勢力がいるのは知っている。だが、それを目的として姫様を上手く利用するつもりなのかもしれない。お互い苦労するな」

ジオン共和国とは、一年戦争後にサイド3に樹立された新政府で、地球連邦政府とは和平協定を結んでいる。一定の独立権も有し、武闘派ともいえるネオ・ジオンとは一定の距離を置いている穏健派だ。少なくとも見かけ上はそうだ。

「はい。ですが、わたしはミネバ様をお守りできることが何より嬉しいのです。ミネバ様はジオンの希望なのですから。利発な方です。必ずスペースノイドを良い方向に導いて下さると信じています」

「そうだ。わたしも希望を見つけることが出来るよ。後ろ向きの任務よりよほどいい

「や」

「そのお気持ち、良く分かります」

ジオン公国敗北から十二年余、地球圏の趨勢は定まりつつあったが、二人はお互いネオ・ジオンに属する軍人として、時代に翻弄されながらもスペースノイドの理想を求める姿に共感を覚えた。

「もう遅いから姫様のところへ戻った方がいいんじゃないか?」

「はい、そうします」

だが、クララーは少し 言い辛そうに話を続けた。

「ですが、もうひとつだけ。先程の脱出プランの話ですが、差支えなければご意見させて頂いてもよろしいでしょうか?」

「ああ、かまわないよ」

「あえて詳細な作戦プランは設定せずに柔軟に対応することですが」

「そうだ。姫様にも申し上げたが、脱出用シャトルの発射スケジュールが不明でね。地球の周回軌道に乗るには打上げウインドウの制限があるからな。どこから宇宙にあるのか分からない以上、詳細なプランは立てにくい」

打ち上げウインドウとは、ロケットやシャトルが打ち上げられなければならない時間帯のこと。宇宙ステーションや他のシャトルと正確にランデブーするためには、軌道計

算によって求められた時間に発射させる必要がある。

「それは理解できませんが、失礼ながら少し甘い計画ではないでしょうか？ ミネバ様を連れてお逃げになるのです。移動速度や移動距離は、大尉お一人の場合と比較してかなり低下すると考えられます。周囲の状況に対応できる余裕がありません」

「確かにな。貴公には考えがあるようだな？」

「はい。こういう状況の場合、作戦の起点を中心に円を描き、その範囲内に中継ポイントやベースキャンプをいくつか設定すれば、作戦成功の確率は飛躍的に高まります」

「なるほど、それはわたしも考えていた。考慮するべきことだな。もちろんこれから脱出ルートを検討するし、基地からの追加支援も頼むつもりさ。支援や脱出に使用する機材とかな」

「基地との通信手段があるのですか？」

「隠しているモビルスーツに備え付けの秘話通信装置があつてね。必要な物資は偽装して運び込んでもらう予定なんだ。それに脱出プランの作成には貴公にも手伝ってもらいたいと考えている。脱出の際には、同行してもらおうかもしれないから。わたしよりも詳しいんだから」

「はい。わたしの知りうる限りの情報と知識を提供させて頂きます」

「期待してるよ」

「了解しました。……でも」

「なにか他にも問題点が？」

「いえ。あくまで個人的な疑問なのですが、ミネバ様が宇宙に上がられた後、彼女のお立場はどうなるのでしょうか？　それが本当に心配で……」

「何を心配する？」

「はい。シヤア・アズナブル大佐が新しい軍を編成しているのですが、ザビ家はシヤア大佐の仇ではないのですか？　彼はザビ家の遺児ミネバ・ラオ・ザビを大切にするのでしょいか？」

クラーラは胸に手をあてて、心から心配そうな表情でプルフォウを見つめた。ミネバの運命が気になって仕方が無いといった様子だ。

「そういうことか……。シヤア大佐がアクシズから姫様を保護したとは言われているが、大佐の正体が、ザビ家に暗殺されたジオン・ダイクンの長男キャスバル・レム・ダイクンだということは有名な話だ」

「では大佐が宇宙にミネバ様を呼び戻す意図というのは……」

「いや、シヤア大佐はそんな小さな男じゃないよ。実際アクシズでは王室警護官を担当されていたし、姫様をとても可愛がられていたから。まさかスペースノイド独立闘争の人身御供にしようとは考えていないだろう」

「そうでしょうか？　自分はそれほどシヤア・アズナブルという人間を信用できません。一時的にでも地球連邦軍に属するなど。噂ですが、一年戦争ではガルマ閣下やキシリア閣下を謀殺したとか。裏切りが多すぎます。ミネバ様を言葉巧みに宇宙に誘い込み、個人的な復讐を遂げようと考えているかもしれないんです。酷い仕打ちをするつもりなんです」

「おいおい、それは考えすぎだろう」

「あのような男は信用できないんです。ミネバ様はもう十二歳。身体的にも子供から少女に成長なされてます。……シヤア大佐は少女趣味という噂もあります。汚らわしい！　信用なりませんか、そんな男が！」

その剣幕にプルフォウは気圧されたが、男という単語に妙なアクセントがあつて、それに違和感を覚えた。彼女は個人的な思い、恨みなどから、男を信用してはいないんじゃないかと感じたのだ。言うべきか迷ったが、作戦に影響があるようなら問題なのだ。

「クラーラ、言い辛いなら応えなくていいんだが……男性が嫌いなのか？」

「えっ」

「いや、そう感じただけだ」

「嫌いだとか好きだとか、くだらないです……。男は信用できない、ただそれだけなのです。もちろん作戦に感情は持ち込みませんから心配ご無用です」

「そうだな。でも、それだと学園生活でも大変だろう。男子生徒も多いからな」

「無視すればいいんですよ、あんな馬鹿どもは！ くだらない連中ですから。それにわたしはミネバ様さえいらっしやればそれで良いのです」

「そうか。だったららなおのこと、わたしと貴公とで間違いなく姫様をお守りしなくてはな」

「そうですよ！」

「では、これでわたしは失礼するよ。また連絡する」

「分かりました」

人目に付かないよう足早に歩き去るプルフォウを、クラークはじつと見つめて見送った。

第17話「渦中の転校生」

16

学園はジオンの基地とは比較にならないほど綺麗で、このままでは軍人としてのスキルや勤が鈍ってしまうと心配になるほどに快適だった。

でも、日々の学生生活をこなすことはなかなか面倒なことだと実感する。

授業をさぼったら教師から素行の悪い生徒として目を付けられてしまうので、なるべく模範的な生徒として振る舞ってくれというのがエミリー軍曹の指示だったからだ。

真面目に任務をこなすのは軍隊生活で慣れてはいても、生徒らしく振舞うのが骨が折れる。授業は実践的でないから退屈だし、生徒たちはなぜ無意味な無駄話ばかり好むのか。

その意味では、体を動かすのは気晴らしになる。今日の一時限目は体育で、カリキュラムは水泳だ。

「水泳ね……」

プルフォウはスポーツバッグから水着を取り出しながらつぶやいた。大勢でただ漫

然と泳ぐだけのことが授業になるとは、彼女にとつては少し驚きなのだ。

それを聞いたクラスメイトのジェシカが意外そうに尋ねてくる。

「どうしたの？ プルっち実は水泳苦手だったり？ サイド3でも水泳の授業はあったよね？」

しまった。水泳の授業を受けたことがないとばれたら怪しまれてしまう。だが大勢と一緒にプールで泳ぐのは、アクシズでの水中訓練を除けば初めての経験なのだ。

水中訓練というのは、水没したモビルスーツから緊急脱出するとか、敵地でのサバイバルのために潜行するとか緊迫したシチュエーションばかりで、とても水泳とは言えないものではあった。

「あ、もちろん授業はあったわ。ただ、ひさしぶりだなって」
プルフォウは慌てて取り繕った。

「ふーん。じゃあ泳ぐのは好き？」

「うん。人工の海があるコロニーで泳ぐこともあったから。でも授業は宇宙遊泳の方が多かったかな」

それは嘘ではない。パイロットの訓練では宇宙遊泳は必須なのだ。

「宇宙遊泳!? すごいね！ プールで泳ぐのとは全然違うでしょ？ クロールとかで泳げるの？」

「ううん。宇宙じゃ手足を動かしても進まないのよ。空気も水もないから、噴射装置で進むの」

「へえ、専門的だね。やっぱり कोरोニーの授業は違うんだね」

「そうなの……」

「まあ幼稚で退屈な授業に思えるかもしれないけどさ、プルっち我慢して、わたしたちにちゃんと付き合ってよ！」

「あはは」

ジェシカの話では、ペアになって息継ぎの練習をしたり、基礎からと泳ぎ方の練習をしたりするらしかった。確かに彼女が言うとおりに子供っぽくて、もどかしい内容だ。

いまだって教室は騒がしく、クラスメイトたちはスタイルがどうの下着がどうのと、お互いをからかいあっている。

「(でも本当に泳ぐのは久しぶりだ。せいぜい楽しませてもらうさ)」
プルフォウは水着に着替えるために制服と下着を脱いだ。

そんな彼女の思い切りの良い脱ぎ方にジェシカは驚いてしまう。

「わっ、プルっち！ 少しは隠さないの」

「えっ？ だって、ここには女子しかいないじゃない」

「そうだけだね。だけどプルっちは可愛いから……」

そのとき「どっか行け！ 変態ども！」という誰かの叫び声が聞こえて、プルフォウは飛び上がるくらい驚いてしまった。

「な、なに!？」

「やっぱりか!」

男子生徒の数人が、廊下から女子が着替えている教室内を覗こうとしていたのだ。教室のドアを開けて、一人の女生徒がこぶしをふりあげて男子生徒を追い払う。怒声が廊下に響き渡った。

ジェシカがプルフォウの身体をタオルで隠した。

「あ、ありがと……」

「気をつけなよプルっち」

プルフォウは男子たちの幼稚さ、明け透けさに呆れてしまった。

馬鹿じゃないのか？ 知能が低いのだろうか、このくらいの年齢の男子は性欲が異常に旺盛ということなのだろうか。だとすれば少々危険かもしれない。他の女子はどうしているのだろうか？ だが女生徒の剣幕をみれば心配はいらなとも思えた。あれはネオ・ジオンの兵士より迫力がある。ネオ・ジオンにスカウトしても良いくらいだ。

「いつもこんな感じなの？」

「あの馬鹿たち、いつもは上級生とか覗きにいつてるらしいよ。でもさ、今日は100

%あんたのせいだつて！」

「ほ、ほんとに？」

「だから言つたじゃん。プルつちの着替えを見たくて湧いてきてるんだよ。美人の転校生のさ」

プルフォウは思わぬ言葉に自分の顔が熱くなるのを感じた。

転校してきてすぐにジェシカに勝手に付けられたあだ名にも困ってしまうが、面と向かつて容姿を評価されるのが何よりも恥ずかしかつた。およそパイロットとしては最も縁遠い評価基準だ。頼むからやめてほしい……。

「わ、わたし可愛いだなんて言われたことないから」

そんなプルフォウの言い訳に、ジェシカは世の中のことが何も分かってないというような顔で

「いやいや、自分の魅力に気づきなさいよ……うらやましい。わたしだつてプルつちの裸みたいくらいだよ。綺麗だし、なんでそんなにスタイルがいいの？ このデブスのお尻なんか悲惨だよ」

と言いながら、ジェシカは確かに少し不格好な自分のお尻の肉をつまんでみせた。

「そんなにスタイル良いとは思わないけどね……あ、でも毎日運動はしてるかな」

そう言ってみたものの、パイロットとして日頃から体を鍛えている身体が、均整がと

れているのは当たり前だとは思った。

常に死と隣り合わせにある兵士と、怠惰な日常を過ごす女生徒。その肉体が同じであるわけではない。体を適切に鍛えていれば、動作の正確さや耐久力、集中力など、ギリギリのところまで敵との差が生まれる。そのちよつとしたアドバンテージが生死を分けるのだ。

死神が等しく戦場に舞い降りるならば、その振り下ろされる大鎌を避けることが出来るのは、唯一鍛錬だというのがプルフォウが戦場で学んだことなのだ。

「なるほどね、納得だよ。見た目は細いのに、けつこう筋肉ある感じだよね」
「そうかしら?」

プルフォウは窓や廊下を見回し、加えて戦闘以外ではあまり役には立たないが、ニュータイプ能力で殺気や邪念などを確認して、教室を覗いている男子がいないことを確かめると、再び下着を脱ぎ始めた。

さつきまでなら気にせずさつきと脱いでしまったところだが、覗かれていたと意識するとさすがに気にしてしまう。

「それに胸も大きいし」

「ひえっ!?!」

プルフォウは背後から胸を掴まれて思わず妙な声をあげてしまった。その艶やかな声にクラスメイトが一齐に注目する。反射神経が優れている彼女も、さすがに着替え中は無防備なのだ。

「張りがあるね。すごい弾力！ わたしが揉んだら反発力でもっと大きくなるんじゃないの〜？」

ジェシカはプルフォウの乳房を、リズムカルに弾ませる。

「あんっ、や、やめてっ！」

ジェシカを近接格闘で無力化しないように自分を抑えるのは、かなりの精神力を必要とした。もう少して彼女の首の骨を折るところだった。そんなことにも気付かずに、はしゃぐ二人を見てクラスメイト達が呆れている。

理性もなく、欲望のままに振る舞う。この子供たちは本当に愚かだ。いや、もしかするとエルマン中尉や、基地の他の人間もそういう要素があるのだろうか？ 本当は欲望だらけで、だが理性が欲望を抑えているという感じなのか？

基地に帰ったら少し注意して観察してみようと、プルフォウは胸を揉まれて身じろぎしながら思うのだった。